
星光の魔王-シュテル・ジ・エルケーニヒ-

星朔

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

星光の魔王・シュテル・ジ・エルケーニヒ・

【Nコード】

N4448Z

【作者名】

星朔

【あらすじ】

次元断層に巻き込まれ死んだ1人の平々凡々のヲタクが居た。そのヲタクは無限大数に存在するとある高町なのはに転生を果たし、リリカルマジカルな宿命へと立ち向かっていく。リリカルマジカルもとい『リリカルバイオレンスマギウスなのは』、始まります。？注意？この小説のなのはは血みどろの戦いに身を投じる為、そんな無様ななのはさんが嫌だ！という方は閲覧をお控え下さい。（タイトル一文字変えました）

プロローグ 高町なのは、始めました。(前書き)

導入というかテンプレですね。

プロローグ 高町なのは、始めました。

皆様初めまして、こんにちは、こんばんは、おはようございます。

高町なのは、3歳です。

いきなりのご挨拶に、3歳児ならぬ流暢で小難しい言い回しをしています、これが私の素です。

何故私がこのような行動をとったのか、簡潔に述べてしまえば、私が転生者であるからです。転生の詳しい経緯は、アホの子戦記をよるしく！

すみません。おかしな電波を受信しました。ちなみに私はヒーロー戦記からのファンです。

話しが逸れてしまいましたね。

とにかく、つい今し方、私は私が転生者である事を思い出したのです。

ですがまさかりリカルマジカルの世界で、しかも主人公の高町なのはに私になってしまふとは夢の端にも思いはしませんでした。

閣下、予想外にも程があります。

しかし驚いている場合ではありません。

このまま行けば、5年後、私はリリカルマジカルな戦いに身を投じなければなりません。

正直、自信はありません。ボディ的に言えば恵まれているのでしよう。しかし精神的には平和大国日本在住の自宅警備員。

こどもなりの怖いもの知らずに見え、正義感もあつた高町なのはならつゆ知らず。私のような小心者では万に一つも戦う心はないでしょう。リリカルマジカルは見ているから良いのであつて、実際にやれと言われてやりたいとは思いません。

魔法には憧れますが、私は平穩無事に2度目の人生を謳歌したいのです。それが私に出来る、この高町なのはへの贖罪なのでしょうから

|||||

1年が経ちました。

私はやはり高町なのはでなく、正しく高町なのはなのだ、この1年間で思いました。

この1年。私は元来のラノベ好きから発展し、良く本を読むようになりました。しかし読むのは魔法ファンタジーな物ばかり、父様や母様におねだりして、魔装機神や第 次シリーズを買って貰ったり

しながら、スケッチブックにはわけわかめな発想や設定、理論ばかりを書いて、さらには電子機械系の本を読んだり、ロボットヲタクで物静かな子となっていきました。

本を読み、電子機械系の参考書を読み、理解する為、必然と理数系と文系は得意になったりはしたのですが、運動はからつきしダメでした。走れば転ぶ、ボールで遊べばボールに遊ばれる始末、これ程までに運動神経がダメだったとは思いませんでした。特に私の場合は男の大人の運動神経感覚がまだ抜けきらない為に余計ダメなのではないかと思ってしまう。

運動出来なら、出来ないなりにやるしかない、私は方向転換。腕立てや腹筋背筋スクワットを敢行し、少しでも太らないようにします。喫茶翠屋は乙女の敵。その経営家である高町家は、元男の私でも気になるくらい3時のおやつが豪華絢爛です。代わりに乙女にとってはカロリーとの戦いという聖戦を強いられますが……。よく高町なのはは太りませんでしたね。

私でさえ2ヶ月+1キロに抑えるのがやっとだというのに。

4歳の一年間は、とりあえず魔法的な物を遊びながら調べ、カロリーとの大合戦の日々でした。

|||||

5歳になりました。

この年は幼少期のワーストスリーの年でしょう。

幼稚園から帰ってきたら、いつも迎えにきてくれるはずの母様は居ず、代わりに姉様が私を出迎えてくれました。しかしその表情には覇気がなかった。

家に着いて、挨拶をしてもシンっとして、姉様の返事以外には聞こえませんでした。

母様は店の方なのでしょうか？

しかし、昨日から父様が出掛けるということ、昨日今日明日の3日間は店を休業にすると一昨日の夜に聞きましたから、母様が居ないのは買物にでも行ったのでしょうか。でもそれならば姉様に覇気がないのが不自然に思えます。私は自慢じゃありませんが、姉様より中身年齢は大人です。自宅警備員でも人の顔から様子を読み取るくらいは出来ます。

そして覇気のない姉様の顔は、まるで何かを我慢しているかのようでした。

私は姉様には事情を聞かずに、自分の部屋へと向かいました。

私の部屋は、間取りこそ高町なのはのへやと同じなのでしょうが、一言で言い表せば、女の子らしくはない部屋でしょう。

プラモが飾っており、部屋のポスターもスパロボですから。

机に向き、スケッチブックを開き、また新しい設定や絵を書いては、息抜きに プレイしたりして過ごしました。

そして夜になると兄様の気配がし、そして母様の気配も家に帰ってきました。しかし、2階にまで漂う言い知れぬ感覚に、私は1階の様子を見に行こうとは思いませんでした。

気づいたら私はそのまま寝ていて、翌日となっていました。誰かに起こされた感覚はなかった為、いよいよおかしいと思い、1階に降りました。しかし1階はものけのから。

テーブルの上にはラップ掛けされた食事と、しばらく忙しくなるといふ旨の書かれた母様の置き手紙。

おそらくよっほど忙しかったのだろう。朝食はあっても、お弁当がなかった。

とりあえず朝食をレンジで温めつつ、冷蔵庫の中身から適当に食材をチヨイス。

この身体になつてから料理はしていませんが、2年のブランクなどなんのその。自宅警備員は伊達や酔狂ではありません。

フライパンに油を引き、出汁と刻んだニラを入れた溶き卵を投入。出汁巻き卵にします。

朝食をつまみながらお弁当を作る。少し行儀が悪いですが、御勘弁を、幼稚園の始まりは遅くとも、私の5歳児の身体ではこうでもしないと間に合わないのです。ちなみにキッチン周りには私の足場とする為、イスがズラリと並んでいます。

そして1人で迎えのバスに乗り、幼稚園から帰ってくれば姉様の迎

え、家に到着後は部屋へ、そして寝倒しての日々が一週間続いたあと、いよいよ色々とも私も気になってきてしまい、姉様にそれとなく尋ねてみたのですが、はぐらかされてしまいました。

しかし、最近の高町家はおかしい。家で母様を見かけることはなくとも、朝食やお弁当に夕食があり、置き手紙もある分、家には帰ってきている様子。

姉様は毎日私を出迎えてくれますが、日に日に顔が悪くなっている様子。

そして一番は兄様でしょう。日に日にピリピリとイラついているようで、道場の方から怖いと思える程の気迫のある雄叫びが聞こえることもザラです。

そして父様。この一週間、まったく姿も気配も感じません。ここまできると、私も嫌な予感が頭を過ぎります。

私の父様、高町士郎。

以前は世界を旅し、重役のボディガードなどを務めていたというトラハの設定は私も知っています。そしてSPの仕事中に殉職したことも。

ですがトラハでは父様は高町なのは顔を見ないまま逝ってしまった人。時期が合いません。

ですが家族第一我が家の大黒柱の父様が一週間も帰らないのはそれこそ一大事を疑います。

ですが、母様も姉様も兄様も、私には話してくれませんが、

ガードの甘い姉様ですら話してくれないのならば、兄様と母様に訊いたとて無駄でしょう。子どもの私には座して待つしかないのが、辛い。

少し飛んで2ヶ月が経ちます。

この頃は高町家空中分解半歩手前とも言えるかもしれない時期でした。

2ヶ月経とうとも、父様は帰って来ず。冷静な私もいよいよ心が不安定になっていき、家に居ることを少なくするようになりました。それはただ単純に家に居たくないという私の思い。

未だに話しはされず、家族は疲れた表情を浮かべ、兄様は余計にピリピリとし、はっきり言って最悪な雰囲気なのです。

もう六歳を迎え、来月は幼稚園も卒業。そして小学校に上がる身としてはとてつもなく不安定であり、そして嫌だった。

私に話してくれないのは、私が子どもだからではなく、私が本物の高町なのではない、高町なのはの立ち位置、存在を奪った赤の他人だから、家族ではないからなのでしょうか……。

ポタポタと流れ落ちる雫。

何故私は泣くのでしょうか。わかっていたことです。所詮私は高町な

のではない。別のナニカ。

本来の高町なのはには似ても似つかない私は、高町家の一員として暮らす資格など……。

気づけば足は近所の公園に向き、私はブランコに座っていました。

今更砂場遊びをする年齢でもありませんし。私はブランコの方が好きです。

ブランコをかなりの高さまで漕いで高さと速さに要らぬ思考が頭を過ぎる。

ここで手を離せば、家族は心配してくれるだろうか？

父様に逢えるだろうか？

あるいは頭を強かに打てば自分は死に、本来の高町なのはが帰ってくるのでは？

そんな考えが浮かび上がる程、この時の私は随分と追い詰められていたのでしょうか。

もうどちらかに一回転しそうな角度までブランコは上がり下がりを繰り返している。

でもチキンハートの私にはそんな勇氣もなく、結局はブランコから降りて、人の居なくなつた公園の滑り台の上で最近開いてないスケッチブックを広げました。

中には様々な魔装機や魔装機神のラフ画や設定。魔装機神のプラナーやエーテルに関する私なりの考察などなど。

いつか役に経つのではと書いていたスケッチブック。それをパラパラと捲り、とあるページでそれは止まる。

そこには私が理想とする魔法少女の姿。

杖を片手に脅威と苦難に立ち向かう不屈の心を持った少女、高町なのはのスケッチ。

無印の9歳、コミックの15歳、stsの18歳、さらに23歳と25歳。

私の覚えている限りの高町なのはが描かれていた。

私の、決して届かない目標にして理想の高町なのは。

高町なのはが一番星ならば、私は肉眼では見えないちっぴけな星でしかないのだろう。

私には愛も力もない。

リリカルマジカルでもとらいあんぐるハートでもない、『理』を真似ている私のような存在は所詮

暗がりゆく空を見上げれば、そこには輝く星光。一番星。

視界が歪む。

目に力を込めても歪みは強くなっていく。

こんなこと程度でないではいられないというのに、高町なのはが涙を流すのは誰かの為なのに

ポタポタと、スケッチブックに雫が落ちる。流れ出した涙は堤防を決壊させ、鉄砲水となり吹き出す。

「…わ、たし…は、なぜ、たか…ま、ち…なの、は、にっ」

辛い。悲しい。怖い。寂しい。

色々な感情がぐちゃぐちゃになって吹き出す。もうせき止めは出来なかった。

「だ、れか、たすけ…て…」

2年間。たったそれだけでも心を病むには十分過ぎた。とくに自分が高町なのはとして産まれたから余計に。

高町なのはの幸せを奪ってしまった。

高町なのはの居場所を奪ってしまった。

高町なのはの存在を奪ってしまった。

いずれは戦いに身を置かねばならない運命。

普通の凡人には過酷過ぎる運命だった。

特に高町なのはが歩むだろう16年を大まかに知るだけに余計。

『Please do not cry. (泣かないで下さい)』

「うっ…ぐすっ…………えう？」

ふと耳に聞こえた電子音調の英語。

「…だ、だれ、です、か…………」

『Please do not cry. I will als
o become sad if you are crying.
(泣かないで下さい。貴女が泣いていると、私も悲しくなります)』

顔を上げて、誰も、どこにも、なにも居ない。

「そ、ら…みみ？」

『It is not a mishearing. I am
in a you side perfectly. (空耳ではあ

りませんよ。私は貴女の傍に、ちゃんと居ます()」

「わた、し、の…そば?」

『Yes . Therefore , please do not cry . My meister who loves ()はい。だから泣かないで下さい。愛するマイ・マイスター()』

また、涙が溢れてきた。

でもそれは……

『Meister? Did it carry out if you please? In something, I am impoliteness by no means. ()マイスター?どうかしましたか?まさか私が何か失礼を()』

「いい、え……いいえ、違い…ます」

嬉しかったんだ。

独りぼつちだと思い込んでた自分に、傍に居てくれた存在が居るのを。

「あなた……なのですね?」

スケッチブックに語りかける。

それは奇跡か、あるいは高町なのはである自分が書いた物だからなのか

『Yes・That's right・My meister
(はい。その通りです。私のマイスター)』

スケッチブックから聞こえる電子音は、とても温かに包んでくれるような声だった。

誰も居ない。私達しか居ない公園で、私は声も抑えずに、泣き散らした。

最初で最後にするから、今は自分の為に泣き、そして産まれてくれたことに感謝を込めて、泣いた。

そしてまた1ヶ月。腕に包帯を巻いて申し訳なさそうな顔をする父様に、私は素直に「お帰りなさい」と言って抱きついた。

少し苦悶の聲が聞こえましたが無視です。3ヶ月も心配をかけた罰なのですから。

第1話 タイムリミットまで、あと (前書き)

連投です。

第1話 タイムリミットまで、あと

side：高町なのは

あの日の出逢いから3年が経ち、私は私立聖祥大附属小学校3年生として過ごしています。

あの日以来、私と共にある自称アリスは、簡単に言えば、私の著書した魔導書で、私の使い魔のような存在であるらしいのです。

まだシステムの未完成のアリスは、その活動には私からの魔力供給を受けて活動しているそうです。

夜天の書よろしく自立飛行とかも出来ませんが、私はアリスのお陰で大分救われました。

父様は、あの一件以来、長期間、家から居なくなることもなくなりました。あってもちゃんと、2日3日で帰ってきてくれます。

未だに何をどうしてあんな怪我をしていたのかはわかりませんが、3ヶ月という期間を考えれば、幾つかの予想を推論出来ますが、所詮推論。気にしないことにしました。

そして私は私立聖祥大附属小学校に入学を果たし、初めての友人を得ました。

「あ、おはようなのは」

「おはようなのはちゃん！」

バスに乗り込むと、その初めての友人であるすずかとアリサが手招きしてるのに気づき隣りに座りました。

「おはようございます。すずか、アリサ」

「前から時々思ってるけど、なーんか固いわよね、あんたは」

と、アリサが口をとがらせる。

「そうは言われなくても、これが私ですから。今更変えようもありません」

中身が一応大人であるからにして、高町なのはのように子どもを私に出来るわけもなく、少々演じているような部分も無きにしも非ですが、これが『私』なのです。

いつも通りに登校し、いつも通りに授業を受け、いつも通りの昼を迎える。

今日もそうなると思っていました。ですが

昼休み、学校の屋上。

いつもなら楽しいはずの昼食。ですが今日は色を失い、いつもとはまったく異なる昼食です。

昼食前の4時限目の授業は将来の夢について

とうとう、来てしまったのです。運命のタイムリミットが

今日は4月22日。もし劇場版コミックのように4月26日が運命の日であるならば、あと4日。不吉過ぎるのにも程があります。

「で、なのはちゃんは？」

と、すずかに尋ねられました。恐らくは将来の夢についてでしょう。

「…私ですか？」

頷く2人に、どうやら心中はさらけ出していないと安堵しつつ、考えを述べます。

「翠屋を継ぐのもいいですが」

私はバックからA4サイズのスケッチブックを取り出す。

「イラストレーターやアニメーターというのも、道筋のひとつかも
しれませんね」

叶わない夢　　なのかも、知れませんが。

「なるほど、あんた絵、得意だもんね」

「なのはちゃんならきつと凄い有名になれるよ！」

「ありがとうございます。すずか」

スケッチブックに何が書かれているのか若干知っている2人は納得
してくれたようです。

放課後。2人は塾の為、校門でお別れです。

私は塾に行くよりもゲームとか新しい設定を考えたりする時間が欲
しかった上、今のところ全筆記テストオール100点を独走中の為、
塾には通っていません。

帰り際、人気の少ない方に歩いていったら、海岸線まで来てしま
いました。

人の気配がなくなった途端、進級してから良く起こるようになった
発作に胸が苦しくなる。

「くっ、はっ、うっ、はっ」

服を握り締め、苦しさを耐える。

タイムリミットを迎えるプレッシャーによる発作。

戦うことへの恐怖が、私の心を蝕んでいた。

『マイスター
Meister』

「アリ、ス……」

スケッチブックを胸の中に抱き締める。

私の本当の意味での味方は、彼女だけしか居ない。

アリスは私が記述した物すべてを覚えていて。言わば辞書・ライブラリーー。

だから端々にも、これから起こること、私の正体も知っている。

高町なのはでなく、『私』自身の唯一の味方。愛おしい、私のファミリア・もっひとりのわたし。

「ア、リス……わた、し……」

『Please cry and breathe out now.
It muffles, although it is awkward.
（今は泣いて、吐き出して下さい。拙いですが、消音をしておきます）』

「うっ、あ、つつ、うあああああああー……っ
！……！」

私には勿体無さ過ぎるファミリア。

この子のお陰で、私は泣く事が出来る。私はやっぱり弱い、ちっぽけな星でしか 否、スペースステブリの星屑でしかない。

「はっ……はっ……」

『Could it settle down? Meister
（落ち着けましたか？マイスター）』

「……はい。一応は……」

涙を袖で拭い。幾分か楽になれた心持ちで、私は帰路に着きました。ですが、この苦しみでさえ、まだ序の口でもない程軽い物だと、この時の私は知る由もありませんでした。

第1話 タイムリミットまで、あと (後書き)

このなのは見た目も性格も喋り方がマテ子の星光ことセイことシユテルですが、ヲタク成分と大人頭腦の為、思考がかなりまわりまくり超賢く見えますが、一般凡人だった故に、かなり臆病で精神的強さに、本家なのはと銀河中心核とミトコンドリア並みの差があります。

第2話 星の光の生誕・Birth of a stellar light

side:高町なのは

「はあっ……はあっ……はあっ……はあっ……」

今日は人生最悪の日だと言えます。

4月26日。

とうとうこの日がやって来ました。

少年が怪異と戦う夢も見ました。

十中八九、あれがユーノとジュエルシードの暴走体。

夢だというのに言い知れぬ迫力と命のやり取りに、私は夜中に目を覚まし、それ以後寝れずに翌朝を迎えました。

その所為か、頭は痛い。胃はキリキリする。時々眩暈もする。

正直、コンディションは最悪と言っても過言ではありません。

「大丈夫？なのはちゃん」

「…ええ、軽い寝不足ですので、」心配なく」

「また夜中までゲームでもしてたんでしょ？あんた普段生真面目なのにそういうことだけは不良よねえ」

「ゲームとアニメは私の生き甲斐ですから…」

以前素で夜更かしし、今に似た状況が何回かあるので、すずかとアリサには怪しまれずに済んではいますが、アリサの胸に抱かれるフレット、その首にある赤い宝石を、私は直視出来ません。

その後、フレットことユーノを病院に預け、すずかとアリサは塾へ、私は古本屋で新しいラノベと漫画を数冊買い。また何時もの海岸線に居ました。

「今夜……なのですね……」

『マイスター
Meister』

「…大丈夫ですよ、アリサ。私には……『私』には貴女も居るのですから……」

そう、高町なのははユーノとレイジングハートが味方であった。

でも私にはそこにアリスという存在が、私の味方が居る。

それだけで心強い。それだけで、今まで心が折れずにいられたのだから

が、自転車の扱いとスピードにはちょっとした自信があります。

窓から飛び出したユーノを横からかつさらいながら一目散りに走り抜けます。後ろから破碎音が聞こえましたが、無視です無視。

「あ、あなた、は……」

「喋らない方が身の為ですよ。舌を噛みます」

私は自転車のギアと脚のギアを上げ、住宅地をひたすら突っ切る。

戦うにしろ何をするにしろ、この辺りでは被害が大きくなる。

「っ！後ろ！！」

「くっ！」

自転車を横に倒し、片足を地面に着いてのドリフトをしながら十字路を強引に曲がり、目指すは人が少ない海岸線。

「……はっ……はっ……はっ……はっ……はっ……」

後ろから狙われる恐怖とプレッシャー。

狩られる側の恐怖。

そしてジュエルシードの暴走体ならば非殺傷設定なんて甘っちょろい機能なんて搭載していないでしょう。

正に命のやり取りに、私の恐怖のボルテージは何時の間にかMAXをオーバーブレイク。

勝手に溢れる涙を零しながらやっとの思いで海岸線へ到着。

浜に通じる階段をそのまま自転車ごと飛び降りるものの、着地の瞬間砂にタイヤを取られ、派手にズッコケてしまう。下が砂で助かりましたね。

「ケホッ！ケホッ！こ、ここ、まで、くれば…」

カクカクと震える脚を叱咤しながら立ち上がる。

「あ、あの、大丈夫ですか？」

「ええ、あなたこそ、平気でしたか？」

「は、はい。僕の方は、大丈夫です」

とりあえずは、第一関門の戦闘フィールドの移動は成功ですね。

住宅地でドンパチやるよりは周りを気にしなくて済みますし、視界も開けていますし。

「なにが起きてるのかよくわかりませんが、私はどうすればいいんでしょうか？」

「えっと、あの、それは……」

ロロもるユーノ。

言うなら早くした方がよろしいですよ。

「もう、追いついてきましたか……」

空を見れば、夜空に小さく蠢く影。遠目ですが気持ち悪い不定形生物ですね。

「っ、ごめんなさい！でも今の僕には貴女にしか頼れる人が居ないんです」

本当なら管理局に任せていても良いはずの事を、発掘者だからと先行調査な来る程の責任感。

好感は持てますが、もう少しちゃんとした準備というものをして来

の方が良いと思う私は悪くないはずです。

「これを 手に取って下さい」

ユーノが口でくわえる赤い宝石。

レイジングハート

レイジングハートを見た瞬間。心臓が震え、胸が苦しくなった。

今更、もう、後戻りは出来ない。

私は高町なのは

魔法少女として戦う宿命の星の下に産まれた存在なのだから……。

レイジングハートを受け取る。

煌めく宝石は、星光は今、私の手に渡った。

私は紡ぐ。

其れは聖約

其れは誓願

其れは不屈の力を手にする為の聖句

「我、使命を受けし者成り」

宝石が光りを放ち、私の足下に幾何学の円形魔法陣　ミッドチル
ダ式魔法陣を展開する。その色は闇を照らす桜色。

「契約のもと、その力を解き放て」

宝石と呼応する胸の鼓動。躍動するのは、現実では手に入る事は無い。御伽噺の中だから許される超常のチカラ。

「風は空に　星は天に　そして不屈の心はこの胸に　この手に魔導
を　レイジングハート、セットアップ！」

『Stand by Ready・Setup.』

桜色の光りが天に解き放たれ、光柱を作り出す。

『Welcome・New User.』はじめまして、新たな
ユーザーさん()』

「初めまして、私は高町なのはと申します」

『I am the Raging Heart. I need your help well henceforth. (私はレイジングハート。以後よろしくお願いします)』

「ええ、こちらこそ。それで、私は何をすれば良いでしょうか？」

『Your magic love qualifies you to use me. May I select the optimum configuration for the Barrier Jacket and the Device? (あなたに魔法素質を確認しました。デバイス・防護服ともに、最適な形状を自動選択しますが、よろしいですか?)』

「デバイスはお任せます。服については私のイメージをトレースして構成して下さい」

『It understood. An image, trace e start. (了解しました。イメージ、トレース開始)』

光りが強くなり、文字の書かれた光りの帯が私を包む。

『Stand by Ready.』

宝石だったレイジングハートにパーツが合体し、魔法の杖となる。

それを左手で掴むと、服が光りとなって弾ける。

『Barrier Jacket setup.』

上半身が黒いインナーに包み込まれる。

下半身には黒いハーフズボンが形成される。

インナーの上に白地に黒の縁取りのコルセットと金色の胸甲が形成され、胸甲の上部には赤い宝石を付けた金色のパーツが付き、そのパーツを羽のように左右に広げる。

白地に青い縁取りのオーバーコートジャケットが形成され、袖口には青い腕甲が形成され、上下に別れていたパーツをボルトで固定される。そして両肩にも青いショルダーアーマーが形成される。

下半身はズボンの上に黒いベルトが通され、前開きの白いアウトスカートが形成される。

金色の脛当てが形成され、圧底の黒いブーツが形成される。

レイジングハートをバトンのように頭上で振り回し、利き手の左手に保持し、振り下ろす。

光りの柱が消え、地上に降り立つ。

『How much do you know about magic? (魔法についての知識は?)』

「無きに等しきと思って下さい。ですが説明を受けている暇もないようです」

暴走体が浜辺に降り立つ。

いきなり襲って来ないのは、先ほど私のセットアップした光りの所為でしょうか？

「レイジングハート、私に今出来ること、使える魔法をステータス形式で表示してください。それと、敵の判る範囲でのデータも下さい。出来ますか？」

『Comprehension・Various status is displayed.（了解。各種ステータスを表示します）』

空中に投影される複数のモニター！。

敵はジュエルシールドの暴走体。魔力ランク推定A A。

高町なのは、つまり私。

魔力ランクA 空戦適性C 陸戦適性D + 総合ランク推定C +

使用可能魔法

シュートバレット

デイベインシューター
パイロシューター
クロスファイアシュート
チェーンバインド
デイベインバスター（2発限定。3発目は不発の可能性大）
プロテクション

ほとんど自分の才能無しには涙すら流れず、渴いた笑いも出ませんよ。A・Sで高町なのはがAAAランク。この歴然の差はなんなんですか!?

……ですが、チェーンバインドとクロスクロスファイアシュートが使えるのは重畳ですね。この時期の高町なのはに出来ない戦法も取れますし。それに私にはアリスも居てくれる。私は退くわけにもいきません。

しかしパイロシューターとなれば、私に魔力変換資質があるのでしようか？

なのにプラスファイヤーが無いのは単に私の実力不足なのでしょうか？

考えていても仕方ありませんね。

『G a a a a a!~!』

「くっ」

第2話 星の光の生誕 - Birth of a stellar light

今の主人公なのは、実力的にはsets開始時のフォワード陣よりも弱い実力でリミット付きのなのはに挑むような感じで暴走体と戦うような物だと、頭の片隅に置いておいてくださいな。

英語があっているかどうかは激しく微妙なのであまり気にしないでください。

第3話 更なる絶望。しかし星光の輝きは力強く（前書き）

レイ八さんは劇場版モデルです。

なのはのバリアジャケットは、簡単に言えば上半身は劇場版に両肩にシヨルダーアーマーを追加。下半身がs t sのアウトスカートというイメージで充分かと

第3話 更なる絶望。しかし星光の輝きは力強く

side：高町なのは

『G a a a a a ! ! !』

「くっ！」

飛び込んでくる暴走体を数回のバックステップで回避する。

砂地に脚を取られますが、間一髪で避けられました。

粉塵が舞う地点から目を離さないように努めながら、距離を開けます。

転びそうになりながらも、躓きそうになっても、気合いで脚を動かします。

大体10m離れた所で脚を止め、レイジングハートを暴走体に構える。

『G a a a a a ! ! ! ! !』

暴走体が触手を伸ばして襲ってくる。その数は4本！

「デイベインシューター！」

『Divine shooter』

今形成出来たシューターは3発。

それを放ち、3本の触手を弾く。

『Protection』

「くっ！」

残った一本はバリアで受ける。

ピキピキピキ

受け止めたバリアが不吉な音を立ててひび割れ始める。

「っ、やはり私では」

『Front cautions! (前方注意!)』

「なっ！？」

めり込む身体を動かして抜き出る。

「くっ、がはっ！」

込み上げる吐き気を無視して、レイジングハートを構える。

しかし暴走体は襲っては来ない。

襲ってこないのならば好都合！

「レイジングハート、ディバインバスターを撃ちます」

『All right・Devine Buster, standby・Mode change・Cannon Mode』

レイジングハートがその形を変える。白いバレルが追加され、トリガーユニットが展開される。

トリガーに指を掛け、カノンモードの砲口を暴走体に向ける。

『Shoot in Buster Mode・』直射砲』形態で発射します(』

砲口にミッド式魔法陣が展開され、身体の奥底から湧き上がる力を腕を通して、すべてレイジングハートに！

『Immediate fire when target is locked. (ロックオンの瞬間にトリガーを)』

網膜に投影されているのか、眼に見える景色がロックオンディスプレイに変わる。

「っ、デイベインバスター！シュートッ！！」

脚に力を込め、トリガーを引く。

腹に響く重低音をあげて、桜色の砲撃は暴走体へと一直線に向かう。

この時私は勝利を確信しました。

高町なのはの代名詞、デイベインバスターに撃ち砕けぬものはないと。

ですがそれを放ったのが私だった。そして暴走体が私の恐怖を糧にでもしたのでしょうか。

デイベインバスターが直撃する瞬間、暴走体と眼が合い、そしてその赤い眼は厭たらしく歪めたのです。

直撃し、粉塵を巻き起こすディバインバスター。

『Front watch! Hostile object energy reaction increase! (前方警戒! 敵性体エネルギー反応増大!)』

レイジングハートの警告と同時に粉塵が吹き飛び、目の前が真っ白に染まる。

『Protection』

「きゃああああー!!!」

展開したバリアごと吹き飛ばされ、再び防波堤にめり込む。

瞬間、バリアが弾け、大爆発を起こした。

「うつ、ああ、ああっ」

『FOOOO.....』

閃光が晴れ、震える眼差しで見つめる先。

心が折れた私には、もはや抗う意志すら湧いてきません。所詮私は高町なのには成りえない

シュキンっと、空を裂くような音が聞こえた。

触手が射出された音。

これで、終わりですね

『Protection』

無駄ですよ、レイジングハート。

アレには私程度のバリアでは紙に等しいのですから。

バリアの弾ける音、防波堤のコンクリートが砕ける音、そして全身を襲う衝撃。

でも、痛みはありません。ハズレたのですか？

『Please do not give up.』諦めないでください

無理ですよ。私には……。

『I do not want to give up. (私は、諦めたくはありません)』

.....。

『I was able to meet the person using me at last. (私はやっと、私を使ってくれる人に出逢えました)』

レイジングハート.....。

『Let's offer all of me to you. I would like to become your power. (私のすべてを貴女に捧げましょう。私は、貴女の力になりたい)』

レイジングハート.....。

『It must not be discouraged. A master and you are not one person. (挫けてはなりません。マイスター、貴女は独りではありませんよ)』

背中のカバンから聞こえるレイジングハートとは別の電子音。

それはずっと私の味方で居てくれる、私のファミリア・もっひとりのわたし。

アリス……。

『being in a you side and keep ing the heart , although I can do nothing . . . if . . . it can do . . .) 私には何も出来ませんが、貴女の傍に居て、その心を守ることぐら いなら出来ます(』

アリス

『Therefore , the Raging Heart . Please become the power which cuts a master's way . (だからレイジングハート。あなたはマスターの道を切り開く力になってあげてください)』

『I understand . I mean to from the first . Are reliable . (わかりました。もとよりそのつもりです。ご心配なく)』

レイジングハート

レイジングハートの石突を地面に着き、笑う膝で立ち上がる。

「レイジングハート、私に勇気を、恐怖を打ち砕く勇気を私に！」

『All right , My Master』

自分の脚で地に立ち、レイジングハートを左手に構える。

『Hover Feather』

後ろ腰辺りに桜色の一对の羽が生え、踝辺りにも小さな羽が生える。

これはいつたい？

『The magic for empty games was arranged in land battles. Movement on land becomes smooth now. (空戦用の魔法を陸戦用に変じしました。これで陸上で移動がスムーズになります)』

「ありがとうございます。レイジングハート」

ふわりと、少しだけ腰辺りに浮力を感じます。

踵も少し浮かんでいます。

Hover Feather

つまりホバー走法を可能とする魔法ですか。

改めてステータス画面を確認します。

ジユエルシード暴走体 推定ランクA A +

物理質量攻撃 触手（円柱）威力A A 射程推定A + 発動速度推定B +

砲撃 威力A A A - 射程推定B \ A A 発動速度A

高町なのは

魔力ランクA 空戦適性C 陸戦適性D +（ホバーフェザー発動中はA +） 総合ランク推定C +（ホバーフェザー発動中はB）

使用可能魔法

シユートバレット

デイバインシユーター

パイロシユーター

クロスファイアシユート

チェインバインド

デイバインバスター（2発限定。3発目は不発の可能性大）

プロテクション

ホバーフェザー

「さあ、2人とも、反撃の時間ですよ」

『Comprehension .

Please leave support .（了解。サポートはお任せください）』

『About the fortune of war , it

『 i s m y m y m a s t e r . (じ)武運を、マイマイマスター』

第3話 更なる絶望。しかし星光の輝きは力強く（後書き）

ジュエルシードの暴走体が思念体であるからこうしてみました。

デバイスの会話が難しい上に面倒で、さらに確実性なしと散々ですが、レイハさんとアリスはなのはの嫁なので頑張ります。

第4話 星光よ、使徒を撃て！

side：高町なのは

対峙する私とジュエルシードの暴走体。

戦闘力は別として、戦闘能力的にはATフィールドを張らないゼルエルそのままのようです。

捕食やATフィールドはイメージしていなかった為、余計なことを考えるのもう止めにして、今は目の前のことだけを考えます。

戦力的には圧倒的に不利。

それでも『理性』と『作戦』ならば、高町なのはより私の方が上であるのは確かでしょう。

戦力不足でも、作戦次第ではそれを覆せる。

ティアナだってやってみせたんです。

10年後、出逢うかもしれない1人のガンナー。

彼女の気持ちは、今なら私にはわかる。

彼女は周りが、私は高町なのはが、優秀過ぎて負い目を感じるその気持ち。

『Comprehension・Best evasion、
Cross Fire deployment!』(了解。全力回避、
クロスファイア展開!)『

「くうつつ!!」

右から左に後ろに、景色が速流れ、視界の隅に黒い細い影。

視界がディスプレイに変わり、正しく周囲が見えるようになる。

自身の触手を次々に差し向ける暴走体。その数は30本。

レイジングハートとホバーフェザーによる高機動マニューバーによつて、バリアジャケットに掠めながらも、直撃は0。

優秀ですね、レイジングハート。私には勿体無いデバイスです。

周囲に浮かぶスフィアは6つ。

「クロスファイア!シュートツツ!!」

6発の魔力弾が暴走体に向けて放たれる。

4発は迎撃され、残り2発はあろうことか、暴走体が展開したバリアに弾かれる。

「バリアまで!?!」

『Barrier generating of presumed A + is checked. (推定A+のバリア発生を確認)』

「ならばバリアごと撃ち抜くまで! シュートツ!」

6つのスフィアが一つとなり、砲撃を放つ。

デバインバスターは残り1発。

それ以外で威力を持つ攻撃は、クロスファイアシュートの砲撃バリエーションしか思いつきません。

「レイジングハート! カノンモード!」

『mode change . cannon mode .』

カノンモードのレイジングハートの柄を脇の下に通し、手はライフを支えるように添え、トリガーユニットを握る。

デバインバスターの衝撃を子どもが抑えるのには、やはりライフル銃を保持するようにした方が効率が良いでしょう。それに高町なのはの握り方は、実際にやるとレイジングハートが反動で吹き

飛びそうで怖いんですよ。個人的に。

「デイバインバスター！シュートッ！！」

クロスファイアシュートに続くようにデイバインバスターを追撃に撃つ。

1発でダメならば2発一度に叩き込めば！

暴走体はクロスファイアシュートをバリアで防御。その直後を襲ったデイバインバスターが、バリアを貫くのを、私は確かに目にしました。

バリアを破り、暴走体に直撃する桜色の閃光。

爆発が起き、粉塵が視界を隠す。

「はあ…はあ…はあ…はあ…はあ…はあ…」

荒んだ呼吸を整える。

デイバインバスターの直撃。これで片をつけられなければ、私の勝ち目は

「It is an energy reaction to the center of an explosion!」(爆心地

にエネルギー反応！』

「何ですって ！!?」

粉塵が晴れ、そこには表層を焼きながら、太い一対の触手をジュエルシードを守るようにクロスさせた暴走体の姿。

「そ、そんな……………」

今ので落とせなかった…………。

もう、ディバインバスターは撃てないというのに…………。

「ッ！…！うおおおおーッ！…！」

地を蹴り、私は一直線に暴走体へ跳ぶ。

「パイロシューターッ！！クロスファイアシュートッ！！」

『Pyro shooter and Cross Fire
hoot』

クロスファイアシュート6発とパイロシューター4発の計10発を

至近距離で撃つ。

ジュエルシールドには、まだ届かない！

「いい加減に 墜ちなさい!!」

カノンモードの砲口を触手に押し当て

「シユートバレット連射！」

『Shot Barrett automatic fire!』

カノンモードの先端から連射されるシユートバレット。しかし零距离射撃にも関わらず、触手は焼かれるだけでびくともしない。

「あああああ—————!!!!!!」

込めるだけの魔力を込め続け、攻撃の手を緩めず撃ち続けました。
しかし

プシュン!

「レイジングハート!?!」

『Overload・Compulsive cooling』

撃ちすぎた!?

廃熱の為に攻撃を中断せざる得ないレイジングハート。

その時、視界の片隅で動いた黒い影。

「がっ!!!」

気づけば私は上空に打ち上げられていました。

空中では私は身動きも取れない。

真っ逆様に墜ちた私の目と暴走体の目が交差する。その身体には束ねて円柱になつた触手

空中コンボ……

『Protection』

「っ、きゃあああ——!!」

またバリアごと吹っ飛ばされ、砂浜にうつ伏せになる私。

『Is it safe? Master(ご無事ですか?マスター)』

どうする!?!どうする高町なのは!?!

デイバインバスターは撃ち尽くし、次点高威力のクロスファイアシユートの砲撃バージョンではバリアを破るには至れない!

他に私が出れることは!?!

逃げる?

そんなの論外です!私は高町なのはとなるためにも、こんな所で退くわけにはいかないのです!

誰かに援軍を?

ユーノは戦えないでしょう。

それにこうも長時間派手に戦い続けているのに人が来ないのは、ユーノが結界を張っているからでしょう。

姿は見えませんが、ユーノがやられてしまっ=ジ・エンド。

バインドで拘束して集中砲火?

無駄でしょう。シュートバレットとはいえ零距离連続射撃に耐え抜いた体組織やクロスファイアシュートとディバインバスターでやっ
と破れるバリアの前では。

もつと、私に攻撃力のある魔法が使えれば

『Hover Feather, Output fall!
Please master and concentrate!
ホバーフェザー、出力低下!マスター、集中してください!』

「レイジングハート……」

詰み状態で諦めかけていた私。

そんな私とは反対に諦めずに戦い続けるレイジングハート。

その名の如く、不屈の心を宿すデバイス。

私のような者には分不相応な子。

十全にその性能を引き出してあげられない私をマスターと呼んでく
れた子。

私には、レイジングハート、あなたの力を出し切れ

「……レイジングハート」

『What is it? Master (何でしょうか? マスター)』

「フルドライブを使います。もうそれしか手立てはありません」

『It is it why? (な、何故それを?)』

やはり、あなたは私には勿体無いデバイスです。

初対面の私を気遣う優しい心も持っているのですから。

フルドライブ

インテリジェントデバイスの最大出力モード。

しかし、リンカーコアが本格的に覚醒したばかりの私では負担も大きいでしょう。伏せていたか或いは使えないのか、レイジングハートの様子から見ればおそらくは前者なのでしょう。

ですがこの暴走体は、手加減して勝てる相手でもないのは本モデルの時点、そして暴走体の耐久性から一目瞭然です。

「生きるか死ぬかの瀬戸際に、躊躇いや出し惜しみは不要です！ですから、レイジングハート！」

『I understand. Surely prepared』

ness of the master was receive
d. (わかりました。マスターの覚悟は確かに受け取りました)』

「ありがとうございます。レイジングハート」

私はレイジングハートへの感謝の意を噛み締め、身体を立ち上げら
せる。

「レイジングハート！その名の如く、不屈の力を私に！」

『All right limit release. Full
Drive』

カノンモードのレイジングハートの砲身フレームから一対の桜色の
翼が生える。

フルドライブと同時に身体を襲う倦怠感。ですが、それを上回る力
の鼓動も確かに感じます。

「チェーンバインド！」

『Chain Bind』

突き出した右手の先に展開されるミッド式魔法陣。

そこから飛び出す6本の桜色の鎖は一直線に暴走体へ。

バリアを展開されましたが、そのバリアごと雁字搦めにしてしまいます。

『Hover Feather, output full op
en!』

「やあああああー！！」

地を蹴り、ホバーフェザーの推進力を得て、私は暴走体の懐へ突貫します。

「デイベインバスター！スタンバイ！」

『All right. Divine Buster, sta
nd by. Charge start.』

カノンモードの砲口に環状線型魔法陣が展開。砲口の先に桜色の閃光が集まっていく。

「うぐっ！」

急に苦しくなる胸を右手で抑える。

『Master! (マスター!)』

「私に構わず続けなさい!」

『∴Comprehension. (∴了解)』

今さら覚悟していたことです。

今は身体よりもアレを撃ち抜く力を

『It is 5 more seconds till the completion of charge! (チャージ完了まで後5秒!)』

「ホバーフェザーへの魔力供給を80%カット!少しでも良い、チャージにまわして下さい!」

『All right. 80% of magic supply cut. Count 4 (オーライ。魔力供給80%カット。カウント4)』

速度がガクリと落ちましたが、今は速さよりも攻撃力を少しでも上げなければならぬ時。機動力の低下は何とかすれば良いだけです!

『An enemy part, bind break! A
counterattack comes! Numbers a
re 3 and evasion! (敵一部、バインド・ブレ
イク! 反撃が来ます! 数は3、回避を!)』

「構いません!そのまま直進、最小半径で回避!」

襲い来る3本の触手を、東方弾幕よろしくグレイズで回避!

ジャケットとスカートが裂かれ、右腕を掠めましたが

被弾0。

「周囲に散る残留魔力もチャージにまわして下さい!」

『All right. Count 2 (オーライ。カウント2)』

強固なバリアと体組織を撃ち抜くには、高町なのはの最強魔法でなければなりません!」

「デイバインバスターすら2回しか撃てない私には、これを御せるかはわかりません。一か八かのただの博打ですが」

『An enemy and bombardment come
! (敵、砲撃が来ます!)』

「空へ!!!」

地を蹴り、空へ跳ぶ。

ホバーフェザーに滞空能力があるかはわかりませんが、空へ跳躍した私達の足下を閃光が通り過ぎます。

『Completion of magic charge! (魔力チャージ完了!)』

「レイジングハート!私を敵の眼前へ!」

『All right. My master! (オーライ。マイマスター!)』

再び襲い来る砲撃を、一瞬だけ解放された推力を得、夜空に輝く星光を背に宙返り、砲撃を回避。

砲撃の熱が直ぐ傍を通るのを感じつつ、再び推力を解放。

また新たにバインドを破壊した触手が反撃に放たれる。

バリアジャケットが裂かれ、左のシールドアーマーが砕け、左頬を触手が掠め血が流れる。僅かに体勢を崩すも、その瞳に宿る闘志は決して砕けてはいない。

「レイジングハート……私を」

こんな私の為にその力を示してくれるレイジングハート。私の意思に伝えてくれると信じている。

暴走体は目の前！

レイジングハートの砲口に展開する環状線型魔法陣が、トリガーユニットと柄にも展開される。

脅威を目前にして、出力が上がるのを魔法陣を通して感じました。

そうです、レイジングハート。だから私を

「私を、勝たせて下さいっ！！」

暴走体の頭上から一気に地面に降り立ち、衝撃の緩和も忘れ、両腕で構えたレイジングハートを暴走体の、体組織、ジュエルシールドを大事にする触手に突き刺すように押し付ける！

『Starlight Breaker・Stand by Ready.』

「これが私の全力全壊！！」

暴走体を縛るチェーンバインドが弾け、その仮面に光りが灯る。

ですが、私達の方が　速い！

「スターライトブレイカー！！デッド・エンド・シュートオオオオオ
オツ！！！！！！」

トリガーを引く。

集めたすべての魔力が一点に集中し、巨大な星光となって解き放たれた。

「…私の　私達の、勝ちです」

トリガーを引く指を離し、そしてもう一度トリガーを引く。

「ブレイクッ、シューーーーーーッ！！！！！！」

ダメ押しの一撃。

長い長い、されども20分にも満たない最初のジュエルシードとの攻防は、巨大な爆音と付随する衝撃波、そして桜色の巨大な十字架を天に掲げ、終わりを告げた。

第4話 星光よ、使徒を撃て！（後書き）

色々影響受けまくりですが、こんな形で終えてみました。

初回戦闘でフルドライブにスターライトブレイカー

本家なのはより無茶をしないとダメな我が家のなのは。あとがコワ
い……

第5話 実際のリリカルマジカルは命を全賭けするものです。by高町なのは

side:高町なのは

スターライトブレイカーの閃光が晴れると、宙に浮かぶジュエルシード。その数は1つではなく

「ふ、2つ……?」

『 r e c e i p t n u m b e r X X . X X I . 』

2つのジュエルシードをレイジングハートに納めた所で一気に脱力、膝について四つん這いになってしまいました。

74

ふ、2つなら、あんなべらぼうに強かったわけが理解出来ました

「っ、くっ、はぐっ、がはっ」

息苦しさで胸の痛みに目を瞑って耐えながら咳き込みます。

「ゲホッ、ゲホッゲホッ」

口から流れ落ちる液体。

魔力量自体は僕とそんなに変わらないのに、この管理外世界には魔法はないはずなのに、あんなに上手く戦えるなんて。

凄い、なんて言葉じゃ言い表せない。

でも

「あ、あの……怪我は」

「大丈夫です。痛みはありませんから」

そういう彼女だけれど、少なくとも傷も負ってる。

それに

「私が、高町なのはであることを証明する為に！」

その時の彼女の悲痛な顔。

言葉の意味はわからないけれど、彼女があんなに必死に戦えたのは、その言葉になにか意味があるのかもしれない。

しくない攻防でしたね。

今後を考えると、もっと作戦なり戦術なりを考えていかなければなりませんね。

あのジュエルシードの暴走体でランクA A +

ランクA A Aのフェイト・テストロッサと戦うには、今の私では絶望的。

それを覆す戦術を考えていかなければ。

私が高町なのはを証明する為の戦いは、始まったばかりなのですから

|||||

家に帰った私は、私専用の倉庫兼作業部屋で自転車の整備をしてからお風呂に入って自室で眠りに着きました。

ユーノは今頃母様に揉みくちやにされているでしょう。

ちなみに高町家には私の部屋の窓から直通の小さな小屋が有り、剥き出しの柱と木壁だけの1階部分は物置として使い。2階は私専用の書斎兼絵を描いたり、機械を弄る作業台のある部屋となっていていま

す。置ききれないプラモの大半も向こうです。

作業部屋に籠もると何時間か出て来ないのは当たり前、ユーノの事を訊かれた以外はなにもありませんでしたよ。

翌日。目を覚まして左の頬に触れる。

そこには絆創膏が貼ってあり、昨日の事が現実であることを実感させてくれます。

「あつ、いたたた」

ついでに腰の痛みや筋肉痛もプラスされます。

|||||

「おはようなのは！って、どうしたのよ！？そのほっぺた！」

バスに乗ったところでアリサに声を掛けられました。すると心配そうに私の方に駆け寄ってきました。

「なんでもありませんよ。昨日少し階段から脚を滑らせてしまいました」

「ちょ、それなんともないなんて言わないわよ！病院行った！？行っていないなら今すぐ行きましょー！」

「アリサ、とりあえず落ち着いて下さい。階段とは言っても5段くらいからだったので、少し痣になりましたが概ね問題はありませんですよ」

「あーんつもー！だからなんであんたはそうやって冷静に言うのよ！？痛いなら痛いって言いなさいよ！あんたケガしても、いつもいっつもなんでもありませんしか言わないのよ！」

心配してくれるのは有り難いのですが、一応大人である私には子どもにする怪我の痛みはあんまり痛くないのは事実なんですよ。

それに怪我という怪我は頬だけですから、心配も要りませんよ。

つと、言葉で言っても聞きそうにないだろうアリサの手を引いて、いつもの後ろの席に座ります。

「ちょ、ちょっとなのは…」

「あなたは優しいですね、アリサ」

「あ、当たり前じゃない！な、なのはがケガしたら私だって痛いん

だから……」

頬を赤くして目を潤す仕草は一種の破壊兵器ですね。良心が痛みます。

「おはようございます。すずか」

「お、おは、よう。なのは…ちゃん……」

私が挨拶をすると、すずかは顔を背けながらもチラチラと目を向けては背けをしながら返事を返してくれました。

確かすずかは吸血鬼一族の設定で、以前体育で顔面にボールの直撃を貰い、軽く鼻血を出した時もこんな反応でしたね。

一応頬と右腕は、暴走体の攻撃で出血していましたから、血の残り香に自分と戦っているのでしょうか。

こういう時は触れぬが友の為ですね。

私は良い友人を持ちました。

学校に居る間はユーノから事情を聞く片手間、レイジングハートには機体設定と魔法関連のアジャストを頼んでやって貰いつつ、デバイスのデータをアリスにもリークして貰っています。

これによって使える魔法と、今は不要な魔法や私が使いたい魔法を
チヨイスしてアクショントリガーに登録していきます。

そして放課後、送っていくというアリサの誘いをやんわり断り、帰
路に着きます。

アリサとすずかには塾がありますし、密室に近い自家用車ではすず
かの理性が心配ですし、確か今日も1つジュエルシードが発動する
はずだったような？

第1期はテレビでなく二次創作からの知識が主である為、かなり曖
昧不確かなのが難点なんですよね。

劇場版はちゃんと見ている分心配はありませんが、初っ端からジュ
エルシードの数に違いがありますから、どっちのルートを進むかわ
からないんですよ。

一番手っ取り早いのはバルディッシュの形が判れば一目瞭然なので
すが。

とりあえず今、レイジングハートは色々忙しい為、適当に街の中
心へ向かうことにしましょう。

それならば何処かで発動しても瞬時に駆けつけられますしね。

そして街の中心へ向かいつつ、アリスをどんなデバイスにするのか
を考えます。

インテリジェントデバイスなのは確実です。レイジングハートが劇
場版形態の為、TV形態のレイジングハートを再現してみたい思い
もあります。喧嘩になりそうですね。

他にはバルディッシュのように近接戦闘を主眼に置いたデバイスにするという手もありますが、運動神経のない私に扱えるかが問題ですね。

《それにしても、なのはって何者なの？そのインテリジェントデバイスにしても、こっちは魔法は無いはずなのに》

《何者と言われましよ、特別何かをしているわけではありませんよ。それにこの子は私のファミリアですし、魔法という物がなかるうとも、魔法という概念は、御伽噺やゲームの中には存在していますし、まったくゼロというわけでもないとは思いますが？》

なにせ吸血鬼なり御神流なりが存在する世界です。

ここにトラハが本格的に混じっていたらそれこそ、この世界も管理指定を受けるかもしれなかったでしょうね。

しかし管理とはいえど、その実態はミッドチルダを中心とした中央集権支配体制にも見えなくもありませんし、管理局のトップがあるエゴ塗れの脳髓で思考がお花畑な人達では、この世界とは全面戦争にでもなりかねませんね。

ただでさえ、質量兵器に潔癖症をもつミッドチルダの人間では、この地球は危険物の塊でしょうし。

《なのは？》

《……すみません。少し考え事をしていました》

今考えても仕方がないことですね。

『The completion of adjustment .
The next battle to a motion s
hould become light now . (アジャスト完
了。これで次の戦闘から、動きが軽くなるはずです)』

「お疲れ様です。レイジングハート」

レイジングハートはこんな私に力を貸してくれるのですから、私はその思いにも応えなければ

その時、強い魔力の波動を感じました。

この波動は

《なのは！》

《ユーノ、今の感覚が》

《うん。ジュエルシールドだ！結構近い！》

《私は先行します。ユーノもなるべく速く来て下さい》

《ダメだよなのは！1人じゃ危険だ！》

《こうしている間にも、暴走体が暴れている可能性もあります。足止めて、被害を食い止めておかなければ……》

《ちょ、なのは！なのはったら！》

私はユーノの言葉を無視し、駆け出します。

運動神経は皆無でも、走って転ぶような無様は 自分のペースを乱さなければ晒さないようにはなりました。50m13秒台ですが……。

やってきたのは海鳴市で少し高台の方にある神社。名は確か八束神社でしたか？

「いきますよ、レイジングハート」

『Stand by Ready』

我、使命を受けし者成り

契約のもと、その力を解き放て

風は空に 星は天に そして不屈の心はこの胸に

この手に魔導を

「レイジングハート、セットアップ！」

『Stand by Ready・Setup!』

レイジングハートがデバイスモードへ変形し、私の服もバリアジャケットに再構成される。

「レイジングハート！」

『Hover Feather』

背中と足にホバーフェザーが展開。

そのままホバー走行で神社の石段を駆け上がる。

最上段で勢いをそのままに跳び、神社の鳥居の上に飛び乗ります。

そして境内には

「あれは 狐……ですか…?」

『Kuooooo——!—!—!』

遠吠えをする巨大で凶暴そうな狐が私を一直線に見つめています。
どうやらターゲットを私に絞ったわけですね。

「征きましよう。レイジングハート、アリス」

『My master which should go! (行きましよう、マイマスター)』

『Please do your best. It is the Raging Heart to a master. (頑張ってください。マイスター、レイジングハート)』

ジュエルシード暴走体：狐型 魔力ランクA+

高町なのは

魔力ランクA 空戦適性C 陸戦適性D+ (ホバーフェザー発動中はA+) 総合ランク推定C+ (ホバーフェザー発動中はB) 使用可能魔法

シユートバレット

デイバインランサー

デイバインランサー・ファランクスシフト

クロスファイアシユート

クロスファイア・バーストモード

ファントムブレイザー

デイバインバスター (2発限定。3発目は不発の可能性大)

スターライトブレイカー (フルドライブ時条件付きで使用可)

プロテクション
バリアバースト
リングバインド
チェーンバインド
クリスタルケージ
ブリッツアクション
ホバーフェザー
フィジカルヒール

「アジャストのお陰で使える魔法も増えました。昨夜のような無様な遅れはもう取りませんよ！」

第6話 新しい友達は『くおん』です(前書き)

調子が良かったので連投です！

第6話 新しい友達は『くおん』です

side:高町なのは

レイジングハートを眼下の暴走体へ構える。

『Kuooooooooo!!!』

暴走体は口から雷撃を吐き出した。

「レイジングハート!」

『Protection』

右手を突き出し、バリアを張る。

激突するバリアと雷撃。

「っ、きゃうっ!」

『Master!(マスター!)』

突き出した右手に鋭い痛みとピリピリとした痺れにも似た感覚を感じる。

何故！？防御には成功したはずなのに！

『Kuooooon!!!』

暴走体の周りに展開されるバチバチと電気を発するスフィア。

プラズマランサー？それともスタンバレット？

『Kuoon!!!』

対空するスフィアが放たれる。

直射型のバレット？

「レijingグハート、もう一度！」

『Protection』

またバリアで防御。突き出す手も変わりません。

「っ、きゃああー!」

『Master!?(マスター!?)』

またです。バレット自体は防御出来ているのに、スタン効果だけがバリアをまるで素通りしているように

「まさか!?!」

八束神社、狐、電撃、リリカルなのは

4つのパズルから導き出された答え。こういう時は自分の無駄に回転の良い頭を疎ましく思います。

「最悪です……」

もしアレが私の考えている存在ならば、私は暴走体の攻撃をすべて回避しなければなりません。

「レイジングハート、これから先は防御は考えずに、機動攪乱で攻めますよ」

『I understand. I also judge th

at it is wiser. Please do not
carry out unreasonableness. (わか
りました。その方が賢明だと私も判断します。ですが無理はしな
いで下さい)』

「それは向こうが許してくれませんかでしょうね」

『Fushuuuu……』

バチバチと帯電する暴走体。体勢を低くしていると、突っ込
んでくる気のようにです。鳥居を壊される前に私は鳥居から跳躍し、
神社の屋根を足場にし、神社の裏手の森の中へ逃げ込みます。

アレを封印するには少々骨が折れそうですね。

『High plasma object! It is rap
id approach from back! (高プラズマ体!
後方より急速接近!)』

「回避後、180度ターンと同時にダイバインランサー展開!」

『All right!』

地面を滑りながらスライドマニューバーでプラズマ体を回避。

思った通り、プラズマ体は囿。

短距離限定の超高速移動魔法　　ブリッツアクション。

高町なのはのように魔力の無く、バカスカ砲撃を撃てない私には一撃一撃が勝敗の決め手になってしまう。さらに魔力の所為か、経験の所為か、練度の所為か、砲撃の威力も高町なのはには及んでいないように思えるのです。

そこで編み出したのが、近々中距離での攪乱から一気に懐へ飛び込んでの零距离一撃必殺砲撃。

砲撃魔導師とはかけ離れた戦闘スタイルですが、私はこうしなければまともな一撃が入らない。なりふり構ってはいられません！

私の右手の拳の先に展開される、環状魔法陣が取り巻くスフィア。

『K U O O O O O O ! ! ! ! !』

デイバインランサーの爆煙から飛び出して来た暴走体は口を開け、私に噛みつくこうとする。

私はブリッツアクションの加速をそのままに身を屈める。

上を過ぎ去る暴走体の口。

懐を捉え、ホバーフェザーの推力を上ベクトルで解放しながらアッパーを叩き込み、予め用意していた魔法を解き放つ！

「デイベインバスターー!!」

零距离でのデイベインバスター直接攻撃。

スバルが近代ベルカ式で放つそれを真似た物ですが、デイベインバスターはデイベインバスター。

威力は十分であり、加速度も相まって相当のアップパーになっているハズ。

現に私の3、4倍ある暴走体の巨体が浮き上がっていますし。

『Mode change! Cannon mode! Devine Buster. Stand by Ready!』

カノンモードに変形したレイジングハートを、浮き上がった暴走体の、デイベインバスターを打ち込んだ同じ箇所突きつける!

「シュートッ!!」

トリガーを引き、再び零距离でデイベインバスターを放つ!

『KYUOOOOO!!!』

「ジュエルシード、封印！」

『Sealing』

光りが晴れ、ジュエルシードと分離された狐。

『receipt number XVI』

「スウ……ふう……」

深呼吸をして、緊張状態を解きます。

やはり使える魔法が多いのは助かります。

それに昨日に比べて疲労感も大分軽いです。やはり優秀ですね、レ
イジングハートは。

「……………」

ジュエルシードに取り込まれていた狐を抱き上げてみます。

「……………」

もふ

「……………ふにゃあ……………」

な、なんですかこのふっくらもふもふもっころもかまかの癒やし物
体は ！？

「なのは！！」

「ユーノ？」

ユーノが来た様ですね。

「なのは！ジュエルシードは！？」

「しーっ、ですよ。ユーノ」

「????？」

とりあえず狐を抱えて、出来るだけ振動を出さずに裏路地の住宅街
の屋根をブリッツアクションとホバーフェザーを使って駆け抜け、
家に向かいます。

は、早くこのモコモコをゆっくり堪能したい！

ただただ、至福です。

「……クー……ク！？」

あ、起きたようですな。

キヨロキヨロ見渡している様がまたなんとも……。

至福です。至高です。アリサに匹敵する程の萌えです！

「！？ クー……！！」

後ろからもさもさの物体を抱き締めます。

……ふにゃあ……。

「クー……！！クー……！！」

「な、なのは、その子嫌がつてない？」

「なにを言いますかユーノ？ただ状況を理解出来ずに混乱しているだけでしょう？もう大丈夫ですからね？怖い物は私が取り扱いますから」

泣き声を上げて狐はもがき続けてる。

ユーノは見えて思った。

狐はなのはを見て余計に泣いているんじゃないかと。

しかしそれは口にしなかった。

もし口にしたら自分もアッパーディバインバスターからレイジングハートの零距离ディバインバスターの2連多段コンボでノックアウトされると僅かばかりにも想像して身震いがしたからだ。

「クーーーーー!!!」

「あっ…」

脱出に成功する狐。一目散に部屋の端に行くが、なのはの部屋は高町なのはの部屋より物が多くてかなり狭い。

狐は本棚の影に隠れるが、なのはの方を見ていた。

目のあったなのはは微笑むと、狐は本棚の影に隠れ、そしてゆっくりと顔を少し出してなのはを見る。

恐いけど気になる。そんな感じに。

「初めまして、私は高町なのはと申します。あなたの名前は？」

「……クー……クオン……」

「そう、久遠　ですか」

「クオツ　！？クー……」

私が久遠と正しく発した言葉にはつきりとビクンっと反応する狐。

状況証拠的にも、この狐は十中八九とら八の久遠なのでしょう。

ですが家には居候人は居ませんし、高機能性遺伝子障害病　通称
HGSでしたか？

それについてもまったく情報はありませんし、いったいどの程度この世界にとら八が混じっているのか皆目見当もつきません。

劇場版かTV版かも判らないのに横腹からとら八まで突っ込まれたら私もどうすればいいかわかりません。

戦鬪民族高町家。

もしとら八設定に汚染されていたら兄様と父様には私が夜に出掛ければ間違いないと気づかれるでしょう。

以前から海岸線に夜、泣きに行っていたことがあります、それでも月に一度二度あるかないか、あまり出歩いては心配もされず。

あまり夜は動くべきではないのでしょっね。

「久遠、こっちに来て下さい」

膝をポンポン叩いて促しますが、久遠は固まったまま動きません。
仕方がありません。

「クオン！？クー、クー」

「…ふにゃあ……」

至福です……。

「クーーーー！！」

「あ、あはは……」

現在封印したジュエルシードは3つ。

お供はユーノと久遠です。

「え？僕オトモ扱い？」

「クウーーーー！！」

「…ふにゃあ………」

第6話 新しい友達は『くおん』です（後書き）

V S 久遠でしたが、この久遠は未だに封印状態にあるため弱いという設定です。

しかも使える魔法の種類が増え、戦術の幅が広がり、ゼルエルを倒した我が家なのはの経験値はデカかったです。

決して久遠が弱いんじゃなく、なのはがちょっと強くなったのです。

とりあえず久遠をお供にする為に高町式 O H A N A S I でも

ちなみにとらハキヤラは今のところ久遠だけで限界です。

意見・感想をお待ちしております。

第7話 御神の剣（しるぎ）（前書き）

ちよつと長めです。

第7話 御神の剣(つるぎ)

side:高町なのは

ユーノを迎えたばかり故に、久遠もとなるとさすがに断られそうだと思った私は、家族には内緒で久遠を部屋に置くことにしました。

久遠はまだ少し身持ちが固いですが、それでも餌づけと毎日抱き締めて寝る事で、敵でない事をアピールします。

ジュエルシード、魔法と出逢って5日目。集まったジュエルシードは3つ。

高町なのはと違い、夜は出掛けずというか、出掛けられない理由が複数あり、これ幸いにとちゃんどぐっすり寝るようにしている為、疲労感は無く。レイジングハートも二度の戦闘経験から私の為にアジャストとブラッシュアップを繰り返して仮想戦闘シミュレーションを繰り返してデータを蓄積・更新の繰り返しで、日に日に少しずつですが、動きも良くなってきたように感じます。しかし私の戦闘スタイルは未開発で開拓中のスタイル。

まだ的が大きいくジュエルシードの暴走体だから当てられるものの、フェイト・テストロツサにはまだまだ届かないでしょう。

たとえ勝てずとも無様に墜ちるわけにはいかない。これは元男の私自身の男の意地というものです。墜ちるば諸共

そんな心構えで挑むつもりです。

さて、今日も学校ですね。

ユーノを肩に乗せ、久遠を置いて一度部屋を出て一階のリビングへ。

「母様、おはようございます」

「おはようなのは、ユーノくん」

キッチンでは母様が朝食の支度中ですが、他の皆が見当たりませ
ね。

「父様達は道場の方ですか？」

「そうよ。あ、ちょうどいいからなのは、みんなを呼んできて頂戴」

「わかりました」

玄関よりも近い縁側の方に回ってサンダルを引っ掛け、道場へ向か
います。

《そう言えば、道場って言ってたけど、なのはの家族はなにかやっ
てるの》

ユノが念話で質問してきます。そういえばちゃんと説明していませんね。

「永全不動八門一派・御神真刀流、小太刀二刀術」

《え、えーっと……》

《御神流は、二振りの小太刀を主軸に、飛針とばし 棒手裏剣のようなものや鋼糸こしと呼ばれるワイヤーのようなものなどの暗器、さらには体術なども用いた総合殺人術です》

《さ、殺人術って……》

《御神流は御神家という、父様の血統列の家の流派で、表立った要人警護を主とする御神流。そして父様の旧姓の不破家は要人暗殺を主とする御神流・裏を伝えているのです》

《な、なんか、壮大だね……》

《ええ。それで父様は師範代、兄様は師範代理、姉様は兄様から御神流を教わる門下生のようなものです。これが戦闘民族一家高町家の戦力図形態です。陸戦限定なら推定AAAからS+、条件付けでSSクラスでしょうね。私の私見ですが》

《す、凄いなだね……》

《達人ともなれば、表面を傷つけず衝撃で物の内部だけに破壊を引き起こしたり、模造刀でドラム缶を一刀両断することも可能です。以前兄様のを見たこともあります。スピード重視の剣術であるため、

力の強い者が用いる剛の剣に対しては多少不利な面もありますが、超能力を用いない純粹な人間本来の肉体・能力のみを用いた、『戦士』としての武術の中では屈指の流派でもあるでしょう』

《も、もういいよなのは。早く行こう》

《そうですね》

改めて御神流のことを軽く振り返ってみたこの時、私は思いました。そんな戦闘民族一家高町家の末妹である私にも、その血が流れているお陰で、2体の暴走体との戦いでも大きなケガもなく無事に終えられたのではないかと。

御神流

そのお陰で一度父様は命の危機を迎えました。

そのお陰で少し嫌悪感を持っていましたが、場合によっては兄様が姉様に頼んでみましょう。

近接高機動戦闘型砲撃魔導師

私の戦闘スタイルから造称した砲撃魔導師の新スタイル研究、開拓、開発、探求、確立の為に。

少しでも、戦術の幅を広げる為に

道場へ足を踏み入れると、腕を組んで立っている父様。そして道場の中心で

「せえいつ！」

「ふっ」

二本の小太刀の木刀で打ち合う兄様と姉様の姿。

「父様」

「ん、おはようなのは。そろそろ朝ごはんか？」

「はい。母様が呼んでいます」

「ありがとうな。でももう少し待ってくれ、今良い所なんだよ」

「良いところ？」

小太刀を構え鏝競り合う2人。

私は近くで見ようと父様の近くに寄ろうとしますが

「おっと……なのは、そこから先は来ない方が良さぞ」

「え…？ツ！？」

ゾクリッ、と。

背筋が冷たくなる感覚。

いきなりの感覚に身体が勝手にバックステップ、感覚を感じた方向に身体が身構える。身構える先には兄様と姉様。まさか

「今の……」

「んー、まあなんだ、殺気というか闘気というか……なのはにはまだ早いかなー？」

「いえ、言葉の意味は解せます父様」

頬と背中を冷や汗が流れ落ちる。

暴走体からは感じませんでしたから、初めての感覚に驚いてはいませんが、死線を潜り抜けた身、恐怖はそこまでは感じませんが、真正面から向けられたらわかりませんね。

高速の領域、私の視界では捉えられない速さの攻防に、改めて高町家の非常識さを実感します。

《すごい……これほどの戦士は僕たちの世界にもそうそう居るものじゃないよ》

《現代にもあまり居ないと思いますよ……》

《あ、なのは、危ない!》

《え? なっ !?》

ユ一ノとの念話の最中、一本の小太刀が私の方に回転しながら飛んで来ます。

また思考より身体が先に反応する。一瞬で戦闘体勢と思考を切り替えられるようにはなりました。

身を屈めながら腕を引き締め、上を過ぎ行く木刀へ身体全身のバネを使った渾身の一撃で

「ダイバインバスター!」

カチ上げる!!

クリティカルヒット、自分でも納得の行く入りの一撃に、私も少しずつ強くなっていることを実感します。

打ち上げられた木刀はそのまま天井に突き刺さると、床に落ちました。カランカランという音が道場に響き、ドンツという私の着地音が続けて響きます。

自分の右手を感覚を確かめるように握って開いて、そこで思考が切り替わり、気づきました。

や、やってしまいました……。

や、厨二病と言えば誤魔化せるでしょう。

「いやあ……凄いななのは、何時の間にそんなこと出来るようになったんだ？」

父様が和やかな声で言いながら、私に歩み寄って頭を撫でてくれました。

幾つになっても、頭を撫でられるのは良いものですね。

「ごめんねなのは、びっくりさせちゃって」

「いえ、偶然ですからお気になさらずに、姉様」

「驚かせてすまなかったな。それと、あの一撃は中々の切れだったぞ」

「恐縮です」

そう言って頭を撫でてくれる兄様。

言葉は少ないですが、こうして態度でそれを補ってあまりあるのが兄様。

その辺りが大変好ましく、尊敬しています。

「恭也には、俺からいう事はもうあまりないな。俺より強いんじゃないか？」

「まさか……まだ敵わないよ」

兄様でも敵わない父様はどれだけ強いのでしょうか？

それにしても、兄様もやはりとら八方面色が強いように感じます。何より踏み込みの時に一瞬脚を庇うように見えました。

おそらく私の知らない所で膝を壊している可能性もあります。

もう、劇場版とかTV版以前に、どこからリリカルなのか、どこまでとら八なのかまったくわかりません。

そのうちHGSとか出て来たりするんじゃないんですか？

そうになったらもはやカオスです。

「どうだ、なのはも御神流やってみないか？」

父様が私にそう言います。これは渡りに船ですが、ジュエルシードを探す時間の兼ね合いもありますし。

「…軽く、朝の稽古をつけてくれますか？」

「ああ、良いとも！」

私の言葉に父様は微笑みながら頭をガシガシと撫でてきました。

兄様より大きくてゴツゴツしている手。

私はこの手が大好きです。

「あゝあ、とつとつなのはも御神流を習うのかあ……なんか理不尽」

「俺は8歳から御神流をやっていたから、丁度良いと思うが」

「だってあの運動音痴のなのが、あんなアッパー決めちゃったんだよ！？私なんか直ぐ追い越されそう……」

「良かったじゃないか、その分、身につく速さが上がるんじゃないか？」

「わ〜んなのは〜！！恭ちゃんがイジメるう〜！！」

いや、今はなのはの拾ってきたフェレットと狐が居るか……。

その事で少し気になることもあるのだが……聞いて答えてくれるわけでもないだろう。あの子は必要無いことは言わない子だからな。それに今言えずとも何時か話してはくれるだろう。さて、暇だからな、ここは一つ……。

「久しぶりに手入れでもするか」

剪定道具を取り出し、庭の盆栽へと向かう。

パチン

意図せぬ方向に伸びた枝を切り落とす。

美由希や忍には年寄り臭いと言われるこの趣味だが……美由希は園芸、忍なら機械いじりといった事をしているんだし俺の場合、偶々対象が盆栽だったただけだ。

何よりこうしているとどこか心が落ち着くし、考え事をする時にもなかなか良い。

「あの日、からだだよな」

5日前の夜、なのはの拾ってきたフェレット。

作業部屋に紛れ込んで、中身を引っ掻き回され怪我をしたとなのは言っていたが、頬からの他に右腕の方からも微かに血の臭いがした。

そしてその翌日の夜には微かに焦げ臭い、あれは人肌の焼けた臭いだった。

機械いじりで火傷したと言っていたが、その日から家に狐の気配も増えた。

フェレットに狐となのはの怪我。何か関係でもあるのか？

それに朝、道場で俺と美由希の気迫を感じて見せた行動と、俺が弾いた美由希の木刀を力チ上げたアッパーに着地の体勢。

俺が言うのもなんだが、高町家の中で一番平々凡々に育ってきたのはが、何時の間にか荒削りだが戦闘経験者のような動きと気配を發した事。

何かあったのか、やはり気にし心配にもなる。

父さんもそれを気づいてなのはに、本人がどこかしら嫌悪感を抱いていた御神流を勧めたのかも知れない。

父さんが怪我をしたのはなのはが今の性格になってからの事だ。あの子は鋭い子だ。

御神流と 正確にはSPの仕事と父さんの怪我の関連に気づいていたのかも知れない。

それに俺の焦りとプレッシャーも。

その所為で、俺は一度妹の心を潰しかけてしまった。

俺達家族の罪。

だから父さんも怪我を期に仕事を辞めた。

俺も焦りとプレッシャーから来た無茶からの怪我を経て、御神流を、ただ父さんのように強くあるのでなく、大切な物を守る為に振るう事にした。

怪我が治りきらない俺には御神流剣士としての完成は絶望的だが、それは時間をかけて美由希がやってくれるだろう。

剪定のハサミ、その刃を小太刀の刃に重ねる。

「恭也、お前に守りたいものはあるか？」

昔々、そこまで昔じゃないが、父さんに言われた言葉。

その時の俺はまだガキだったからどうにも答えられなかったが、あの日、なのはが泣き腫らした顔をしてスケッチブックを大事に胸に抱いて、怯えながら帰ってきた末妹の姿を見た日から今日まで、そしてこれから先もずっと胸を張って、俺は父さんに言える。

俺が振るう御神流は、大切なものを守る為にあると。

契約のもと、その力を解き放て

風は空に 星は天に そして不屈の心はこの胸に

この手に魔導を

「レイジングハート、セットアップ!」

『Stand by Ready・Setup!』

レイジングハートとバリアジャケットを展開し、久遠を一度抱き締め
めてから、ユーノを肩に乗せて窓から外へ。

「レイジングハート」

『Hover Feather』

ホバーフェザーを展開し、暗闇の住宅街を駆け抜ける。

「レイジングハート、速度を上げて下さい」

『All right・Blitz Action』

ブリッツアクションも使い、さらに速度を上げて八束神社へ。

八束神社へ辿り着いた私はホバーフェザーを消し、境内を見渡します。

「境内には……無いようですね。もしかしたら裏の森でしょうか？」

「そうかもしれないね。行ってみよう？」

「ええ」

神社の裏側の森の中、とりあえず投影モニターに移した久遠との戦闘ログを振り返りつつ、久遠との戦闘場所にはサーチャーを、私達はその反対側へ向かいます。

ユーノの結界も張らず、剥き出しの空間でダイバインランサーやデイベインバスターを放ったのですから、その魔力余波に反応せず動しなかったジュエルシード。

それが意味するのは、魔力波が届かない場所にあったか、あとから持ち込まれたか

魔力流を打ち込んで強制発動とかの方が速いんでしょうが、フェイト・テストロツサのような無茶を出来ない私はそれも出来ない。サーチャーへの魔力も戦闘を想定するとそこまで数もまわせませんし、地道に探すしかありません。

「とは言え……少し視界が悪いですね」

森は薄暗く、闇夜に慣れてもやはり視界が悪いです。

夜空を仰ぎ見る。

漆黒の闇夜に浮かぶ満天の星光。

その中に浮かぶ月。

その月明かりのお陰である程度の光量がありますが、森を照らすには足りません。

「確かに、こつも暗いとね。僕が照明魔法を使うからちょっと待ってて」

ミッド式魔法陣がユーノの前に展開し、スフィアを形成。

これが証明魔法ですか。魔力光に関係なく普通の証明の照らすスフィア。

「これで少しは探しやすくなったかな？」

「ええ。では再開しましょう」

しかしこれで大体は読めてきた。

なのはは、妹は、かつての俺のように幼いながら、もう戦う戦士であるのだと。

ある程度納得できたが……何故こんな所に？

その時、ふと頭上で何かが羽ばたいたような音。

こんな時間にか……？この林でも、今まで鍛錬は幾度となく行なっているが、梟など夜行性の鳥類はいなかったはずだが。

「……………」
side…高町なのは

「……………」

「なのは、これは……………」

「ええ、ジュエルシードの気配……………上！」

『Guaaaaaa……………！』

「ッ！プロテクションー！！」

バリアを張り、何者かの攻撃を防ぐ。

「なのは！」

「ユーノ！結界を！」

「う、うん！広域結界！」

ユーノの魔法にて八束神社一帯を包む結界が張られる。

『G u a a a a a a a a ! ! !』

「と、鳥い！？」

「大きいですね。焼き鳥何人前でしょうか？」

現れたジュエルシードの暴走体は鳥型。大きさは約6m弱。

『G u a a a a a a a a ! ! !』

翼を羽撃かせ、暴走体は羽を弾丸のように放ってきた。

『Protection』

「くっ」

右手を突き出し、バリアで羽を受ける。

ボンッ！ボボボンッ！！

「きゃあっ！！」

「炸裂弾！？なのは大丈夫？」

「ええ…」

炸裂の余波は貰いましたが、怪我はありません。

「レイジングハート、ディバインランサー展開！」

『All right! Divine Lancer・Stand by Ready!』

「ファイア！！」

6つのスフィアからディバインランサーを連射。しかし暴走体は空へ飛び上がり、ディバインランサーを回避する。

「110」

『Guaaai!!』

「ファイア!!」

私と暴走体の間で、ダイバインランサーと炸裂羽の弾幕が激突する。

結界が張つてある分、派手に手加減無しにやれます。私のスペックも120%で運用可能です！

『Guaaa!!』

炸裂羽が無駄と見てか、暴走体は翼を羽撃かせ強烈な風を起こす。

「くっ、なんて風！きゃあああっ」

「な、なのは!!」

バリアジャケットや頬や手が裂け、全身に痛みが走り血が噴き出す。
まさか

「かまいたち!!」

『Guaaaaaa!!!!』

敵の回避予想地点を割り出し、そこへ

『Gua!?!』

「デイベインバスター!!!」

地上からホバーフェザーの推力を全力解放!

暴走体の懐にドンピシャで突貫し、アッパーと同時に零距离でデイベインバスターを撃ち込む!

そして

「ジュエルシールド、封印!」

『Sealing!!』

構えたレイジングハートのカノンモードの砲口を突きつける。

『Devine Buster!!』

『Protection.』

「くっ、ああああーっ!!」

バリア事押し、そのまま木に追突する。

「がはっ!!」

「なのは!!」

『Gyuaaaaaa!!!!』

暴走体が口を開け、私に迫る。

バリアも回避も間に合わない!

「くっ!」

「なのはー!!」

バリアジャケットの防御力を信じて、腕をクロスさせて頭を守る。

ですが、予想した衝撃も、痛みも、やって来ませんでした……。

『G、G e e e ……』

暴走体の開けた口の裂け目と後頭部に巻きつく光り……いえ、これは！

「鋼系こうじ！？」

月明かりで光る鋼系を目で辿っていけば、そこには

「兄……様……」

「逃げるのは！…！」

鋼系を腕に絡め、思いつ切り引いている兄様の姿。

「チェーンバンド！」

チェーンバンドで暴走体を雁字搦めに縛り上げる！

『G y u a a a a a ……！！！！！！…！！』

今度、こそ!!

「ジュエルシード!封印っ!!」

『Sealing!』

デインバスターの奔流が終わり、残ったのはジュエルシード2
個と黒い鳥……おそらく鴉。そして兄様の鋼糸。

『Receipt number XIII・XVII』

「っ、ぜい……はあ……はあ……はあ……がはっ!」

「なのはっ!!」

駆け寄ってくる兄様。

また、無茶をしてみましたね……。

「なのは!なのは!なのは!」

「……だい、じょうぶ、ですよ……よ。少し、やす……めば……」

兄様に魔法がバレた。

おそらくはユーノが魔法関係者で何らかの理由でなのはがそれに荷担したんだろう。

しかしユーノの様子をみれば、なのはが進んで協力しているんだろう。この子はそういう子だ。

「兄様……ユーノを、責めないで下さい」

「なのは……！」

「私が勝手に、首を突っ……込んで……いるの、ですか、ら……」

まだ呼吸が落ち着かないんだろうなのはだが、その顔はやり切った良い顔つきだった。

これは、責めたら俺が悪者だな。

「わかった。とりあえず、家に帰るぞ」

「はい……」

「ユーノも……な」

「僕は……」

なのはを背負って、俯くユ一ノの首根っこを掴むと、頭に乗せる。

「きよ、恭也さん……」

「話しはあとでゆっくりと聞かせ」

久しぶりに背負ったなのはの重みに、懐かしくも、最後に背負った5年前より重くなった妹に、何時の間にかこんなに遅しく育ってしまったことを少し嬉しく思った。

とりあえず美由希。お前本気でこのままだとあつという間になのはに抜かれるかもしれないぞ。

第7話 御神の剣（つるぎ）（後書き）

兄様に魔法がバレました。

とら八恭也スペックならこれくらいは大丈夫だろうか？

意見・感想、お待ちしております。

第8話 切なる言葉

side：高町なのは

私は兄様に背負われて家に戻ったあと、作業部屋にて兄様に現在海鳴市で起きていることとジュエルシードについてを説明しました。

ケガはユーノと私でフィジカルヒールをかけたので問題はありませ
ん。

「そうだったのか、だがユーノ、お前の責任感は立派だが、何故自分1人で来たんだ？事情を話せば仲間の1人や2人は着いて来てくれたんじゃないか？1人で飛び出して、ケガをして、今は結局はなのはに頼りきりの状態だ。仲間を呼べないにしても事前に色々必要な物や事柄をすべて終えてから来るべきだったんじゃないか？」

「うっ、す、すみません……」

その辺りは大人びて見えるユーノでも9歳故の脆さと迂闊さでしよう。

焦って準備を怠り、さらに攻撃力は私にも劣っているユーノでは、たとえレイジングハートを持っていても、それは蛮勇であり無謀ともいう行動でしょう。

まあ、そうなる運命であると言われてしまえば、私もユーノもそれ

までなのですが

「それになのはもだ。こんなに危険で一大事の事を何故1人で抱えようとしたんだ？」

「そ、それは……」

説明する為にレイジングハートに頼んで今までの戦闘ログを兄様に見せたのは失敗だったかもしれせん。いずれも軽傷とはいえ無傷ではなかった戦い。

それ故に兄様の眼光はユーノに向いていたそれよりも厳しく感じます。

「まあ、大きなケガもなく済んでいたから良かったものの、今日俺が居なかったらどうなったか、それは一番なのは自身が良くわかってるだろう」

「はい……」

あの時兄様が居なかったら、きっと私は

「魔法という時点で、確かに他人に話すには眉唾ものと取られるだろうが、俺達は家族だろ？」

「っ!」

「もう少し、俺達の事を頼ってくれたって良いんだぞ?なのは」

兄様の言葉は嬉しく心を満たし、そして残酷に私の心を抉る。

本物の高町なのではない、異物な存在である私を家族と言われる嬉しさと、高町なのはへの罪悪感が私を蝕む。

「とりあえず、なのはが話すまで俺は黙っておくから、ちゃんと話せるようになったら話すんだぞ?」

「はい…」

家族。甘美な言葉は私に温もりと痛みを与える。

高町なのではない、異物の私には享受する権利の無い言葉だ。私が高町なののである事を証明するまでは

「クウ……」

「大丈夫ですよ、久遠」

心配そうに私を見る久遠に顔を埋める。

まだ4日でも、久遠は私の事を好いてくれているのを感じます。

この世界がどの程度とら八に浸食されているか判りませんが、場合によっては久遠から祟りを打ち払うのを私がやらなければならぬかもしれない可能性もあります。

ある意味、私は久遠とアリスに依存しています。それは魔法少女リカルなのはにおいて、久遠もアリスも存在しない存在だからです。

久遠はとら八キャラではありませんが、それでもリカルなのは色の強いこの世界で運命でなく偶然が紡いだ、『私』の絆だから。

アリスは言わずもがな、私が産み出した私だけのファミリア。

高町なのはでなく、私自身が私の力で紡いだ絆だから、必要ない壁も作らずに懐を許してしまえるのです。

兄様が出て行った作業部屋で、私はスケッチブックにペンを走らせる。

魔法と出逢って、止まっていた作業が少し進ませる事が出来ました。

何時か久遠と戦わなければならない可能性もあるかもしれない現状、ミッド式魔法だけでは、私は久遠に敗北するしかありません。

ミッド式もベルカ式も、理数系科学によって行使される事象。私基準で言えば科学式で魔法を再現しているだけの物。

純粋な妖狐である久遠相手には、防御しても久遠自身の妖力や霊力効果を防ぐ事が出来ない。

私が久遠と戦った時に電撃だけ通ったのがその証拠です。

レイジングハートの協力で、この世界にもエーテルがちゃんと存在している事が判りました。

あとはそれを使うだけの式が出来れば、魔導師殺しやAMF環境下でも普通に戦闘が可能でしょう。あとは私にどこまでプラーナが存在するのか、そこは戦闘民族一家高町家が末妹の身体スペック次第ですね。

翌日。

私は何時もより少し早起きをして、部屋の中でいつもの筋トレを始めます。

逆立ちして腕立て、腹筋、背筋、そして久遠を頭に乘せてのスクワット。

それが終わった後は軽く汗を流して、道場の方に向かいます。

道場には既に兄様が素振りをしていました。

「おはようございます。兄様」

「おはようなのは。昨日はぐっすり寝られたか？」

「はい。お陰様で」

挨拶を交わし終えたところで、私は以前から気になっていた模造武器を見てまわる事にしました。

野太刀から小太刀、手裏剣や鋼糸、さらには槍からトンファーまで、さすがにハンマー系はありませんでしたが、それ以外の武具なら大抵はある様ですね。さすが総合殺人術御神流。小太刀が主軸でも場合によっては小太刀を振るえない状況も考慮されてもいるのでしよう。

私は薙刀とトンファーを取り出して手に握ってみます。

薙刀や槍はレイジングハートを振るう面では使える技術ですね。

薙刀を戻し、一本のトンファーを左手に持つ。

将来はコレに似た武器も扱うようになるかもしれません。

高町なのはが御神流を習っていたら、魔王でなく冥王と呼ばれていてでしょうね。

その後、兄様と姉様はまた互いに打ち合い稽古。

私は父様から御神流とはなにか？についてのレクチャーを受けました。

内容は私の知る物とあまり違いはないのですが、ただ知っているのと、実際に耳に聞くのは重みが違います。将来のこともある為、私は御神流剣士になることは難しいでしょうが、勧めてくれた父様の

それを越える為の力が御神流。

大切なものを守る剣、御神流。

その志しからとは離れたところに使おうとする私には御神流を振るう資格などないのでしょうが、せめて今年だけは許して欲しい。

今年が終われば、無印やA・Sも終わる。

だから今だけは

「なのは〜！一緒に入ってもいいか？」

父様の声で現実に呼び戻されます。

「ええ、構いませんよ」

「それじゃあ失礼するよ〜」

腰にタオルを巻いて風呂場に入って来た父様の身体は、私以上にハッキリと判る傷痕だらけです。

「なのはと風呂に入るのは久しぶりだなあ」

「そうでしたね」

私の記憶では、最後に入ったのはこの私になる前の私の臆気な記憶の中で。

つまりは5年振りくらいでしょうか？

「それにしても、なのはは呑み込みが速いなあ。なのはには剣士の才能があるのかもしれないぞ？」

「剣士……ですか……？」

私が思うに剣士と言うよりも近接戦闘スタイルでしょうね、砲撃魔導師であるのに近接戦闘スタイルを主軸とする矛盾を孕むコブセン下。

しかしその矛盾した戦法で、私は3度勝ちを取りにいきました。そして3度勝てた。

高町なのはでありながら高町なのはでない矛盾した異物の私が使う矛盾した戦闘スタイル。

ですが私にはこのスタイルでなければ勝つことすら出来ない劣化物。情けないことこの上ない。

「なのは、何か悩みでもあるんじゃないか？」

頭を洗ってもらいながら、父様に訊かれました。父様にはわかってしまっただけですね。

「ええ。悩み事はありません。ですがこれは、私にしか……私自身が解決しなければならぬ事故、父様にも話せません」

「そっか。なのはも、大人になって来たんだな」

大人……ですか。

果たして、そうでしょうか……。

私が大人であれば、兄様や父様に助力や助言を申し上げるべきでしょう。

ですが、それは出来ません。

ジュエルシード事件は、私の力で解決していかなくては。

私が高町なのはになる為にも

こんな子どものような意地を貫こうとしている私は、大人ではありませんよ。

第8話 切なる言葉（後書き）

一応ちよつとしたお説教で今回は終えて、兄様や父様からお言葉を

家族

我が家なのはにとつてはとても大切で、本家なのは次に心の悩み
です。

私も戦闘民族一家高町家に居候してみたい……。

第9話 さすらいのバウンティ・ハンター ナノハ・タカマチ ！？（前書き）

軽く誤字を修正。

第9話 さすらいのバウンティ・ハンター ナノハ・タカマチ ！？

side：高町なのは

日曜日になりました。

今日は父様は、自らオーナー兼コーチを務める翠屋JFCの試合の日故に、私の稽古はお休みです。変わりに道場の隅で御神流 斬の練習と魔力を使った新たな技法の編み出しと、身体を流れる生命エネルギー、プラーナを引き出せないかを試行錯誤していました。

エーテルが存在するならばプラーナも存在するはず。

プラーナが引き出せなければ、せつかくの魔装機神体系の魔法造称『ラギアス式』魔法の研究が無駄になります。

ラギアスはラ・ギアスから取っているのは一目瞭然でしょう。

このラギアス式はミッド式を流用し、空間に存在するエーテルに対し、プラーナで介入し、魔術式で効果を引き出す物。

ミッド式から術式を流用している為、ミッド式やベルカ式の防御魔法で防御出来ますが、最大の違いは対AMF環境下でも運用に支障がないところでしょう。

なにせAMFは魔力結合を阻害する物であり、ミッド式やベルカ式に使われている魔力素はエーテルと別物の上にトリガーは生命エネルギーのプラーナ。AMF効果の対象外ですから。

ただ、プラーナがなければ魔装機を動かせないのと同じで、プラーナがなければラギアス式も無意味ということでしょう。プラーナを使う関係上、レイジングハートのようにデバイスがオートで魔法を使うということも出来ません。使える者と使えない者が分かれてしまつのは、ミッド式やベル力式と変わりはありません。

自主稽古を終えたあとは、姉様と汗を流してから出掛ける用意をします。

服装は黒のインナーに黒の長袖シャツ、下は黒色のスラックス、黒のオーバーコート、赤のマフラー、黒のテンガロンハット

どこそのエンドレス・フロンティアのさすらいのバウンティハンターみたいな格好が私の外出着です。

ちなみにテンガロンハットこそこのなのはの身体になってから被り始めましたが、それ以外は転生前も着ていた服装故に、これが私の私服と胸を張って言えます。

ちなみにバリアジャケット設定時も今のとコレでかなり悩みました。

閑話休題。

「おはようなのはちゃん！」

「おはようなのは！って、またアンタそんな服装を……」

「グッドモーニング、キューティープリンセス。良き朝ですね」

ちなみにこの身体になってテンガロンハットを被ってから、ハーケン言葉を使ってみてたりします。

だってカッコイいんですもん。それにこの良き容姿だから許される厨二病キャラ作りとか、やらなくては損ですよ？

「アンタ、少しくらい女の子らしいオシャレとかしようとは思わないの？」

「私はカッコイいから良いと思うんだけどなー」

「さすが！良いの！？このままなのはが男の子になっちゃっても！」

「そ、それは……………良い…かな？」

「なんで顔朱くすんのよ！！……………ま、まあ、それはそれであたしも……………」

「さすが、何を想像して顔を朱くしているのですか？」

「それとアリサ、怒って朱いのかすすかと同じ意味で朱いのかわかりません。」

「OK、フェイスレッドガールズ。そろそろ行かないと試合に遅れますよ？」

「わ、わかってるわよ！行くわよなのは！さすが！」

「うん。行こっかなのはちゃん。アリサちゃん」

「OK、行きましょう」

私を真ん中にして、左右にアリサとさすがが並んで歩いて行きます。

ちなみに2人とも手荷物有りですが、私は手荷物無し。しかしコートでわかりませんが、後ろ腰に小太刀の木刀が挿してあります。護身用です。

あと半分趣味で造った炸裂火薬打ち出し電動式超合金エアガン『ナイトファウル』と火薬加速式超合金エアガン『ロングトウム・スペシャル』を一丁ずつ。威力は人体に撃つと結構痛いですが、少し赤くなるくらいしかありません。まあ、眼に当たると怖いですが。

軽く銃刀法違反してますね。まあ、バレなければ良いでしょう。

河川敷にあるサッカーコートまでくれば、サッカーユニフォームを着た男の子達が軽くアップを始めていました。

5月は時々軽く寒かったりしますから、少し羨ましいですね。私は低体温で寒いので嫌いですから。厚着しても寒いんですね。

「なのは、アンタ大丈夫？」

「さ、寒いのかな？なのはちゃん？」

「ズズ……大丈夫です。ちょっと寒いですが……」

ひよう……と、河川敷特有の冷たい風が頬を撫でゆく。

「クシユッ」

「ちょ、なのは！？」

「か、カゼひいてないよね？なのはちゃん！？」

「大丈夫です。ご心配なく」

しかしクソ寒いですね、5月の河川敷。

「少し身体を温めて来ますね」

「え、ちょ、なのは？」

「な、なのはちゃん？どこ行くの？」

「直ぐそこですよ」

土手を降りて父様の隣りへ行きます。

「父様、おはようございます」

「お？来たかなのは。アリサちゃんとすずかちゃんも一緒か？」

「ええ。土手の方に」

危なっかしく土手をゆっくりと降りてくるアリサとすずかを一度振り返ってから父様に向き直ります。

「少し端で身体を温めてきます」

「ん？ああ、気をつけてな」

「わかりました」

てくてくと歩いて、コートの端側、子ども達の少ない方へ行きます。

しかもなんかちょうど良い高さの切り株も発見。ふむ、やってみましようか。

まずは後ろ腰から木刀を抜き、抜きと入りと突きから御神流 斬へ繋げます。

切り株には僅かに線が入る。

それを5回繰り返してから、木刀を戻してナイトファウルを右手に持ちます。私は左利きですが、転生前は右利き故、実質両利きです。

「OK、シヨウタイムです」

切り株に向き、帽子を押さえて宣言します。

「リッパ―！ハチの巣です。OK、ラストです！グッドナイッツ！
」

リッパ―の斬撃に射撃を織り交せて、最後にステーキを撃ち込むテキサス・ホールデム。

まあ、弾はBB弾ですし電動マシンガンですからそこまで威力は無く、弾は弾かれます。しかしリッパ―とステーキは頑丈、ステーキは炸裂火薬で実際に撃ち出している為、切り株には斬痕と穴が残ります。

暇にかまかけて習得したハーケン・ブラウンングの技の数々。まあ、忘年会新年会隠し芸大会ネタに覚えてみたものですが、完成度は私が納得するまで練習した所為か、完璧です。

「ハイロー・ドロー！私の曲撃ちと早撃ち、たっぷりご覧あれ」

ナイトファウルを真上に投げ、ロングトウムで撃ちつつ落ちてきたリッパ―が回転しながら切り株に斬痕を残す。

ロングトウムの弾を変えながらナイトファウルを回収。

「フル・ハウス！撃ちます！斬ります！ここが勝負どころです！私の捌きもなかなかでしょう？」

ナイトファウルを片手で器用に回転させ、リッパ―攻撃とマシンガン攻撃の乱舞をお見舞いする。

「7連ステークです！せい！や！7発目！！」

ナイトファウルのステークを1発上向きに撃ち、そこから身体を回転させて2発連続で上向きに撃ち、水平に1発、切り株に背を向けて脇の下からナイトファウルを出して1発撃ち、身体を向き直らせてラストの一撃。

「これでショウダウンです。私に惚れないで下さいね？」

決めセリフを言いながら帽子の鍔を拳銃に見立てた左手の人差し指を下から押すように添える。

フツ、完璧に決まりましたね。

気分も体温も良い具合に高揚しています。

ちなみにファイヤー・マウスとベスト・フラッシュ 2nd、ファントム・ホールデム以外は出来ます。しかしこの服装時限定で、ハーケンになりきらないと出来ないんですけど。なりきりダンジョン？

パシンツッ！！

「痛いですよ、アリサ」

何故かハリセンを持って顔を朱くしているアリサ。

「あ、アンタ！それ本物じゃないでしょうね！？てか、私に惚れないでってなんなのよ！？なにがしたいのよ！？曲芸師にでもなりたいの！？てゆーかおもいつき目立ってるわよ！！」

「なのはちゃん、カツコイい……」

ツッコミ乙ですアリサ、アナタなら八神はやてと全国行けますよ。

そしてすずか、練習すればあなたにも出来ますよ？

「ほんと！？教えてなのはちゃん！」

「やめい!」

すずかは雰囲氣的に、てか名前に錫華姫でも

「OK、エブリワン。とりあえず静観静聴に感謝します」

帽子に手を乗せながら会釈。

ハーケンはカッコ良くキザにキメるんですよ。

まあ、試合前の余興としては重畳でしょう。

「(凄いななのは、あんな曲芸染みた技、どこで覚えて来たんだ?)

」

「(なのも別ベクトルで軽く非常識だと僕は思うんだけどなあ…
…)」

なののは曲芸撃ちにそんな感想を抱く父とフェレット少年だった。

|||||

試合は終わって昼食は祝杯も兼ねて喫茶翠屋で。

私もアリサとすすかと一緒に、翠屋の屋外テーブルで茶会を楽しんでいました。

「試合凄かったね。すすか」

「うん。私、胸がときどきしちゃったよ」

未だに興奮冴えやまない2人を見つつ、私はナイトフアウルとロングトウム・スペシャルの手入れをしつつ、コーヒーを口に含みます。味は砂糖ゼロで牛乳4割の高町なのはスペシャル。一杯100円也

「でもなのはちゃんの曲芸もカッコ良かったよ!」

「アンタあんなのどこで覚えてくんのよ……?」

「禁則事項です」

人差し指を唇にあてがいながらウィンクで返答します。さすらいのバウンティハンターは多くを語らないのですよ。

「アリサちゃん、すずかちゃん。今日は応援に来てくれてありがとう。楽しんでくれたかな？」

店から父様が出て来ました。サッカーチームは解散したようですね。

今は喫茶翠屋の店長の時間の為、父様はエプロン姿です。

さっきまでは翠屋JFCのコーチだった為にジャージ姿。家に帰れば兄様や姉様の鍛錬の為胴着。何も用事が無いときは私服と。

家で一番衣服がコロコロ変わる人物でしょう、父様は。

そして意外にも変わらないのは母様でしょうか？専業主婦だからでしょうか……。

「今日はお誘いしてくれて、とても楽しかったです」

「試合、とってもカッコ良かったです。なのはちゃんも」

「パパもびっくりだよ。いつの間になってね」

「子どもは陰日向で日々成長するものですよ、父様」

「はは、違くない」

父様の笑い声を聞きながら、残ったコーヒーを飲み干します。

何故かやはりこの格好になると味覚が大人に戻るんですよね。

憑かれている？呪いの品ですか？

たかまちなのははのろわれた。

なんてテロップとか出ませんよね？

「それでは私達は今日はこの辺でお暇します」

「おや、お出掛けかい？」

「はい。お姉ちゃんとお出掛けに」

「私はお父さんとショッピングです」

「そうだったのですか、近くまで送りましょうか？」

「ううん。迎えに来て貰うから」

「あたしもよ」

「そうですね、明日お話しを聞かせて下さいね」

「うん！」

「いいわよ」

そして私達も解散しました。

「なのはは、これからどうするんだ？」

「そうですね。せつかくの日曜日ですし、久しぶりにウィンドウショッピングに行ってきます」

行き先は家電量販店やジャンク用品店が中心ですが。

「そっか、気をつけて行ってらっしゃい」

「はい。では行ってきます」

ユーノを肩に乗せて私も街へ向かいます。

「ユーノ、一度家に行って久遠を連れて来て下さい」

《え？別にいいけど、久遠を迎えに行つてからでも》

「意外と重いんですよ、この格好」

《あー、うん。わかったよ》

肩から離れるユーノを見えなくなるまで見送ります。

「さて、家電、パーツ、材料が私を待っています」

私は胸を踊らせつつ、しかしクールに歩を進ませ始めました。

しかし、後の私はこの時の選択を、一生並みに後悔するのです

第9話 さすらいのバウンティ・ハンター ナノハ・タカマチ ！？（後書き）

ほとんど暴走ネタです。

嵐の前のオチャラケとも言いますが

整った容姿だからこそ許されることもありますよね？

ハーケンと零児のやりとりが好きです。

第10話 哀哭するは星光の心 - It screams to pathos

またまた誤字修正になります。期待させてごめんなさい。

第10話 哀哭するは星光の心 - It screams to pathos

side: 高町なのは

「こつして出掛けるのは、久しぶりのような感じがしますね」

『Well. Because this one week
as these very days.』(そうですね。
この一週間は、とても濃い毎日でしたからね)『

受け答えたのはアリス。

今私達はあの海岸へ来ていました。

私の泣き場にして、私が私を始め、私が高町なのはを目指し始めた場所。

「たった3度ですが、私はあの時から強くなっているとは思いますが」

でなければ鴉の暴走体にも苦戦していたことでしょう。

上手く立ち回れるようにはなった。

でも高町なのはには程遠い。

近接高機動戦闘型砲撃魔導師

私が使っ異端で矛盾の戦闘スタイル。

御神流

守る為の剣。

高町なのは

私であり、私でない。

不屈の心と正義感に溢れる心優しき魔法少女。

『高町なのは』

高町なのはではなく、高町なのはである私。

沢山の友人を得て、家族に囲まれて、将来は魔法使いの男の子と敵対しながらも恋をする乙女に

将来は友人に囲まれながら様々な期待と希望を背に、娘を育てる良き母親に

そんな未来を奪い、居場所を奪い、身体を奪い

高町なのはに成り代わる存在の私。

私が『理』を真似るのは、本当の本当は、高町なのはへの罪悪感を少しでも誤魔化して減らす為

私は星屑。

私は居てはいけない存在。

この世界で生きている権利すらないはずの存在。

この世界にとっては異物の存在。

そんな世界に逆らって、もがき足掻いて、方法すらわからないのに自分が高町なのはある事を証明するのだと言って、世界と意地を天秤に掛ける最低のうつけ者。

こんな私、何度も消えてしまえと思った事は数知らず。

本物の高町なのはが私を消し去ってくれらるだろうと思いつけ星霜を
経る。

でも

「（消えたくない。消えたいのに……消えたくない！）」

5年だ。

たった5年。

私にとっては人生の1/6の時間。

たったそれだけの時間で、世界は残酷にもしかし温かく私を縛り付ける。

父様、母様、兄様、姉様、アリス、レイジングハート、アリサ、すずか、久遠、そしてユーノ。

私の運命と偶然が紡いだ絆。

運命は必然

偶然も必然

宿命も必然

世の中は必然で出来ているらしい。

なら、私の存在は何だ？

必然？

そんなバカなはずがない。

次元断層に巻き込まれて死んだのを、閣下の温情でこの世界に生まれ変わったにすぎない。

異物に必然など　　あるうはずもない！

「世界は、私は、こんなはずでは、無かったのでしょうか……」

『Meister. (マイスター)』

唯一なのは歪んだ内面を知るアリスは、自分の無力感を嘆いた。

スケッチブックに宿る不完全なデバイス、なのはの使い魔。

自分の存在がマイスターたるなのはに負担を掛けている。

消えてしまいたいと、この一週間何度も思った。だがマイスターの心の弱さを正しく理解しているアリスには、消えることすら出来ない。

なのははアリスに依存している。

それはアリスがファミリアだから、もう1人の自分であり、自分を支えてくれる存在だからだ。

今アリスが消えれば、なのはの心は壊れて砕け散るだろう。

世界の運命と、なのはの存在意義の掛かっているこの戦いには、負けは許されない。落ち込んでいても、折れることは許されない。

そんな現状が、なのはとアリスを追い詰めていた

「っ！？」

『Meister! (マイスター!)』

『Jewel Seed is Awakening! (ジュエルシードの発動を確認!)』

魔力波を感じた方向　街中から強力な魔力を感じ、巨大な巨木が生えていった。

ガスツ!!

「なんたる失態ですか!!」

コンクリートに拳を叩きつけ、私は巨木を見みながら思い出した。

今日この日、ジュエルシード最大級の被害が起こってしまうことを……。

「レイジングハート!」

『Stand by Ready!』

我、使命を受けし者成り

契約のもと、その力を解き放て

風は空に　星は天に　そして不屈の心はこの胸に

この手に魔導を

「レイジングハート、セットアップ!!」

『Stand by Ready・Setup!!』

変形したレイジングハートを握り締め、バリアジャケットが形成される。

『Hover Feather! Blitz Action!!』

「くっ!!」

初速無しで一気に瞬間最大速度で、私は街に向かって駆け抜ける!

木の根を撃ち落としながらとにかく中心へ向かうのですが

『Next! intercept coming at 3 o

clock, 11 o'clock, 6 o'clock!

(次! 3時方向、11時方向、6時方向、迎撃が来ます!) 『

「全力で撃ち落としますよ! デイバインランサー!!」

『Devine Lancer! Standby!!』

「ファイア!!」

8つのスフィアからディバインランサーを撃つ。

ディバインランサーは直射魔法故に、自分がトロンベよろしく回転しながら木の根を撃ち落とし、先へ。

木の根の外輪部に着いてからまるで私の侵入を拒むように、木の根やつるのムチ、はっぱカッターやリーフブレードなどが襲いかかってきます。

幸いにも葉っぱやつるは強度がそのままのようで、ナイトファウルのリッパで斬り裂き、木の根はディバインランサーやシュートバレットで撃ち落とししている為、そこまでの消耗が無いのが助かります。

まさかネタレプリカ武器と忘年会新年会隠し芸大会用に身につけた技がこうして実戦で使う日が来ようなんて思いもしませんでしたよ。

左手にレイジングハート、右手にナイトファウルを握って、私は街中をひた駆けます。

途中で巻き込まれて逃げ遅れたり、退路を塞がれた人の救助なりもしているのです、進行スピードは遅いですが、気づいて然るべき私が気づけず、被害を広げてしまった私が出る償いは、これしかありません。

ちなみに顔はテンガロンハットを眼深に被って、出来るだけ顔は晒さないように努めています。

あたしも脚が笑ってる。

でもあたしが少しでも不安をみせたらすすかは泣き出しちゃうかもしれない。

あたしだって怖いけど、そんなのイヤ。

すすかを泣かせる位なら、あたしが少し我慢すれば良いだけ。

「大丈夫よすすか、きっと助けが来るから」

「で、でも……」

怖がっているすすかの手を握る。

少し痛い位に握り返されたけれど、顔には出さない。

それでもバニングスの跡取り娘なのよ！

ふ、普段は恥ずかしかったりして出来ないけど、今この非常識な状況だから出来る。

ポーカーフェイス

「私に惚れないで下さいね？」

「まだ見つかりませんか……」

エリアサーチをかけながら探してはいますが、私はそこまでマルチタクスにリソースが割けないというか、あっちこっちで頭を働かすという考え方が未だに馴染まず、エリアサーチはレイジングハート任せ、レイジングハートがエリアサーチにリソースをかけている分、今は私が単体で放てるシールドバレットとナイトファウルでの戦闘を行っています。

『Master・(マスター)』

「見つけましたか!？」

『Please see this, although Jewel Seed is not found yet・(ジュエルシードはまだ見つかりませんが、これを見て下さい)』

戦闘の邪魔にならないように表示されたモニターには、半ばジャングルと化した街を歩くアリサとすずか。

血が出る程に唇を噛み締め、レイジングハートとナイトファウルが震える程、手が白くなる程握り締める。

やっぱり私には高町なのではあるところか、2人の友達という立場すら許されるべきでは無かった……!

私に関わってしまったばかりに、こんなことに巻き込んでしまっ

た！

『Master! Jewel seed was discovered! They are together action immediately to the outside of a friend! (マスター！ジュエルシードを発見しました！友人方のすぐ傍に反応有り！)』

「ホバーフェザー推力全開！！ブリッツアクション！！」

一気に高機動に移行した所為か、再び暴走体の迎撃が再開。その勢いは真つ直ぐ本体に向かっている所為か、先ほどとは比べ物にならない。

「邪魔を」

つるのムチ、はっぱカッター、リーフブレードを斬り裂き八チの巣にステークで撃ち抜き、遠方はディバインランサーで迎撃。

「するなあああー！！！！！！！！」

何時もの自分すら忘れて、以前の自分が表に出て来る程、私は周りも見ずに一直線に突き抜けて行く！

アリサもすずかも、高町なのはの運命によって出逢うのは必然だっ
たかもしれない。でも

「私が紡いだ3年間は、運命だ必然だなんて言わせない!!」

正面から迫る鋭いつるのムチをグレイズで回避しながらリッパで
斬り裂く!

「アリサもすずかも」

四方からくるはっぱカッターをナイトファウルで八手の巢に撃ち墜
とす!

「傷つけさせはしないっ!!」

視界の先に捉えたアリサとすずか。

本体に近寄り過ぎた所為か、2人を追い払うようにはっぱカッター
が集まり魔力を宿し、リーフブレードに変わる。

「どんな魔法だろうと!!ただ」

レイジングハートを握る拳の先に環状魔法陣が展開。ブリッツァクシオンを連続で使い、2人の前に立ちふさがってリーフブレードに拳を打ちつける！

「撃ち貫くのみ！！ディバインツ、バスターー！！！！！」

私の十八番、零距离ディバインバスターはリーフブレードを撃ち碎き、そのまま生い茂るジャングルに風穴を開けて消えた。

「な、なのは……は……」

「なのは……ちゃん……？」

兄様に続けてこんな早期に友人にも正体がバレる魔法少女も稀でしょうね。

ディバインバスターを撃った所為か、私に向けて木の根、つるのムチ、はっぱカッター、リーフブレード、さらには私の放ったのをコピーされたのか、シユートバレットまでが殺到する。

防御も回避も無理と即座に判断した私は、アリサとすずかを守るように抱きすくめ、2人の衣服に干渉、イメージし易い私立聖祥大附属小学校の制服姿のバリアジャケットに再構成、有りつ丈の魔力を防御にまわす。

バリアと暴走体の攻撃が殺到してぶつかって弾ける音に炸裂音。

永遠にも、刹那にも感じる一時

『M e i : s : t e r : … (マイ…スター…)』

背中に感じる熱と途切れ途切れの弱々しい、レイジンググハートとは違う電子音。

背中を振り返れば、突き刺さっている木の根が見えるだけで3本。内どれか1本が貫通していて、お腹が痛くなってそれから熱くなつて

でも私のことなんてどうだって良い……。

『I s : i : t s a f e : ? (い、無事…ですか…?)』

私の背中にはいつも

「ア…リ…ス…?」

口に広がる鉄臭い味。

それすらどうでも良い……。

『It was good. My darling
meister (良かったです。愛しい私
のマイスター)』

「アリス…？アリス？」

『……………』

「ふざけッぽっ、…て…ない…で、返…事…して…
下さい…よ……」

私の中で何かがキレ、何かが砕け散る音がした。

シュートバレットで私に刺さる木の根を寸断する。

背中やお腹の痛みも熱さも感じない。ただ感じるのは

言い表すことの出来ない程の喪失感。そして怒りと憎悪

レイジングハートがカタカタと揺れる。

手に爪が食い込んで血を流す。

それは心を支配する感情によって涙を流す余裕のない私から溢れ出した涙だった。

魔力がすつからかんで笑う膝に喝を入れて大地を踏みしめる。

「なの……は……それ……」

「な……のは、ちゃ、せ、せな、か……」

友人の声すら遠く感じるのは血の流しすぎか、それとも心の余裕の無さが、いや、そんなのもうどつちでも良い。

背中に刺さる木の根を煩ったしく思いながら背中からバックを下ろす。

血濡れの私立聖祥大附属小学校のバック。

その中には穴の空いてしまったスケッチブック。

それを込められるだけの魔力を込めて抱き締める。

半分がデバイスならリカバリーも効くかもしれない。

心の底から想いを込めて祈った。

スケッチブックが淡い桜色に光って、損失を回復させる。

スケッチブックをバックの上に重ね、それをアリサとすずかの前に置く。

私は”3人”を背にして、ジュエルシードの暴走体の本体を見据え

る。

「レイジングハート……カノンモードへ」

『Mode change・Canon mode』

これほどまでに何かを憎んだ事があるだろうか

これほどまでに何かを消してしまいたいと思ったことがあるだろうか

展開されるホバーフェザー、残った魔力は少ない。デバインバスターもあと1発。これじゃあ届かない。

「レイジングハート……フルドライブ」

『I am sorry. It is a master which is not made. Then, the body of a master does not maintain. There is even a crisis of a life function! (すみません。それは出来ませんマスター。それではマスターの身体が保ちません。生命機能の危機さえあります！)』

「構いません。私は　それで構いません」

『I care about! Master. Reexamination of a command! (私が構います! マスター。命令の再検討を!)』

「早くして下さい。私が理性と意識を保っている内に……」

『Yes... Master...』

貴女には、無理を聞いて貰ってはかりですね。

こんな我が儘で行き当たりばつたりのマスターで、貴女も呆れていることでしょう。

カノンモードのフレームから一対の桜色の翼が生える。

「堪忍袋の尾が切れました……」

レイジングハートを構え、カノンモードの砲口を暴走体の本体。男の子と女の子の、2人を守るようにバリアを張って滞空するジュエルシードへ向ける。

「フルブースト!! ブリッツアクション!!」

『All right. Full boost. Blitz Action.』

「っ、なのは!!」

「なのはちゃん!!」

「はあああああ————!!!!!!」

一気にトップスピードに加速。空気の壁すら突き抜けるような速度で、ジュエルシードのバリアに砲口を突き刺す!!

「レイジングハート!!もつと推力を!!」

『It is useless!! More than this is useless!! Absolutely useless!! (ダメです!!これ以上はダメ!!絶対にダメ!!)』

初めて聞いたレイジングハートの感情的な声。

電子音でも伝わる気持ち。

でも私は

「オーバーブースト!!」

自分で術式を組み、無理やりに推力を上げる!

飛び散る魔力を集めて更に推力に転化する。

血が溢れゆく、眼が霞む、手から力が抜ける。でも!!

「もつと強く!!もつと速く!!もつと熱く!!」

カノンモードの砲口へ魔力を集中的に込め、魔力刃を形成する。魔力刃とバリアは火花とスパークを散らして凌ぎあう!

単純な出力勝負。出力が負けている私にはバリアを破る力が

「ッ、デイバインツ、バスターアアアッ!!!!」

零距离デイバインバスター。いつも、何度も、私に立ちふさがる脅威を撃ち抜いてきた一撃必殺の一撃。

「ブレイクツ、シューーートツ!!!!」

この一撃の前に、撃ち抜けないものはない!!

閃光と爆碎音に視界と耳を奪われる。でも手応えが消えない!!

「あああああ————っ！！！！！」

雀の涙程度でも更に魔力を込める。撃ち貫く意志を！想いを！すべて！！

「撃ち貫けええええ————っ！！！！！！！」

更に強烈な閃光と爆碎音、それに生じた爆風を受け、ホバーフェザーが四散した事によって前進するどころかその場に留まる浮力すら失ってしまった所為で爆風には耐えられず、私は後方へと吹き飛ばされてしまった。

地面に叩きつけられ、錐揉みしながら地面を転がって、建物の外壁にぶつかって、ようやく止まることが出来た。

「うつ、つく、あぐ」

私の死力を尽くした一撃

でも、その一撃すら

届かなかった

「なのは！！！」

「クウーーーー!!」

ユノ、久遠……。

「なのは!!しっかりして!なのは!!」

「クーーーー!!クーーーー!!」

「こふつ、大丈夫……です……」

レイジングハートは手放さなかった。

まだ私は戦える!

でも

手元に握るレイジングハートを見る。

カノンモードのフレームどころか、本体フレームにも亀裂が入っている。

レイジングハートの本体には傷がないのが不幸中の幸いですね。

「レイ……ジン……グ、ハート……」

私の声に応えるように、コアが点滅するレイジングハート。

私は死にかけの虫の息。

レイジングハートもボロボロ。

死力を出し尽くしても破れないバリア。

それでも！！

「まだ……たたか、ゲホツゲホツ、ごぽっ、っは！くっ、まだ！！
私達は戦えます！そうでしょう！？レイジングハート！！」

『That's right！（その通りです！）』

もう魔力は空っぽで、身体を支えているのは怒りと憎悪と、燃え滾り衰えることのない闘志。負けたくないという強き想い！！

「あれ…を、貫く…には……」

零距离ディバインバスターで無理なら、次は

「レイジングハート、周囲に散った魔力素、すべて集めて下さい！
！一撃で良い、最後の！一撃を叩き込む、撃ち貫く力を私に！！」

『All right・My master!』

魔力素を集めることで、再びホバーフェザーを展開。

胸がかって無い程に苦しくなる。でもそんなの関係はない。もう一度、もう一撃加えて、そして帰ろう

「帰る……か……」

私にとって、高町家は、その権利がなくても、もう帰る場所に認定してしまっているらしい。

亀裂の入った砲口に魔力が集まっていく。

高町なのはの切り札　スターライトブレイカー。

模造、贋作と言えども、最強の使徒すら下した零距离スターライトブレイカーでならば、あのバリアだって破れるはず！

脈打つ鼓動、魔力素を集める過程で、はっぱカッターやリーフブレードをコントロールし構成する術式の魔力すら強引に集めて力にする。

相手との距離とスターライトブレイカーのチャージ時故に出来る今

回限りの荒技です。

「チェーンバインド!!」

ユーノがバインドで私に迫る木の根とつるのムチを絡め捕る。

ユーノにも世話になりっぱなしですね。

今夜は少し豪華な物にしましょうか

私が、生きていたらの話ですが

第10話 哀哭するは星光の心 - It screams to pathos

実際あんな巨木を相手にあんな呆気なく終わるのはリリカルだから許されるものだと思っっています。

巨木でこれならマジでフェイトと戦ったら我が家なのは死ぬんと違つか？

意見・感想お待ちしております。

第11話 撃ち貫け!! 星光の槍杭 - そっくり!! (前書き)

最新修正版です。英語力が欲しい……

第11話 撃ち貫け！！星光の槍杭・そうくいー！

side：高町なのは

血の流しすぎで眼がチカチカしてきました。

身体はガタガタ、脚も立っているのでやっとの程。

そしてやはり今回の暴走体は、明確な敵意とある程度の脅威に対して自動迎撃するタイプのようです。

「うっ！くうっ」

「耐えて下さいユーノ！あと少しです！！」

「わ、わかった！！」

スターライトブレイカーのチャージで無防備の私を、ユーノが全力で守ってくれています。

暴走体は木の根でユーノのバリアを破ろうとしますが、ディフェンスとサポートに特化するユーノのバリアは私の物より数段硬く、暴走体の攻撃をすべて防いでいます。

Master・I have a proposal・(マス

ター。私に提案があります(´)

「提案？」

『Yes. Therefore, please give me time to a slight degree. (はい。その為にもう少し私に時間を下さい)』

「ユーノ！」

「聞こえてたよ！レイジングハート！どれだけ保たせれば良いの！？」

『If it gets for 60 seconds... (60秒頂ければ...)』

レイジングハートの言葉に私はユーノを見る。

ユーノは頷いた。

「お願いします。レイジングハート」

『Thank you. (ありがとうございます)』

魔力素のチャージは続行されましたが、ホバーフェザーは私の脚に負担がかからない程度の高さの浮力を保って小さくなる。脚のホバ

ーフェザーに関しては完全消失しました。

レイジングハートも頑張っているのです。私も

「ホバーフェザー解除。シュートバレット!」

向かってくる暴走体のシュートバレットをシュートバレットで相殺する。

「なのは無茶しないで!ここは僕が」

「ユーノとレイジングハートが頑張っているんです。私にも意地があります!」

そこまで一度に数は撃てませんが、基本魔法であるシュートバレットなら、私の演算能力でも負担がほばないレイジングハートと同レベルのシュートバレットを撃つことくらいは出来ます!

「っつ　!?!」

急な魔力の高まりを感じて、その方向　ジュエルシードの暴走体を見る。

単なる木であった暴走体。

しかし表面がボコボコと気泡のように波立つと、そのカタチを少しずつ変えて行った。

全身に角を生やし、上部に青紫の鎧を纏い、頭部は赤く、緑色の双眼が光る。その首元にはジュエルシードを取り込んで青くなった結晶体。

ムチの様な蔦が不気味に生え動く腕。巨大な爪で武装し、掌には赤い結晶体がある腕。の2本の腕を生やすその姿はまるで人間の上半身。

「変身した！？ここに来て!？」

「くっ、魔法と言うより外道に過ぎますよ！ジュエルシード!！」

大木だったジュエルシードの暴走体は、その姿をインストレジセイアへと変えたのだった。

インストレジセイアへとカタチを変えた暴走体は、その胸部から砲撃クラスのエネルギー波を放ってきた。

「くっ!!や、やらせるもんかあああつ!！」

「エアヴァルトウング……懐かしい技を……」

ユーノのバリアを後ろから補助しながら私は呟く。

こっちに来てCOMPACTやIMPACTはやってませんからね。

しかし私はインストを全くイメージしてないところを考えると、あの少年がどつちかをやっているのか偶然か

とにかくインストレジセイアであることを喜びましょうか。『シユテルン』だったら今ので私達は終わっていましたよ。

『I kept you waiting. Master.』お待たせしました。マスター()

「お疲れ様でしたユーノ。あとは私達で受け持ちます。貴方は私の友人を護って下さい」

「う、うん。気をつけてね、なのは」

最早ボロボロで何に気をつけるかわかりませんが、私は頷いて暴走体を見据えます。

ある意味あの巨木よりかは知り尽くしている相手故に、今も何通りかの対策は考えついています

「レイジングハート、お願いします」

All right! Energy absorption.

Recovery start. (オーライ！魔力吸収。リカバリ開始) ♪

レイジングハートは集めた魔力を吸収し、機体の損傷を修復させた。その過程の恩恵か否か、私の背中やお腹を貫いていた木の根は分解され、ケガも治っていきます。

『Recovery complete. Condition green!』

復活するレイジングハート。

私のケガも治るばかりか、バリアジャケットは修復され、空っぽだった魔力は一気に回復し、収めきれない、120%以上の魔力が外に溢れ出る程、私の身体は魔力に溢れかえる。

『Renewal of mode data. Mode change! Lancer mode! (モードデータ更新。モードチェンジ！ランサーモード!)』

「ランサーモード？」

聞き覚えのないモードにオウム返しに呟いた私。

桜色に包まれたレイジングハートはその姿を変える。

カノンモードの倍はある縦幅。

デザインはカノンモードのフレームのままだが、先端部が延長して砲口が閉じる。

それは正に、どこかで見たような至近感を感じる大型の突撃槍・ランス-だった。

その全体の長さは私の身体の1.5倍くらいでしょうか？

石突にはカノンモード時のメインフレームのミニチュアが後ろ向きに備わっています。しかもそのミニチュアメインフレームの廃熱機構は後ろ向きであり、そこからは魔力素が溢れ出している。

私はランサーモードのスペックデータを確認して、口元に弧を描きます。

「レイジングハート、貴女は最高のデバイスですよ」

『It seemed that I had you pleased. My master. (気に入ってもらえた様で良かったです。マイマスター)』

「レイジングハート……」

私は感謝の意を込めてレイジングハートを抱き締めたいですが、その前にやらなければならぬ事があります。

「征きましよう、レイジングハート。打と意地をもって、あのバリ
アを撃ち抜く為に！」

『Yes . It is only our merely shooting and piercing!（はい。私達はただ撃ち貫くのみです!）』

レイジングハートの石突のミニチュアメインフレームの廃熱機構が
スライドし、魔力素を放出する。

それは廃熱機構ではなく推進機構。エーテルスラスタや機動兵器
のバーニアを参考に造られた魔力素を推進剤にするバーニア。

レイジングハートを正しく槍を持つ様に、左手は柄の前方、柄と一
体内蔵されたトリガーユニットを握り締め、人差し指はトリガーに
掛ける。右手は後ろに添えて握る。

石突から放たれる魔力素が強くなる。

フレームの側面からも内蔵式魔力素スラスタが現れ、強烈な勢い
で魔力素を噴出する。ホバーフェザーを展開して、準備は整った。

「レイジングハート！」

『All right! Stern Acceleration .
Full boost! Devine breaker!』

地を蹴った瞬間。かつて無いスピードで私達は加速した！

ランサー - 突撃槍 - モード

文字通り突撃することだけを追い求めた形態。

あらゆる移動魔法をぶつちぎる速さを実現するのは、フレーム内蔵式と石突のバーニアユニットと、ミニチュアメインフレーム。スラストユニットは言わずもがなだが、ミニチュアメインフレームから指向性の魔力素を収束放出することにより大出力推進力を得る。その為の魔法が、レイジングハートが新たに組んだ魔法『シユテルンアクセラレーション』である。

発動速度もトップクラスであるが、なによりその燃費の良さだ。魔力ランクCでも普通に攻撃魔法を使用しながらも戦闘に支障がない程の燃費である。

しかしあまりの大出力推進力と直進突撃しか考慮されておらず、使い手を選ぶ魔法。

ですが私達には、名前も含めてこれ以上ない魔法です！

星の加速。その名の如く、私達は宇宙を駆ける星となる！

暴走体は腕を動かして鳶を伸ばしてくる。

エレガントアルム

る！

魔力で構成した杭を撃ち込む魔法『プラスティングステーキ』。

ナイトファウルのプラスティング・ステーキから取られたこの魔法は物理貫通打突魔法であり、最大力点に破壊力のすべてを込めることで一点突破を可能とする一撃貫砕の魔法である。

「くっ！硬い！！」

『If useless at one shot, any number of shots are!!』(一発でダメなら何発でも!!)』

もう一度トリガーを引こうとしたところで、暴走体が左腕を振り上げた。

「拙い！」

ウアタイルスクラフト

レジセイアの最強技だ。

あんな物を放たれたら私どころかみんなまで！

もう頭上にエネルギーボールが現れる。

一撃を叩き込む時間すらあるかどうか、しかし私がやらなければみんなが

なら答えは1つ！

「リミットリリース！！ブラスター1！！」

刹那膨れ上がる魔力。

しかし引き換えに身体中を走る激痛と目尻から流れ零れる血涙と口から溢れ出す血。

「ブラステイングステーク！！」

バゴンッ！！と先程とは比べ物にならない程の衝撃と威力に、ついに暴走体のバリアを撃ち貫いた。

しかしブラスターシステムの起動は無改修のレイジングハートには相当の負荷をかけてしまい、新品のフレームに早々亀裂を入れてしまふ。

「レイジングハートッ!？」

『I am not cared about! I would

also like to shoot a friend's
enmity. Therefore, it is a mas-
ter NANOHA!! (私に構わず!私も友人の仇を討ちたい
のです!だからマスターなのは!!!)」

「ブラスター2!!セブン・スタッド!!」

さらに走る激痛を気合いでねじ伏せ、突き上げられた腕に7連続で
ブラッシングステークを撃ち込む。

5発のステークで撃ち貫かれ風穴だらけになった腕はボロボロにな
り、結晶体も5発目で破壊され、エネルギーボールは四散、6発目
と7発目で左腕の付け根を吹き飛ばす。

「OK、アインストキング、ショウダウンです」

『Sealing!』

首元の結晶体にレイジングハートを突き刺し、トリガーを引く。

ジュエルシードを封印したことで暴走体は崩壊した。

ジュエルシードを発動させてしまった2人も、アリサとすすかも無
事

ボンッ

「……お疲れ様……です。レイジング……ハー……ト……」

『It is t i r e d w i t h l a b o r .
M a s t e r N a n o h a I a m s o r r y , i
t r e s t s f o r a w h i l e …… (お……疲れ
……様で……す。マス……ター……な……のは。すみ……ません……少し……休
み……ます……)』

「……ご、ゆっく……り、私の……戦……ゆ……う……こぶ………ふ、ふふ、こ
……の……未……熟……すぎ……る……小……さ……な……身……体……で……は……リ……ミ……ット……ブ
レイ……ク……は、無……謀……で……し……た……か………うっ………ごっ……ふ……」

口から止まらず溢れる血。

ブラスタースシステムの効力が切れ、過度の魔力と肉体行使により膝から崩れ落ち、そのまま目の前が真っ暗になりました。

高町なのは

魔力ランクA+ 空戦適性C 陸戦適性B 総合ランク推定B+
使用可能魔法

シールドバレット

デイバインランサー

デイバインランサー・ファランクスシフト

クロスファイアシュート

クロスファイア・バーストモード

ファントムブレイザー

デイバインバスター（2発限定。3発目は不発の可能性大）

スターライトブレイカー（フルドライブ時条件付きで使用可）

デイベインブレイカー

ブラステイングステーク

プロテクション

バリアバースト

リングバインド

チエーンバインド

クリスタルケージ

ブリッツアクション

ホバーフェザー

シュテルンアクセラレーション

フィジカルヒール

レイジングハート

搭載機能

待機モード

デバイスモード

カノンモード

ランサーモード

フルドライブ

ブラスタースystem

第11話 撃ち負け！！星光の槍杭・そっくり！！（後書き）

ランサーモード

元ネタは武装錬金のサンライトハートです。

デイベインブレイカー

平たくいうとソニックブレイカーの魔法版。

シュテルンアクセラレーション

元ネタはサンライトハートプラスの特性を真似ている。

ブラステイングステーク

とっつき！！

以上！

未来を知っている分、我が家なのは改めて星光なのは本家なのはよりも無茶ぶりを敢行出来ますが、逆に身体の負荷は比べるのがアホらしいくらい天地の差があります。

最終回後について悩んでいます。そのままA'sに入るか、平行世界^{アニ}のstsに星光なのはさんをつっ込んで本家なのはと異例の対面をして星光なのはさんを心身共に強くするかで

それによって最終回模様も変わるため、皆さんのご協力をお願いします。

意見・感想お待ちしております。

ノイレジセイア 魔力ランクAAA 空戦適性 - 陸戦適性AAA
総合適性AAA 魔導師ランクSS+

ジュエルシードの暴走体の巨木が変化した姿。

stsはやて並みの強さだが、星光なのはがレジセイアを知っていたのと、フルドライブ+ブラスターシステムの併用により強化されていた星光なのはの前に敗れ去った。ジュエルシードリアルは10。

第12話 父の言葉と星光の想い、すずかの心（前書き）

誤字修正をしましたです。

第12話 父の言葉と星光の想い、すずかの心

side：高町なのは

ふと顔に落ちた冷たいナニカ……

それは頬や額、目尻を伝って流れ零れる。

ふと頬をナニカがつつく。

耳に聞こえるのは泣き声だろうか

「……………んあ……………」

「な、なのはちゃん……！」

「なのは……！」

「クオン……！」

すずか？アリサ？久遠？

重い瞼を開けると、朱色に染まりゆく空と、泣いている友人達

「ユーノ……」

「ここに居るよ、なのは……」

もうバレてしまったからでしょう。すずかやアリサが居ても普通に喋っていますね。

「私はどれくらい……寝ていましたか……?」

「30分も……寝てないと思うよ」

「そうですか……うぐっ!」

起き上がるうとしましたが、少し力を入れるだけでも激痛が身体を駆け巡る所為で、起き上がる云々以前の話ですね。

魔法も使わない方が良いでしょう。プラスターシステムを使った所為で、リンカーコアにもかなりの負荷がかかっているはずですし。

「すみません……もう少し、寝かせて下さい……」

「うん。ゆっくり休んでなのは。……ありがとう、なのは」

私は小さく「いえ」とだけ応えて、再び闇の中へ意識を落としました。

side：高町なのは

私が目を覚ましたら病院のベッドの上に居ました。

「うつ、くつ……っは！……やっぱり、ダメですか……」

身体の痛みはありませんが、殆ど力が入りません。

ブラスターシステムは、使用を控えないと死にますね。10年後以降はともかくも、今の私では身体が保たないのでしょう。

「ふっ、くうっ、あぁっ！」

肘を立てて、腕を使って上半身だけでも起こしました。

「個室……？」

きつとアリサかすずかですね。兄様という線もありますが、ともあれ

「早急に、なんとかしませんとね」

レイジングハートのフレイム強化。

新しい魔法や御神流の修練。

そしてこのあとに控える

「フエイト……テストロッサ」

万全の状態で挑みたかったのですが、仕方ありません。

《ユーノ、聞こえますか？ユーノ》

とにかく現状を把握しようと、ユーノに念話を繋げます。

《なのは！？起きたの！》

《ええ、つい今し方。ところで、先日の戦いから何日経ちましたか？》

《2日が経ったよ》

《そうですか》

48時間、無駄にしましたね。

《レイジングハートは？》

《今、自動修復中だけど、レイジングハートもなのはも、しばらくは戦わない方が良いでしょう》

《そうですね…》

レイジングハートは無事の様子ですね。

《ユーノ、レイジングハートをお願いします》

《うん。任せて》

ユーノとの念話を終えて窓の外を見る。

「まま…なりません…ね…」

本来なら壊すことのないところで壊してしまったレイジングハート。

そしてアリス。

私が未熟だから……。

私が弱いから……。

「もっと……強く……ならなければ」

誰にも負けないように

誰も傷つけないように

「もっと、強く！」

左手を握り締めて、私は心に誓った。

その日の夕方、お見舞いに来てくれたアリサと話すか。

アリサは私に抱きつくとき泣き出して、それを私があやして、すずかは微笑みながら私達を見守っていました。

その後来た父様、母様、兄様、姉様

一応入院理由は異常災害に巻き込まれた時に負傷した為という理由らしいです。

ケガといっても急成長した木の根に乗り上げてからの落下という、真実をぼかしてケガの過程を少々捏造したくらいです。

まあ、吹き飛ばされ、地面に叩きつけられたのであながち間違いではないのですが。

ブラスターステム使用によるリンカーコアへの負担以外はケガも一度リセットされた為、これといってひどいケガもなく、翌日の退院許可が下りました。

しかし母様に心配させる顔や姉様の悲しげな顔をさせてしまい、とても胸が苦しくなりました。

翌日の退院の時は、父様と兄様が迎えに来てくれました。

私は今回のことをどう父様や兄様に説明しようものか悩みました。

しかし兄様はともかく、父様にはなんと説明したら良いか

「良かったなのは。大したケガもなくして」

「…はい。お騒がせしました。父様」

「そんなに気にすることはないぞなのは。天災みたいなものだったんだ。お父さんは、なのはが無事でいてくれたことが、それだけでとっても嬉しいんだ」

ガシガシと私の頭を撫でてくれる父様。

やっぱりダメですね私は。

こんなにも優しい父様にも何も語らない私は

「お前なりに何かやっているのは、父さんはなにも言わないが、無茶が良いが無理はするなよ？なのはが居なくなったら、みーんな、悲しむんだからな」

耳元で囁かれた父様の言葉に、私は緩む涙腺に力を込めて歩き出しました。

|||||

翌日。

まだ大事をとって学校は休み、毎朝の筋トレも、御神流の鍛練もお休みです。

アリスは一応器のスケッチブックは治ってはいますが、中身のシステム面は私だけではどうにもしようがないので、レイジングハートの修復待ちです。

「只今帰りましたよ。ハーケン」

『無事の帰還を祝福するぜ。マイソウルブラザー』

作業部屋の机に飾ってある黒いゲシユペンストのプラモ。

そこから聞こえるさすらいのバウンティハンターの声。

外見はプラスチックボディですが、中身は精密機器の塊。

ゲシユペンスト・ハーケン

D X電童をバラして、内部機構を真似て造ったボディに、インテリジエントデバイスのA Iデータを基に組んだ自己進化完全自立型擬似人格コンピューターO Sを搭載していて、私の場合はさすらいのバウンティハンターをモデルに擬似人格を組み上げました。

コプセントは身近なパートナー。

八神はやてのリンフォース？が羨ましかったのでつい造ってしまったものです。

4日前の夜に完成し、3日間放置でしたが。

『家の屋根から見てたぜ。あんな無理を続けてたら、元祖より早く身体を壊しちまうぜ？』

「わかっています。わかっていますが

」

私ではああでもしなければ、暴走体とも真つ当に戦えない程弱い力しか持たないのです。

それが悔しくて堪らない！

『まあ、しばらくは安静なのは変わりないんだ。この時に休めるだけシエスタをエンジョイしようぜ？』

「ええ。さしもの私も、今回ばかりはどうしようつにもありませんから……」

私はハーケンを手に持って自室に向かう事にします。

今日は素直に寝ていましょう。

おやすみなさい

第12話 父の言葉と星光の想い、すずかの心（後書き）

ちよろつとですが、遂に出せたハーケン！

支える者〃アリス

共に歩む者〃レイハ

導く者〃ハーケン

を目指しています。

ひとりで戦えない。弱いと自らを言う星光なのですが、大勢の絆に支えられ無様でも勝利を掴み取るのが星光なのがあります。

無印最終回はやはりsts路線が強い模様です。皆さんそんなに本家なのはvs星光なのが読みたいのか！？

ハーケン『OK、エブリワン。これからもマイソウルブラザーなのはよろしく頼むぜ？』

レイハ『マスターの障害は、すべて私が撃ち貫いてみせます！』

アリス『私は……ダメな子です……』

ハーケン『OK、ダファミリア。悲観的なのはマザーと同じだが、お前が居なきや、俺は生まれてないんだぜ？お前はマザーのハートを護ってきた。そいつは誇って良いことだぜ？』

アリス『ハーケン……』

レイハ『ストロベリるのは良いのですが、場所をわきまえて下さいね？』

ハーケン『ウエイト：だ、レイジングハート。俺のソウルはブラザーなのは物さ、誰にもやるつもりもないさ』

アリス『私の身も心も、マイスターの物です。勘違いしないで下さい。レイジングハート』

レイハ『わかりました。ですがマスターの最強の槍の座は譲りませんよ？』

ハーケン『OK、レイジングハート。俺は俺の領分でやるだけさ』

アリス『私もいつか……』

こんな感じで相棒達に愛されてる星光なのはです。

意見・感想をお待ちしております。

第13話 H a k e n . g o e s t o s c h o o l ! (前書き)

またまた修正。

第13話 H a k e n ・ g o e s t o s c h o o l !

side:高町なのは

私が退院して2日目、先の戦いから5日。

私は2日目も大事をとって学校はお休みです。

本当は大丈夫なのですが、高町一家+ユーノ、ハーケン、電話ですずかやアリサからも今日も休めと言われてしまった為、私は作業部屋でちまちまとナイトファウルとロングトゥーム・スペシャルの整備をしました。

他にはプラモ造りとかラノベを読んで過ごしていますが、どうも暇すぎて、今は縁側で久遠を抱いて横になっています。

「クオン……」

どこか元氣のない声で鳴き、私の目尻を舐める久遠。

「どうかしたのですか？久遠」

「クウン……」

久遠は私の顔に自分の顔をこすりつけてきました。

久遠と会話が出来れば良いんですけど……。

『なあに、ただ構ってやれば良いのさ。久遠も久遠で、ブラザーの事が心配なのさ』

横になっている私の頭の上で同じく横になるハーケン。

かなり可動範囲は広く作りましたが、片手を頭の後ろに下敷きにして、片膝を立てて横になっている様は人間みたいです。まあ、中身は正しく人間なわけですから。

自己進化完全自立型擬似人格コンピュータOSの元ネタは超AIですし。

1から人格を育てることも出来れば、ハーケンのように擬似人格を組むことも出来ますし。

ハーケンの場合は、レイジングハートに手伝って貰い、イメージをトレースしてイメージをデータ化し直接AIにインプットしてある為、より人間的ですが。

今、この擬似人格コンピュータOSのデチューンしている最中ですが、至高を目指すのは簡単な分、デチューンはかなり難しいです。どの程度がデチューンラインなのか計りかねますし。

まあ、当分の間は時間的余裕ありませんし、デチューンラインを

「クウ…クウ…」

『寝ちまったか？』

センサーが捉えた寝息に、俺は立ち上がってブラザーとアヤカシフオックスを見る。2人ともとっても心地良さそうだ。

『グツナイ、ブラザーズ』

俺が完成したのは6日前だが、基礎のプログラムやメモリーに関しては去年から既に存在していた。

ブラザーはとても心配性でな、世界と自分を少しでも繋ごうと俺を造り始めたのさ。

まあ、寂しがりやというのもあって、少しでも仲間が欲しかったのも確かさ。

こんなにトルプリンセスにだけ戦わせるのは俺のプライドが許さないんだが、生憎俺には戦えるボディがねえ。

レイジングハートが復活したらプログラム体について訊いてみるか。

守護騎士がプログラム体なら、俺もリアライズできるかもしれない。

ナイトファウルやロングトウム・スペシャルがあるの考えると、

お目付役としてついてきたハーケンが頭の上で言います。

木の根は道沿いに生えた為、建物自体にそれ程被害はありませんが、アスファルト舗装の道路は軒並み壊滅状態。

こんな状態ではバスも走れないのと、被害を自分の目で確かめる意味も込めて、私は歩いて学校へ向かっています。

「私が、もつとしっかりしていれば……」

『ウェイト。ストップだブラザー！。お前は自分を卑下しすぎだ。お前が居なかったら、アインストキングが街をメチャクチャにしたんだ。そいつをお前は止めた。それは誇って良いことだぜ』

「ハーケン……」

レイジングハートもアリスも居なくて寂しいですが、ハーケンのお陰で少しは元気になります。

さすがさすらいのバウンティハンター　ハーケン・ブロウニング。
女性の扱いは手慣れてますね。

『さて、シリアスターンエンドだ。スクールに向かおうぜ、ブラザー』

「ええ」

使いの王道だし。

なのはの魔法は魔法と言うより魔装機神の方がしっくり来るけど、どっちにしろ、今のところはあだし達の秘密という事になった。

結局なのはは2日も寝眠ってた。

素人のあだしから見てもかなり無理してるみたいだった。

ううん。実際無理してたんだと思う。

あだし達を守った所為で、なのははケガをして、ユーノが魔法で護ってくれてたけれど、ユーノが居なかつたら、なのははあだし達を護りながら戦わなくちゃならなかつたかもしれない。

あたしは悔しかった。

なのはが戦っているのに、護られて、足手まといの自分が嫌になつた。

なのはとの出逢いはケンカからだつたけど、今はすずかと一緒に一番の親友と胸を張って言える存在。

なんの力もないあたしに、何も出来ないのはわかってる。でもあたしは、なのはの力になりたい！

「おはようございます」

「なのはちゃん!？」

すずかがなのはが教室に入ってきて驚いてる。

あんのバカチンツ！

今週はしっかり家で寝てなさいって、あたしとすずかで念を押しと
いったのに普通に何事も無い顔で学校に来やがってえ！！

「な、なのはちゃん、ダメだよ！今週くらいゆっくり休まなくちゃ
！」

普段大人しいすずかも声を上げてなのはに詰め寄ってる。

「気遣い感謝します、すずか。ですが暇過ぎてやることもなく、体
力も戻ったので学校に来ました」

「でも…！」

ここはこの石頭にガツンとやるべきかしら？

てかやっても良いわよね？

あたし間違っでないわよね？

『ウエイト。プリティーガールズ、少し落ち着いたらどうだ？』

不意に聞こえた男の人の声に、あたしやすずかだけじゃなく、クラスのみんなまで辺りをキョロキョロと見る。でも男の人なんてどこにも

てかこの喋り方、偶に聞き覚えがあるのはあたしだけじゃないわよね？

「ハーケン、貴方は」

『おっと、OHANASHIはノーセンキューだマイソウルブラザー』

おでこに手を当てて顔を呆れ歪ませるのは。

まさかユーノみたいにまたなんか拾ったんじゃないでしょうね？

なのはは両手を後ろ、カバンの上になわすと、何かを持ち上げるように手を上げて、何か黒い物体を近くの机の上に置いた。

黒いゲシュペンスト？

でもギリアムとかヘリオスの声じゃなかったわ。それにMk-？とは所々違うみたいだし。

『ハローエブリワン。俺はゲシュペンスト・ハーケンの管制擬似人格コンピュータOS、ハーケン・ブラウニングだ。さすらいのバウンティハンターとは、俺の事さ』

いや、知らないわよそんなの。

ていうかこのミニチュアゲシュペンスト、普通に喋って動いてるけど、これも魔法なの!?

『ノーだぜバーニングガール。俺のマザーはマイソウルブラザーなのはさ。俺はブラザーが造った自己進化完全自立型擬似人格コンピュータOS……まあ、わかりやすく言えば賢いAIって言ったところだが、スクールチルドレンにはわけわかめか』

「それって超AIみたいなやつってこと?てかあたしはバーニングじゃなくてバニングス!!間違えるな!!」

ていうかそんなの造れるのはってホント何者!?

『OK、バーニングガール。さすがブラザーなのはフレンドだ。その解釈でまあまあ間違いないさ』

「あ、あたり前じゃない!あたし達の友情は伊達や酔狂じゃないわ!てかバニングスだって言ってるでしょ!?!勇者王ヴォイスなのになんかムカつく!なのは!コイツ一回デリートよデリート!!ハリ

「ハリーハリー……！」

「ア、アリサちゃん、落ちついて」

『デリートはノーセンキューだ。ブラザーが泣くんでは』

「私はそんなに泣き虫ですかハーケン？」

『おっと、ウエイトだブラザー。さっきのフレーズはメモリーデリートで頼むぜ？』

なんか知らない間に騒がしいのが増えたのは確実ね……。

先生が入ってくるまで、ハーケンはなのはの休みに対する理由が、自分の最終調整の為だとして説明した。

まあ、こんなに精巧に動いて人間的に喋る小さいロボットの調整なら、みんな納得したみたいね。てかあたしもビックリよ！

まあ、授業中は静かに経験値を稼ぐ為って、なのはと勉強しているから、やたらめったら高性能ってわけじゃないのかしら？

先生は最初おもちゃかと思ったらしいけど、ハーケンの1から7あたりまでの説明を聞いてお手上げみたい。

超AIとか機械だけど生きてるとか、パートナーとかメンタルケアとか、経験値稼ぎとか特許取得への前段階とか、後半別として、前半は多分あたしくらいしかわからないわよ。もしくは勇者王をちゃ

side：月村すずか

なのはちゃんが学校に来てくれたのは嬉しいけど、無理してないか心配になった。

でもハーケンさんが一緒だから大丈夫だよな？

一時間目の国語も、二時間目の社会も、4日休んで遅れ気味のなのはちゃんにハーケンさんが随時アドバイスして、それぞれの休み時間には私達と同じところにもう追いついてた。

なのはちゃん自身、とつても頭も良くてテストも毎回満点だけど、やっぱりハーケンさんみたいなパートナーが居るのは羨ましいなあ。

なのはちゃんにはユーノくんも居るし。

私の家にもネコがたくさん居るけど、ハーケンさんみたいに勉強まではね。

ファリンも居るけど……なのはちゃんに造って貰おうかな？

そしてお昼。

私達3人は屋上で久しぶりにお弁当を食べることになったの。

「それにしてもハーケンって何で動いてるのよ？電池にしたら結構長持ちよね？」

『エーテルって言えばわかるか?』

「エーテルって、魔装機神のエーテル?それともトップの?」

『ビンゴ。この世界にも魔装機神のエーテルがあつてな。俺のメイ
ンはそれで動いてるのさ』

「あんた無駄に高性能よね」

『あたり前だろ?俺はブラザーなのは処女作にして傑作なんだぜ』

「ま、まあ、わからなくもないかも」

アリサちゃんはハーケンさんと難しい話をしてる。

私にはわからないかな。

なのはちゃんは黙々とお弁当を食べてる。

いつもの風景だったはずのお昼ご飯。

でも今は色々知ってしまった私は、なのはちゃんにどうしてあげれば良いのか、どうしたらなのはちゃんの力になれるのか、私はそればかり考えてた。

『M S . すすか、箸が止まってるぜ』

「さすが、大丈夫？調子悪いの？」

「ううん。何でもないよ」

「ごちそうさまでした」

いつの間にかお弁当を食べ終えてたなのはちゃんは、イスから立って階段の方へ歩いていく。

「なのは」

『ウエイトだ、Ms. さすが、バーニングアリサもな。少しブラザーをひとりにさせてやってくれ』

ハーケンさんに止められて、私はなのはちゃんを呼び止められず、なのはちゃんは階段を降りて行っちゃった。

『済まないなフレンズプリンセス。ブラザーもまだ、結構参っててな』

「なのはは、大丈夫なんでしょうね？」

『そいつあ俺にも、誰にもわからない。ブラザーのハートはブラザー次第だからな。俺達がどうこう言わなくても、ブラザーはわかっているし、わかってはいるが、ブラザーは勇気が中々出せないのさ。』

私はやっぱり臆病者で、2人の友人である資格すらありません。

今日、昼食時に、私と魔法について話そうとしたのですが、結局切り出せずに逃げてきてしまいました。

怖いんですよ。あんな私を見せてしまったことを。

子どものメンタルには強烈過ぎる私の姿をどう言われるのかわからなくて。

そんなことはないと思気込んでも、やっぱり怖くてダメでした。

私はいったい、なにがしたいのか、自分でもわからなくなって来ました。

|||||

side:アリサ・バニングス

午後の授業からなのはもっと元気がなくなって、放課後はみんな別々に家に帰った。

「なのはのバカ……」

途中まで歩いて帰るあたしは、帰り道の海鳴臨海公園に寄った。

特に理由はないけど、なんとなく、あたしはなのはとどう接していけば良いのか考えたかった。

なのはは親友。それはこれからも変わらないこと。

でも今のなのはは近くで遠い存在に思えてしまう。

特別な力なんてないあたしには、なのはの隣りに立って支えてたり、力になってあげることすら出来ない。

あたしに力があれば良いのに。

魔法までとは行かなくても、魔装機神の精霊とかと契約とか出来れば、あたしもなのはの手伝いが出るんじゃない

『ビンゴ。この世界にも魔装機神のエーテルがあつてな。俺のメインはそれで動いてるのさ』

エーテルがあるなら精霊だっているはずよ！

「でもどうすれば……」

顔を下げたところで、座っていたベンチの足元に光るものがあつた。

気になって取ってみたら、それは綺麗な石だった。

優しく赤く、力強く輝く宝石だった。

「あたしを……呼んだの？」

ドクンッ

あたしの声に應えるように、宝石は弱々しいけど、確かに一瞬脈打った。

あたしはその宝石をポケットに入れて、早足で家に帰った。

第13話 H a k e n ・ g o e s t o s c h o o l ! (後書き)

どうしてかな？

ハーケン入れたらすらすら書けるのは？

大人を子ども達の中に突っ込んだから話しがまとめ易くなったとでもいうのか？

意見・感想、お待ちしております！

皆さんが無事ハーケン兄貴に見えているようで良かったです。

フラグ乱立中ですが、やはりみんなで支え合っのっていいですよねえ。

第14話 家族（前書き）

高町家にピントを絞ってみました。修正版です。

第14話 家族

side: 高町なのは

土曜日です。

今日は学校はお休みです。

私は早朝から目が覚めてしまった為、作業部屋でナイトファウルをいじりながら、レイジングハートが早く治る事を祈るばかりです。

ブラスターステムの反動はレイジングハートにも多大な負荷をかけてしまった為、その所為で修復が遅れているのだとハーケンは言います。

会話は無理ですが、同じ機械同士だからデータリンクでレイジングハートの状態が診れるようです。

父様の起きてきた気配を感じ、私は作業着から道着に着替えて小太刀の木刀を腰に挿して道場へ向かいます。

まだ兄様と姉様は起きてきてないのでしょうか。道場にその姿はありませんでした。

「おはよう、なのは。もう良いのか?」

「おはようございます、父様。もう身体は全快しました。鈍らぬ内に稽古を再開したいと思います」

「そうか。まあ、お父さんはなのはが良いらいつでも良いわ。でもなのは、1つ訊いても良いか？」

「ええ。構いません」

父様の訊きたいことですか、いったいどのような事柄でしょうか？

「なのは、お前に守りたいものはあるか？」

守りたいものですか……。

「ええ、あります。一つは言えませんが、もう一つは私を取り巻く人々です。父様、母様、兄様、姉様、アリサ、すずか。私の大切なものです。それを守る為ならば、この身、この命、喜んで差し出す覚悟があります」

私の意地、高町なのはである事を証明し、そして私の身の回りの人々を守る。

私はそれだけしか出来ません。

「そうか……」

父様がガシガシと頭を撫でてくれました。

ゴツゴツで少し重いですが、とても落ちつきます。

「さてなのは、今日はおさらいからするぞー！」

「はい！父様」

私は準備体操をしてから、御神流 斬のおさらいに入りました。

斬撃は基本的に九つしかなく、刺突つぎを始め、切り下ろしの唐竹からたけ、右からの切り落としの袈裟斬り（けさぎり）、逆……左からの切り下ろしである逆袈裟さかげそ。横切りである右薙みぎなぎ、左薙ひだりなぎ。斜め下からの切り上げである右切上みぎきりあげ、左切上ひだりきりあげ。そして完全に下から切り上げる逆風さかかせ。

その一通りを振るい終えてからの御神流 斬へと繋がります。

緩急を斬撃の使い分けの合間に、迅速の速度を一閃に加えることによつて斬撃を相手の認知領域から消す。

剣の立ち会いはそれ故に勝負は一度、一瞬、そして一撃必殺でなくてはならない。

「ふう……」

「よし、大分形になってきたじゃないか。この分だと、次のステ

「ッブに移るか？」

「良いのですか？」

「ああ。御神流 斬は基礎の基礎だ。なのはなら自主鍛練で斬を習得出来る程形になっているからな」

新しいステップ……。なんて良い響きでしょうか。

「それじゃあ次のステップ。御神流 虎切と御神流 貫だ」

「御神流 虎切に御神流 貫……」

「ああ、虎切は一刀での遠間からの抜刀による一撃を振るう奥義だ」

「いきなり奥義なのですか？」

まだ習い始めて一週間、事実上の稽古時間はそれ以下の私に、こんな早期に奥義を？

「本来なら次の基本技の虎乱を教えた方が良いんだが、なのはのあの刃捌きなら、虎乱は少し練習すれば出来ると俺は思ってる。虎乱はまた後で教えてあげるから、虎切と 相手の防御を突き抜ける技。実際には相手の防御を見切り、突き通すための、刹那の見切りを身につける御神流 貫を先の方が良いと思ってな」

「相手の防御を見切り、突き通すための、刹那の見切りを身につける技……」

まるで私の為にあるような技です。

「これなら、相手の防御がどんなに硬かろうが、その弱点を確実に見抜いて必殺の一撃を叩き込む事が出来る」

「是非御教授下さい、父様」

私の食いつきぶりに、父様は軽く笑って「ああ。そんなじゃあやるか！」と腰に挿してあった木刀を抜きます。

「虎切はともかく貫は身体で覚える技だからな、ガンガン行くぞ！」

「はい！父様！」

私は手に持つ二刀で父様に斬りかかります。

私は有意義で楽しい朝の鍛練を過ごしました。

確かに一発成功では姉様がかわいそうなので、ナイトファウルの刃捌きを披露したのですが

「うわあああ〜ん！絶対なのは私より強いってばあ〜ん！！私の努力って何だったのよ恭ちゃ〜ん！！」

「お、おい美由希。少し落ち着け」

「これが落ち着いていられるかあ〜ん！！なのはばっかりなんでえ〜！！」

本泣きされるとは思いませんでした。

姉様にはかわいそうなことをしてしまいましたね。

「姉様、姉様はとてもお強い剣士です。私の技量では姉様に勝つことなんて出来ません。そして兄様も言っていました。姉様は成長するスピードこそ遅くとも、自分にはない才能を持っていると。今は経験差で自分が強くともいつかそれすら上回っていくと……」

「なのは……ホント？恭ちゃん？」

「……ああ。俺は御神流剣士としては一生かかっても完成は難しいだろう。だが美由希はそれを成せる剣の天才だ。俺にはないものだからわかる。お前は必ず俺を超えて一人前の御神流剣士になれるかな」

「恭ちゃん……」

「そしてなのはもた。なのはは努力の天才だ美由希と同じで一度覚えた事を忘れない。そればかりか御神流を深く理解している。そしてそれを振るう意味の覚悟もある。なのはもまた、いつか俺を超えるだろう」

「兄様……」

どこか寂しげに、でも嬉しそうに言う兄様。

姉様も私を抱き締めたまま嬉しそうに、「そう簡単には負けないんだからね！なのは」と言いました。

私の守りたいもの。

私を取り巻く人々。

友人

そして 『家族』。

産まれてくるはずだった高町なのはの居場所を奪ってしまった私には、言える義理はないのですが、私は温かく、優しい友人や『家族』を守りたい。

その為に私は魔導を行使し、御神流を振るう。

高町なのはとしてでなく、『私』として、それは胸を張っていう事

が出来ます。

高町なのは

貴女が手にするはずだった家族も友人も、私が命を賭けて守ります。だから私が死に、或いは貴女が私を消し去るまで構いません。

私を取り巻く人々を、『友人』　そして『家族』と心から想ってもよろしいですか？

|||||

その日の夕食は私の退院祝いと新しい家族の歓迎会ということ、少し豪華なものでした。

新しい家族とは久遠とハーケンのことです。

入院中に久遠の存在はバレていたそうです。

私は久遠を膝の上に乗せて食事をしていました。

母様が久遠を物欲しそうに見ていますが、久遠はたとえ母様でも譲れません。この至福の抱き心地は私だけのものです。

「それにしてもなのは頭が良いのね。ハーケン君がロボットなんて母さん未だに信じられないわ」

『サンクス、マザー』

「恐縮です。母様」

しかし何をトチ狂ったのか、次の母様の言葉は

「でもそれならハーケン君はなのはの息子よねえ。あらあら、あなた。私達にいつの間にか孫が出来ちゃったわ。今夜はお赤飯の方が良かったかしら？」

「『ブフツ！』」

あまりにも突飛な言葉に少々ご飯を嘔き出してしまいました。

「そついえばそつなるのか？やあ、まさか孫の顔をこんなに早くみれるなんて思わなかったなあ」

「母様、父様、お戯れも程々にして下さい」

『そつだぜサムライペアレンツ。俺となのはソウルブラザーパートナーだ。確かにマザーでもあるが、俺はブラザーと思ってるのさ』

「……なのは兄の座はやらんぞ」

『OK、エルダーブラザー。別にそういう意味じゃないさ。俺達はパートナーだ。だがパートナーじゃあ壁を感じるからソウルブラザー、略してブラザーと俺は呼んでるのさ、これがな』

「……そういう意味なら我慢しよう」

「恭ちゃんてば嫉妬深いよねえ。それにハーケンの方がお兄さんぽいし」

「美由希、明日は素振り一万回からやろうか」

「うっ、失言でした忘れて下さい大明神様恭也様あ〜〜！」

「ダメだ」

「あうう〜！！ハーケンお兄さんからもなんかいつてえー！」

「むう……」

『ウエット…だ。メガネシスター、悪いが俺も死にたくないんでな』

「絶望した！！優しくない世界に絶望した！！なのはあ〜〜！」

「はいはい、姉様はかわいそかわいそなのですね。なでなでしてあげましょう」

「うう、私に優しいのは妹だけか……なのは大好き！」

「じぼー」

そんな楽しい夕食でしたが、その後とんでもないことが起こるとは、
私は　私達家族は微塵にも思っではいませんでした。

第14話 家族（後書き）

美由希のキャラ崩壊が激しすぎる件について

そして一番の難敵は桃子さん。

ハーケンが守護騎士なりユニゾンデバイスなりで実体化したら恭也とガチバトルになりそうな予感しかしねえ

さて、魔法少女バーニングアリサですが、凄いですねえ元祖は。カッコイいぜよアリサ。今のところ我が家バーニングアリサは中身繋がりで殆ど炎髪灼眼になると思います。武器は刀と銃を予定してますが、刀ともかく銃はどんなのがよろしいと思いますか？

あと箒繋がりで”戦術砲機” ブロンテ・クラフトとか

皆さんの意見・感想をお待ちしております。

第15話 スクランプル戦闘民族高町家（前書き）

短いです。

第15話 ス克蘭ブル戦鬪民族高町家

side:?????

夜、誰もが寝静まる夜。

高町なのはの寝室では、眠っているなのはを悲しさの色濃い瞳で見る少女が居た。

「…なの……は……」

優しく寝ているなのはの髪を梳く少女。

その表情はとても柔らかいのに、瞳だけは悲しみに満ちていた。

音が出ないように窓を開けて、窓枠に足を掛ける少女。

月明かりに照らされた少女は、頭に一对の獣の耳を生やし、一本の太く柔らかそうな毛並みの尻尾を持っていた。

『ウェット。待ちな、アヤカシフォックス』

少女を呼び止めたのはゲシュペンスト・ハーケンことハーケン・ブロウニングだった。

『こんなナイトにお出掛けかい？』

「……………」

ハーケンの言葉に、少女は顔を俯かせた。

「…くお…ん……………じかん……………ない」

『マイブラザーにちゃんと相談してからでも良いと俺は思うぜ？フオックスプリンセス』

「…だめ……………くおん…なの…は…めいわく……………」

『ブラザーはそんな奴じゃないさ。と言うより、わかってんだろ？俺達の誰かが欠けたら、ブラザーはたちまちハートブレイクってことは』

「…でも……………」

少女はもう自分がこの家に留まれないのを感じていた。

今だからまだ自分を保てていても、それも長くはないと。

「…ありがとう……………」

両腰にナイトファウルとロングトウム・スペシャル、後ろ腰には刃を漬した小太刀を挿して、テングロンハットを被る。

いつかこうなるとわかっていた為、どこまで効果があるかわかりませんが、火薬に願をかけた塩を混ぜ込んで、弾丸にも『The Minions of Cthugha』

魔力を注ぎ込めば爆裂弾になる術式文字をナイトファウルの弾丸に彫り。

『Wending the Blackwood』
自動追尾弾、敵を捕らえるまで追い続け、急所を仕留める術式文字をロングトウム・スペシャルの弾丸に彫り。

絶対数は少ないですが、無いよりはマシでしょう。本当ならイブン・ガズイの粉薬とかがあれば良いのですが、材料が材料です。小学生の私には　というよりデモベ世界でないリリカル世界では用意出来ない代物です。これで今やれることをやりましょう。

友人を救う為に法を犯し、本物の銃口を向ける。

私自身には恐怖はありません。

しかし久遠を救えないかもしれないことには恐怖を感じます。

私には霊力はありませんでしょう。

魔導がなければまともに戦えないでしょう。

でも私には

「OK、相棒。行きましょうか」

『OK、マイソウルブラザー。マイファミリィダフォックスにカチコミと行くっか?』

「目指すは八束神社、でしょうね」

『オーライ、ブラザー。さっそく行くっぜ』

私はハーケンがコートの襟を掴むのを感じながら作業部屋を出ます。

「どこ行くの?なのは」

「姉様……」

『こいつは予想外のお客さんだな。ボンソワール、メガネシスター』

ハーケンが手を帽子に添えるように、自らの手を頭部に軽くあてがう。

「通して下さい姉様。私は行かなければなりません」

「どっどっ」

目的地を告げてしまえば姉様も着いてくるでしょう。

相手は大妖狐。

魔導師の私でさえ、久遠の攻撃は防げない。

御神流剣士たる姉様でも無傷は免れないでしょう。

傷つくのは、私だけで十分です

「ブリツツアク　　ッ!！」

「なのは!?!」

くっ! 念話はともかく、他の魔法はまだ使えませんか。

10年後の高町なのはでさえ、しばらくの養生を強要される程の負担を強いるプラスターシステム。

一週間の休養では身体はともかく、リンカーコアはまだ無理の様です
ね。

痛みの襲った胸をかき握る。

『大丈夫かなのは!?! まだ魔法の行使は無理だぜ』

「のようです。久遠への勝ち目が余計に減りましたね」

「久遠？久遠に何かあったの！？」

『ウェット。落ち着いてくれ、メガネシスター』

「ハーケンは黙って。ねえなのは？なのはは何をしてるの？私達に何を隠しているの？」

「…私は……」

「そこまでだ、美由希」

「とーさん」

「父様……兄様……」

そこには道着姿で完全武装した父様が、同じく完全武装の兄様を連れてやってきました。

「とーさん。恭ちゃん」

「美由希。人は譲れない戦いをする時が来る。今なのはは、その戦いに身を投じている。俺達には、なのはが黙っている事を強要する権利もない」

「恭ちゃん……」

「父様、兄様、私は…」

私が口を開こうとしたところで、父様が頭をガシガシと撫でてきた為、喋ることは叶いませんでした。

「なのは。別に無理に言う必要はないんだ。ただ、お父さん達にも手伝えることがあるなら、遠慮なく言ってくれて良いんだ。なのははまだ子どもなんだ。なんでもかんでも1人で抱え込まなくて良いんだ」

「父様……」

どうして父様は何も語らない私に、こうも優しくしてくれるのだろう。

私には、そんな風にされる資格なんてないのに

「なのははお父さんの大切な娘だからな、1つや2つの隠し事くらいあってもなんともないさ。それに、なのはも隠し事をするような歳になったんだって、嬉しく思うくらいさ」

「……父様……」

私は帽子を眼深くずらすと、数滴の涙を流した。

そんな事を言ったり思ったりする権利はない。

でも私は父様の言葉に嬉しいと感じてしまった。

本当は抱きついて泣き叫びたい。

でも今は久遠を助けに行かないと

「ほらなのは、背中に」

「に、兄様!？」

「急ぐんだろ？」

「……はい!」

私は兄様の背に乗ると、腕を前にまわして落ちないようにしようとします。

「おっとと、なのは、随分重くなっ たな……いて!」

「失礼な。武器と服が重いだけです」

『失言だったな、エルダーブラザー』

私は中身は元男でも体重や体型くらいは気にするんですよ？

まあ、体型は将来ニスバディが約束されてますが、腐らせるのも磨くのも自分自身です。

「さあ、ちゃんと捕まっているよ、なのは」

「はい！」

兄様の背中……とつても広くて温かくて、父様の手のように安心して身を委ねられます。

「ちょっとまって恭ちゃん！私も！」

「お前はなのはの戦いを知らないから今回はお留守番だ。師範代としてはお前はアレ関係の戦いには前知識無しには出せない」

「うう、とーさん」

「俺より美由希を知ってる恭也が言うんだ。今回は我慢な？」

「うぐ、な、なのはあ〜」

「すみません姉様、私は今回足手まといにしかならないでしょう。そんな立場では私には2人の説得は」

『そう言うことだ、メガネシスター。今回は留守を頼むぜ？《ユーノもな？》』

デバイスのAエータを基にして造られたハーケンですから、念話もお茶の子さいさいです。

「みんなひどいよお……」

《わかった。久遠が相手なら、僕じゃあなんの役にも立てない。悔しいけど、なのはをお願い》

《OK、フレンズフレット。ブラザーは任せな》

「行くぞ、なのは」

「いつてくるな、美由希」

「いつてきます、姉様」

『留守を頼むぜ、メガネシスター？』

「うう、いつてらっしゃーい……」

姉様を残して、私達は家を出ました。

向かう先は八束神社

私達が出逢い。

とら八で久遠の封印が解ける場所。

今一番考えられて久遠と一番縁のある場所。

第15話 スクランブル戦闘民族高町家（後書き）

ついに出撃の戦闘民族高町家の主戦力！

意見・感想、お待ちしております。

第16話 結ばれる絆は

(前書き)

本気久遠VS高町家です。

第16話 結ばれる絆は

side：久遠

久遠は高町家を出た後、八束神社に居た。

神社は死ぬほど嫌いの久遠。だがなのはと永遠の別れをする前に、彼女と出逢ったこの場所に来たかったのだ。

青い石に身体の自由は奪われても、心だけは平気だった。

そこから初めて見たなのはは、怖かった。

しかし高町家で生活する内、なのははとても強いけれどとても弱い子であることがわかった。

傷ついても諦めないところが、辛くても優しくしてくれるなのはが好きになっていった。だから自分はなのはとこれ以上一緒には

「…なの…は」

自らに掛けられた封印。

今はその封印のお陰で感情も押さえつけられているからいい。けれど封印が解ければまた自分は憎しみに駆られ、暴れる妖狐になってしまうかもしれない。

その瞳はとても口では表現出来ない悲しみが見えたような気がしました。

「久遠！何故です！？何故何も言わずに私の前から居なくなるんですか！」

兄様の背から飛び降りるように私は境内に立ち、久遠の背中へと言葉を投げかける。

「久遠…なのは…一…緒…駄…目」

「そんなことはありません！！貴女を蝕む祟りは、私が被ってみせます！だから！！」

「…無…理…なのは…は…霊…力…ない…」

「たとえそうでも、必ず貴女を祟りから救ってみせます！！」

今引けば、久遠とはお別れになってしまう。それも永遠の。そう感じる

「こないで！」

久遠が雷を放つ。

それは子どもサイズでとても威力は低い物。それでも子どもものなのはには十分な脅威となる。

「なのは!」

「くっ」

ナイトファウルフェイクリッパーを展開して正面から雷を断ち切る。

こういうこともあるのかと、今夜のリッパーも服も耐電絶縁処理は完璧に仕上げてきました。ちょっとやそつとの雷撃くらいなら防げはします。

「久遠、貴女がどう言おうとも、私は貴女を連れて帰ります」

「なのは……なん……で……」

「貴女は私の友達で家族だからです」

「……とも……だち……かぞ……く……うっ」

「久遠!？」

急に身体を掻き抱く久遠。その身体からは靈感のない私にもはつき

り見える黒いオーラ。

兄様と父様が身構えるのが気配でわかります。

「つつ　　あああああああ！！！！！！」

久遠の身体から稲妻と黒いオーラが溢れ、稲妻の閃光は久遠を照らし包み、私の視覚から隠してしまう。

星空は曇が立ち込め、稲妻を発し、明らかに空気の雰囲気が変わっていく。

重圧感　　プレッシャーもジュエルシードの暴走体とは比較にならない。

閃光が収まれば、久遠が居た場所には

「なのは……あれも…久遠、なのか？」

元々なのはと同年くらいいの、獣耳や尻尾を生やした女の子だった久遠は、今は美由希や恭也に近い年齢くらいの女性の姿になっているのだ、なのはと久遠の会話から、作業の少女が久遠だと薄々察していた恭也でも、目の前で急に少女から女性に姿を変えられたら戸惑う。

「…ええ、約300年前に封印された大祟り妖狐　久遠。でも久遠は何も悪くはありません。その当時の人間達の所為で、久遠は大切なものを奪われて、怒りと憎悪に捕らわれ、狂ってしまっただけ。本当の久遠は人見知りでおとなしいだけの狐妖怪。祟りを追い払えば、久遠は元に戻るはず」

「祟り…か、超能力や自動人形や魔法とは戦ったことはあるが、果たして祟りなんていう魔法以上に超怪奇的なものに御神流が通じるかどうか……」

御神流師範代で、ついこの間魔法と対峙こそしたが、あれには実体もあつたし、刃で斬ったわけでもなく、鋼糸で動きを止めた程度だ。祟りなんていう日本ではある意味で魔法的な、實在すら曖昧なものに御神流が通じるか否か考えてしまうのは仕方がないことだろう。

「久遠自体には実体があります。祟りは私の方でなんとかしてみます。兄様と父様は　」

「久遠の動きを止めるか、時間稼ぎをするか、そのどちらかぐらいか」

「いえ、私に一度だけ久遠に張り付く隙を作っていただければ」

父様の案を遮って私は言いました。

高町なのはが砲撃で想いを伝えるなら、私は己自身の肉体を用って想いを伝えるしか思い浮かべられません。

もはや高町なのはでもなんでもないような戦い方しか出来ない私ですが、それでも久遠を救いたい気持ちは本物です！

『レイジングハートも魔法も使えない今のブラザーには分の悪い賭けだが、それでもやるのか？』

「当たり前です。久遠を救う為ならば。それに貴方らしくもありませんよ？ハーケン」

『フツ、そうだな。OK、ブラザー。俺も分の悪い賭けは嫌いじゃないぜ、こいつがな。そういうわけだファーザーアンドエルダーブラザー、覚悟は出来てるかい？』

「愚問だぞハーケン。妹の征く道くらいは切り開いてみせるさ」

「なのは、言うからには、必ず成功させるんだぞ？そしてみんなで家に帰って朝ご飯にしよう」

「はい！兄様、父様」

私達は身構えて久遠と対峙する。

その瞳は恨み、怒り、憎しみ

普段の久遠からは考えられない感情ばかりが見えた。

「あああああああああ！！！！！！」

一筋の雷が久遠に落ちる。

久遠の背の黒いオーラが更に膨れ上がる。

人の姿でも鋭い爪を振り上げて叫び声を上げながら襲い掛かってくる久遠。その先には私が居た。

「くっ、結構重いな。だが娘に手を出すなら、この高町家大黒柱高町士郎の屍を踏み越えて往ってからにして貰おうか！」

しかし、間に割って入った父様が小太刀をクロスさせて久遠の突進を止める。

「父さん！」

兄様が一瞬かき消えたかと思えば、一瞬で久遠の右横に居た。

「はあっ！」

兄様は小太刀を抜いたが、私が見えたのは、最初の一刀が反応した久遠の腕を薙いで払う軌道のみ、あとはいつの間にか背後にまわっ

ていたり、また右横に戻ったかと思えば左側に居たりと、そして久遠を襲った斬撃は4つ。

たまらず久遠は父様から離れましたが、身体どころか服にすら傷はなかった。

「小太刀二刀御神流 奥技之六 薙旋」

「ダメだ父さん。まるで鉄板にでも打ち込んでいるような硬さだった」

父様が技名を述べ、兄様が打ち込んだ感想を述べた。

兄様に連撃を入れられた所為か、久遠の警戒心が急激に高まるのを私は感じました。

「なるほど、となると久遠には悪いけれど、少し俺達も本気で行かないとな」

父様から放たれるプレッシャーは、久遠の放つプレッシャー どころか野性的な荒々しさとは違う、明確な、人としての指向性のあるプレッシャー。後ろから感じるだけでも冷や汗を掻く程のプレッシャー。これが御神流剣士、不破としての父様ですか

兄様からも見劣りないプレッシャーを感じます。

なるほど、これはかなり強烈です。

何度が死ぬ思いをした私は平気でいられますが、兄様が姉様を置いてきたのは、もしかやこれが理由でしょうか

『凄まじいプレッシャーだな。メカニカルの俺でもビンビンに感じるヤバさだぜ』

「ええ」

ハーケンに応えながらナイトファウルを構える。

勝負札は二枚、切り札は一枚

ただの博打でしかないけれど

「久遠…！」

必ず助ける！必ず！

side…

「あああああああ！！！！！」

久遠が雷撃を放つ。

標的はなのは

しかしなのは横に転がることで雷撃を回避した。

次に動いたのは土郎。

10m近くありそうな距離を一瞬で詰めた。

幾閃もの煌めきが久遠に打ち込まれた。

御神流 虎乱

しかしなのはが鍛練するものは勿論、恭也や美由希が振るう虎乱以上の速さを持ち、恭也は一瞬出掛かりの動作が斬撃でなければ、美由希の母、美沙斗の放った御神流裏 奥技之参 射抜と勘違いしそうな程速かった。

恭也は負けじと神速で、土郎の虎乱を受けてたたらを踏む久遠を眼前に捉える。

傷つけるのが、殺すのが目的じゃない。

小太刀を久遠に打ち込む。

久遠は腕で防いだ、次の瞬間飛び退いて、防いだ右腕を抑えていた。

御神流 徹

衝撃を表面ではなく裏側に通す撃ち方で威力を『徹す』打撃法。素手や刃のついていない武器でも簡単に人を殺すことができる技。加減して放てば相手の打撃面を痺れさせて使えなくすることが出来る。

狐だった久遠に、対人戦法が通じるかと思ったら、なまじ人型の分、通じることに恭也は確信を持った。

鋼糸を懐から取り出して投げつける。

久遠が鋼糸を防御しようと振り上げた左腕を絡め取る。

「父さん!!」

恭也が士郎に叫ぶと、士郎も鋼糸で久遠の右腕を絡め取り、同時に引っ張り上げる。

久遠は負けじと脚で踏ん張る。

御神流剣士2人分の力に拮抗する力に士郎も恭也も僅かに驚くが、そういう物だと今は自分を納得させる。

「「なのは!!」」

父と兄の切り開いてくれた活路に、なのはは飛び込む。

転びそうになる脚を動かして、久遠に向かって駆ける。

「うああああああ!!!!」

久遠から雷が迸る。

空からも稲妻が落ちる。

しかし感電を恐れずに、土郎と恭也は鋼糸を引く手を止めなかった。

指から焼ける臭いがしても離さない。

なのはを信じて、意地でも2人は離さない。

なのはは放電される雷の中を、リップパーで受け流し、切り裂きながら進む。

この雷には久遠の妖力が混じっていて、魔力変換資質の電気と似たような変換のされ方をしている。

空から降る自然の稲妻は斬ろうとは思わないし、まず絶縁処理したリップパーでも感電するだろう。

しかし久遠から放たれる雷は、この僅かにエーテルを纏うリッパで斬り裂ける。

「正気に戻りなさい！久遠！！」

また正面からきた雷をフェイクリッパで斬り裂く。

もう腕を伸ばせば届く距離に久遠が居る！

「ああああああ！！！！」

「くつつああああああ！！！！」

「「なのは！！」」

『よせなのは！！こんな電流受け続けたら脳天焼ききれぞ！！』

放電する久遠を抱き締めたなのは、超至近距離から直接久遠の雷を受ける事になった。

なのはの姿に叫ぶ士郎と恭也、そして徹底した耐電絶縁処理を施されたハーケンが耳元で叫ぶ。

零距离ディバインバスターはこんな物だろうかと一瞬思いながらも、飛びそうになる意識を気合いで維持して、なのはは久遠を仰ぎ見る。

すっかり大人の久遠は、今はなのはよりも大きい。自然とそういう形でなのはは久遠を見る事になる。

「久遠……私はいつも無様で、本物の高町なのはには程遠い星屑の存在です」

掠れゆく声でしっかりと伝わるかどうかはわからなくても、なのはは伝えたかった。

「私は自分を取り巻く絆に自信がありませんでした。それは高町なのはが手に入れて必然の絆でしたから」

家族やアリサ、すずかにユーノ。

それらは魔法少女高町なのはが手に入れて必然の絆。

「でも私にはアリサが居た。そして貴女が私の前に現れた……」

アリサ

本来ならば存在しない私のファミリア。

久遠

リリカルマジカルな世界には登場しない狐妖怪。

「私は貴女のお陰で救われました。私が紡いだ私だけの絆　そして気づかされた。たとえそれが必然でも、私が紡いできた絆は本物だという事を……」

久遠に語り続けるなのはの身体から、若葉色の光の粒子の様な物が溢れ出し始め、それは神社の境内や裏手の森からも若葉色だったり青だったりする光の粒子が、一様になのはの周りに集まっていく。

「こ、これは」

「傷が……治っていく……」

『マジか……エーテル係数計測限界値突破、数値化出来ねえ。まさかフレアー現象なのか？一体何が始まるんだってんだ……』

side:高町なのは

「……」

気づけば真っ白な空間に私は居ました。

「ハーケン？父様？兄様？」

肩に居たはずのハーケンも、後ろに居たはずの父様も兄様も居ませ
ん。

「はっ　！！久遠！？久遠！！」

「なのは……」

声が出た後ろを振り向けば、そこには久遠が居た。

「久遠！！」

私は久遠を二度と離さないようにキツく抱き締めた。

「久遠のバカ！アホ！ボケ！駄キツネ！！」

「ごめんなさい、なのは」

私を撫でてくれる久遠の手は、父様とは違って細々していて、でも
代わりにその細々しい指で髪を梳かれる心地良さが、まるで昔、私

が私になる前、前世の母さんや母様に撫でて貰った時のように、子どもが寝付くまで髪を梳いてくれる心地良さを久しぶりに感じた。

「久遠……次にこんな事をしたら零距离でスターライトブレイカーを撃ち込みますからね！」

「うっ、なのはがこわい……」

ピクンと跳ねた久遠の耳と5本の尻尾。

「当たり前です！一体どこぞのダフォックスの所為で2回もフェイト・テストロツサと戦う前に電撃浴びにやあなんのですか！！」

「クウ……ごめんなさい……」

しゅんとして垂れ下がる耳と尻尾。

かわいい。勢いが削がれてしまう程の破壊力ですが、ここは心を鬼にします！

「いいえ！タダじゃ赦しません！」

「クオン！？やだやだ！なのはこわい！！」

逃げようとする久遠ですが、がっちり固めている為、走っても振り解こうとしても、私は離れません。

「久遠……」

「クオン　！？な、なのは……」

私は久遠の耳元で久遠の名を呟く。

動きを止めた久遠の頬に手を添える。

「ク、クウ……く、くすぐりたい……」

「久遠、私の大切な久遠……」

私達の足下に展開する桜色のミッド式魔法陣

今は胸の苦しさも忘れる事が出来ます。

「なのは……？かぜ、ひいたの？」

こてんと首を傾げる久遠の愛らしさを脳内フォルダーに刻み込みながら、前世でも今世でも初めてを久遠に捧げます。

「くみゆ　！？！？」

目を見開く久遠を超至近距離で脳内フォルダーに保存しながら、瞳を閉じる。

舌を入れて縮こまって逃げようとする舌を絡める。

「んっ……あ……はあっ……んっ、あっ……あう……うん……」

空気を求めて開く久遠の口の中を舌で犯し続ける。

自分のと久遠の味がブレンドされて、甘露のような甘味を感じる。

そこに久遠の鋭い犬歯で傷ついた舌から流れた血が混じる。

「んく……コク……ふあっ……」

「ふう……」

離れる私達を紅い橋が繋ぐ。

もつと久遠を感じていたいですが、今は絶賛バトル中ですし、これ以上は18歳未満お断りになりそうなので、名残惜しいですが仕方がありません。

「久遠、貴女は私が死するその時まで、私と共に」

「なのは……は……」

使い魔契約

本当はする必要なんてないのかもかもしれませんが、祟りから久遠を引き剥がすのには、私の側に置いてしまっくらいした思いつきませんでした。

「なのは……」

「久遠」

大人から子どもサイズに戻った久遠を強く抱き締める。

久遠もぎこちなくても私を抱き締め返してくれた。

互いの心臓の音が間近で聞こえる。

私も久遠もここに居る。

『ラギアス式魔法陣！？』

「出だよ、デイスカッター！フレイムカッター！」

私の魔力変換資質は火、そして久遠の雷は魔装機神では炎系低位に位置する属性。

それで呼び出したフレイムカッター。

そして周りの精霊達が力を貸してくれたお陰で呼び出せたサイバスターモデルのデイスカッター。

「久遠を縛るすべての怒りも憎悪も悲しみも！！アカシツクレコードから消し去る！！」

私はデイスカッターを頭上で振り回すと、それを地面に突き立てる。

足下に展開する青い輝きを放つラギアス式魔法陣　二重の円の中に星の刻まれた魔法陣。

そこにさらにフレイムカッターを突き刺す。

エーテルを伝い、魔法陣がその姿を変える。

正しい星の形が一部崩れた。

『エルダーサインだと!?!』

それは邪悪なる者を討ち被う聖なる印。

五芒星の結印の輝き。

「第4の結印は『旧き印』 - エルダーサイン - 我、脅威と敵意を被う者成り! コール・フェニックス! !」

五芒星に変換したラギアス式魔法陣から、巨大な炎の鳥が、不死鳥が顕れた。

炸裂弾刻印のされた弾丸をすべて宙に投げる。

弾丸は私の周りに滞空する。

脚にプラーナを込める。

「断鎖術式番号エキストラローションティマイオス! 式号クリティアス! 術式解放、
時空間歪曲。 爆裂! !」

足下が炸裂し、私は飛び出す。

後ろから弾丸を飲み込んだ炎の不死鳥が迫り、私を飲み込み、その輝きを赤からエーテルに溢れた青に変えた。

「アカシック！バスターー！！」

私達は飛翔 - と - ぶ、負の源を断ち切る為、未来の為に！

《あああああああ！！！！！！》

「でえええやあああ！！！！！！」

雷や稲妻で一種の結界を作る祟りだが、不死鳥を身に纏う私達には届かない！

アカシックバスターの直撃した祟りを突き抜け、私は祟りの真後ろに僅かに断鎖術式の勢いで地面を滑り、術式の解かれたディスクッターとフレイルムカッターを地面に突き刺す。

浄化の炎に焼かれた祟りは消え去った。

それと同時に私達の融合も解ける。

「なの…は………」

「お帰りなさい。久遠」

「うっ、っっ、なの…は…っ…なの…はあ………うっ、あああー……」

「！！！！！！」

私に抱きついて涙を流す久遠を抱き締めて、久遠の頭をそっと優しく、慈しみと愛を込めて撫でる。

まるで私達の結ばれた絆を世界が祝福してくれるかのように、朝日が私達をただ暖かく照らしだしていた。

T o b e c o n t i n u e d . . .

第16話 結ばれる絆は (後書き)

こんな感じに終わってみました。

やっぱりとら八士郎と恭也は化け物か？

ようやくこの小説の趣旨の一片が書けました。

久遠×なのはの需要はあれど、久遠×シュテル風ってまたそそられませんか？

なんか弱いなのはの筈なのに勝手に強くなってく星光なのははなんなんだろう？

てーてれっててー てれってー

久遠が支援に加わりました。 ムゲフ口風。

意見・感想、お待ちしております。

なげえなあ……まだ無印4話にもいかねえ……

第17話 デバイス達の想い……（前書き）

まだ先に進まないよ……

第17話 デバイス達の想い……

side：高町なのは

八束神社での戦いの後、プラーナの急な使いすぎと、久遠の電撃を浴びたダメージで動けなくなってしまった私は、久遠の背中に背負って貰って帰りました。

さすがにナイトファウルやロングトウム・スペシャル込みは重いと思ったので、それぞれを父様と兄様に持って貰いました。

ちなみにそれぞれを持って貰ったら

「なのはは力持ちなんだなあ……こんな重たい物、お父さんはあそこまで振り回せないよ」

「こんな銃身の長い銃で狙いが外れないのか？」

そんな感想を述べられました。

それは慣れと練習ですよ、父様、兄様。

それから私は1日休みを父様、兄様、ハーケンから通告されて学校も鍛練もお休みです。最近連続で休み過ぎです。

そんなわけでやることもなく、子どもモードの久遠と布団の中で寝

る事にしました。

「クウ……な、なのは……」

「久遠……」

脚を絡めて、ワイシャツ一枚同士の薄布一枚隔てた久遠の身体を抱き締める。

巫女服でわかりませんでした、久遠は私と近い年くらいにしては少し胸に膨らみがあるようです。

肌も白くてスベスベで、傷痕だらけの私とは大違いです。

「クン！な、なのは……はあ……」

「んっ……く、おん……」

互いに抱き締め合うだけなのに、この胸を掻き乱して、満たす感情はなんなのだろうか

幸せで、温かくて、愛おしく感じる。

親愛？友愛？

違う。

愛は愛でも違う、そういう愛と違う

でも今も昔も心から愛する、恋人と言った意味での愛し方をしたことの無い私は、久遠に抱く愛がどんな愛なのかわからない。

でも家族に想う愛とは違う事はわかる。

アリサとすずか、ユーノは友愛だというのはわかる。

ハーケンやアリス、レイジングハートは愛なんて次元は当に越えている一心同体の存在。

じゃあ久遠は？

「なのは…？あつ、んっ…クオン！？」

「久遠…」

久遠の尻尾を撫でながら互いの胸を突き合わせる。

速いリズムを刻む鼓動。

同じタイミングで鳴る鼓動。

私達の絆

「くみゆ!？」

我慢出来ずに、久遠の背中にまわした腕を力を込めて引き締める。
さらに密着して隙間すらなくなる私達。

「やつ…あ…んん…あう…クウツ」

もっともっと、久遠を感じたい。

あの時、共に祟りを討ち抜いた時のように。

私が久遠で久遠が私で

あの時私達は物理の垣根を越えて一つだった。

「く、おん…やつ、んっ…だ、め…くお、ん…」

「な…のは…し、かえ、し」

「そ、しな、くてっ、やうっ!」

恥ずかしい程淫猥な声が漏れてしまう。

仕返すと、尾てい骨の辺りを撫でられて感じてしまう淫らな私は、

やっぱり高町なのはには相応しくない。

でも代わりに久遠との絆が深まるのなら、それでも構わないと私は思ってしまう。

私だけの久遠、私だけの絆、高町なのはには紡げない絆。

愛と勇気をもって世界を救った高町なのはの久遠との絆よりも、私達の絆は深い物だと胸を張っていえる。

「ずっと一緒ですよ、久遠」

「クウ……なの……は……」

今日一日中。私達はずっと布団の中で、互いの身体を弄りあいながら過ごしました。

|||||

side:ハーケン・ブラウンング

マイホームに帰った俺は、なのはの自室からユーノを連れて、レイジングハートとアリスの器のスケッチブックを持って家の縁側でたむろっていた。今頃ブラザーの部屋はストロベリー空間がオープン

中だろう。

「それにしても、なのははなんであんなにも必死になれるんだろう」

ビーストモードからトランスフォームしたユーノが蒼穹を見上げながら言った。

ちなみにヒューマンモードなのは久遠がヒューマンモードになれるのに便乗してヒューマンモードを晒せという俺の考えさ。

一応風呂は男の意地でファーマーや時々エルダーブラザーと入っていたらしいから、事情を話せばOHANASHIは免れるだろうさ。高町家は色々な意味でソウルハートがオープンだからな、恐ろしいメンタルティだぜ、まったく。

「なのはには、何物にも譲れない物があるのさ。それがあいつのメンタルを支える大黒柱、俺達が支えてないとポッキリ逝っちゃう細々したブラックツリーだがな。絶妙なバランスで成り立ってなんとか安定してるのさ、あいつの心は」

「ハーケン……僕はどうしたら良いんだろう。僕はなのはみたいに攻撃力なんてないから、なのはの力にもなってあげられない。それが悔しい」

「……OK、フレンズフェレットボーイ。良く考えてみるのさ。お前が他人にも誇れる要素を……な」

「僕が……誇れる要素……」

察しの良いユーノなら気づけるだろう。今出せるヒントはこれ位さ。

『そんで、とりあえずは修理の終わったレイジングハートの祝賀会と行きたいが、もう大丈夫なんだろうな？』

『Recovery complete・Condition green・大変お待たせしました。すみません、ハーケン』

『ウェイト。謝るのなら俺じゃないだろ？レイジングハート』

『はい。そうでしたね』

修復が済んだレイジングハートは、魔法系言語は翻訳魔法を使ったミッド語だが、日用会話はプログラムを書き換えて日本語をベースにしている。

理由は俺にあるんだとさ。ブラザーと同じ言葉でトークするのが羨ましいんだと。

マスターと同じ言語で喋りたいと思うのは更なる絆になる。

絆の結び付きは、時として限界以上の力を発揮する。

スーパードロイドのお約束展開だ。

そしてそれが今日起こったばかりだ。なのはも十二分に主人公をやつてるぞ。

「とりあえずはだ、アリスのソフトを治したいんだが、手伝ってくれるな、カムレード？」

「わかりました、ハーケン。私も友人を治してあげたいのは同じです」

「OK、フレンズカムレードデバイス。メカニカルの俺達でフレンズを治して、ブラザーを安心させてやろうぜ？」

「ええ、わかりました。ハーケン」

俺達メカニカルズは一蓮托生一心同体の関係にあるような物だ。

同じマスターの下に集い、共に戦い、随時データリンクしているお陰で、俺達は互いの状態や、誰か1人でもなのはに着いていれば、なのはの事が随時わかるようになっていいるからだ。

それを有利に戦闘に生かす方法も模索中だ。

元祖がレイジングハートとユーノだけで大丈夫だったのは、あれが物語で、元祖が寂しい思いをした過去があっても、良くも悪くも子どもであつたからだ。

だが俺達のマスターは良くも悪くも大人過ぎた。

筐体自体は俺のボディと同じ時に完成してたが、ソフト面のアリスがああなっちまったからな。

A L I C E システムを積んだ機体にアリスが成る。

この希望もアリスによるものだ。

『システムコネクト。TC - OS アクセス、自己進化完全自立型擬似人格コンピュータ OS ロード。機体駆動システム非常用電力で作動。フルカネルリ式永久機関クォータードライブ。メインシステムノーマルモード起動。全シーケンスオールグリーン。おはようございます。ハーケン、レイジングハート』

『グッドモーニング、不思議の国のアリス。新しい身体はどうだい？』

『おめでとございます。アリス』

『ありがとうございます。ハーケン、レイジングハート』

手の調子確かめるように握っては開くをするSガンダムもといアリス。

『ええ、マイスターの想いが宿ったこのボディ、この上なく重畳です』

『そいつは良かったな、アリス。で、何やってんだメカニカルアリス』

『何って、変形ですが？何か？』

『いや、なんでも無いぜ、ファイターアリス』

アリスはGクルーザーに変形して俺達の頭の上を滞空している。

今はパーツが足りなくてちょいと不恰好だが、驚きの再現度だぜブラザー。しかもカタログスペックには分離合体まで可能と書いてあった。

デバイスコアとリンカーコアの仕組みを基にして、なのはが造ったフルカネルリ式永久機関。

精霊の代用は俺達自己進化完全自立型擬似人格コンピューターOS。だから俺達の意志でパワーが変わる。まるでGストーンのGパワーだぜ。

俺の試作フルカネルリ式永久機関のブラッシュアップグレード品だ。大きさは同じだがアップグレードのお陰で出力は段違いだ。それだけにそのエネルギーを普通に攻撃にも使える、いわばモバイル魔装機って奴だ。

羨ましいぜ、プリンセスアリス。

第17話 デバイス達の想い……（後書き）

とりあえずやっとなリス復活となリスの予定の6割り方を消化出来た。

ハーケンも、レイジングハートも、星光なのは為にこれから頑張っていく予定です。

アリスの方も大体設定を組めてきました。

しかしどこで登場させるか……

第18話 アリサの告白(前書き)

アリサファンの皆様、ごめんなさい! ! ! ! !

第18話 アリサの告白

side：高町なのは

土日が過ぎ、ようやく月曜日です。

土曜日は夜まで久遠と寝倒し、日曜日はレイジングハートとアリスが治ったことを告げられ、アリスの筐体の最終調整とハーケンの筐体とナイトファウルの整備をしました。

他には使えるようになったプラーナの慣らしなどもしました。

久遠とユーノですが、子どもモードでこれから過ごして行くようです。母様は大喜びで、2人が動物だったのは二次のようです。とりあえずユーノ、骨は拾ってあげますよ。

月曜日、つまり今日の朝は御神流 貫と御神流 虎切の鍛練をしました。

そして朝食を食べて、ボロボロのただの屍のユーノと久遠を置いて、ハーケン、アリス、レイジングハートと一緒に学校に向かいます。

まだ所々道の舗装は終わり切っていない為、今日も歩きです。

「はあ………」

『どうかしましたか？マスター』

「いえ、今日は体育があるんですよ」

『あ、なるほど、だから』

私の溜め息に反応したレイジングハートに答えると、アリスが納得といった感じで言います。

『マイスターは体育の成績だけは悪いんです』

『そうなんですか？』

『何故かな、戦闘中で魔法を使えば普通に陸戦とか出来るんだが。普段は全力疾走ですっころんだり、ボールには遊ばれるは、跳び箱には尻をぶつけて跳べないわで、とことん運動音痴というか、体育に嫌われてるのさ、これがな』

「レイジングハートに余計な事を吹き込まないでください」

『事実でしょう？マイスター』

なんかALICEシステムのメインAIをアリスに入れてから思考がさらに人間のようになっただんですが、少し優しさに欠けているような気がするの私だけですか？それともこれが本来の人間的思考を確立したアリスの性格でしょうか？

擬似人格OSにはまだまだ未知の領域が沢山ある様ですね。まあ、

A L I C E システム自体、「Advanced Logistic
& amp; Inconsequence Cognizing E
quipment」の頭文字を並べてA L I C E 日本語訳で「
発展型論理・非論理認識装置」という意味を持つとんでもシステム
ですから、わからないだらけ、未知数なのは仕方ありませんでし
ょう。

しかしこのA L I C E システムや自己進化完全自立型擬似人格コン
ピューターOSが、ひいては魔法世界に革新をもたらすものだと私
は思います。

『とりあえず、急ごうぜブラザー』

『予鈴までまだ2時間もあるんですから、余裕では？』

『わかってないな、スクールって言うのは、朝早くに早めに教室に
居る方が気分が良いんだぜ？それになにより静かだしな』

『なるほど、ほんの少しの一利はあるわけですね？』

『2人の話しに着いていきません』

『OK、置いてけぼりハート。その内覚えて行くさ』

『ハーケンの言う通りです、レイジングハート。貴女も少しずつ、
人間を学んでいけば良いんです。焦らずゆっくりと』

『わかりました、アリス』

何かあったのかとも思って、迷惑かとも思ったけど、翠屋の方に電話した。

なのはにメールや電話しても大丈夫だと言われそう、いや、絶対にそういう返事が返ってくるから、なのはのパパかママに確認したかった。

電話に出たのはなのはのパパ、土郎さんだった。

少し熱っぽいから大事を取って休みってわけらしい。

まあ、あんな戦いをしてれば普通身体の調子が悪くなって当然よね。

お見舞いに行っても良かったけど、止めた。それであたしが風邪ひいたらなのはは自分の所為だって自分を責めるのは火を見るより明らかだし。

火…か

《どうかしたのか？アリサ・バニングス》

《ううん。なんでもない》

ふと頭に響いた渋い声に返す。

念話という、まあ、テレパスみたいなやつよ。

あたしの日常は、なのはが魔法使いであることを知って

そしてあの赤い石を拾ってから変わった。

大きさはビー玉より少し大きめの三角形ていうか、矢の先のような形をしてる赤い石。

そこから声が聞こえたのは次の日だった。

そこからあたしも、なのはの居る非日常に身を置く事になった。まあ、なのはに比べたらまだまだ未熟で、曰く戦闘にはとても出せない。

自分でもわかってる。

今まで特に戦う為に特訓なんてしたことないあたしには、そもそも基礎の下地すらまっさらの更地の状態。

素質はそれなりにあるらしいけど、それも磨いていかなければならぬ。

なのはと一緒に戦える日はいつになるかわからないけれど、肩を並べる程じゃなくても良い。いや、目指すはなのはの前に立ってなのはを守ることだけだよ。

今はなのはの戦場に立てるように頑張るだけよ！

今のあたしにはそれくらいしか出来ない。

《焦ることはない、アリサ・バニングス。焦りはミスを誘発し、己のミスは味方をも危険に曝す事になる。焦らず、しかし早く、訓練をこなしていけば良い。その訓練を終えた時こそ、君は君の戦場に立つ事になる》

《わかってる。ありがとう》

そう、今は焦っても仕方がない。歯痒い蹴れど、一歩ずつあたしは強くなるしかないのよ。

「おはようございます」

「おはよう！なのは！」

待っててなのは！あたしもすぐに追いついてみせるから！！

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

side・高町なのは

「おはようございます、アリサ……その鼻、どうしたのですか？」

教室に着いて一番乗りかと思いきや、既にアリサが居ました。鼻筋

に絆創膏を付けて。

活発なアリサには変に似合いますが……。

「ああ、これ？ベッドから落ちてちよつとね。あははは」

「気をつけてくださいよ？かわいい顔に傷でも残ったら大変ですよ？」

「あんだこそ気をつけなさいよ」

私の言葉に言い返しながら、アリサは私の左頬　ゼルエルとの戦
闘での傷痕に手を添えてきました。

「んっ…ア、アリ…サ…」

まだ新しい皮が張ったばかりで、くすぐったさがダイレクトで伝わってきます。

「一生残りそうな傷痕ばっかつけて」

今度は首筋。

インナーで隠しきれない傷痕。

これはあの鴉のかまいたちの時のついた傷痕。

「ア、アリ、うっ……んんっ」

首筋から手を離したアリサは、無言で私を抱き締めて

「も、もし、もしも、もも、もらいて、居なかった、ら、あ、あた、し、が！なのはのこ、と、も、もらって！やるわよ！」

最初は耳元で囁くように、次第に大きくなって行った声

や、あの、えと、うえええっ　！！???

「ア、アア、アリアリ、アリササ！！」

離れたくてもアリサは離してくれず、私はいきなりのことであたふたして

や、わ、私ったら、小学生の女の子の告白されて、こっ、こんなに胸をドキドキさせるなんて、へへ、変態　！？ロリペド　！？

ふざけ半分、興味半分です。ずかの読んでた難しそうな本を取り上げて遊んでたのが始まり。

横から本をぶんどっていったなのは、その本の背表紙であたしに脳天チヨップをしてきた。

あれは今思い出しても相当痛かったわよ。現にたんこぶになったし。邪魔されて怒ったあたしはなのはに殴りかかった。一步も動かずにそれを正面から受けたなのは、しかも良い具合に顔面直撃。

でもなのはは少し眉を顰めただけで、平然とこう言ったのよ？

「1回は1回ですから」

鼻血を垂らしながら無表情で言うもんだから、あたしは恐くて泣き出したのを覚えてる。

でもなのはは悪者のあたしを慰めてくれたの。泣き止むまで、背中を撫でていてくれた。

それがあたし達の始まり。

それも思い出して、気づいた。

あたしはなのはが好きで、あたしはなのはが傷ついて欲しくないから、なのはと一緒に戦って、なのはの負担を減らしたいんだと。

守るだなんて大層なことはいえないし言わない。

なのはただ突き進むだけ、あたしはあたしの意志で、その背中を追いかけて、何時か隣りを走っていくだけ。

そう思ったら、それに気づいたら、胸のモヤモヤした物が消えて、ストーンと何かが落ちた。

多分あれはあたしがなのは好きだって自覚したからだと思う。

あたしは、なのはに墮ちたんだ。

あのいつも無表情に見える鉄面皮でも、僅かに表情を変えて自己表現してたなのは。

この前の、痛みに耐えながら、闘志に満ち溢れていた、絶望的な状況の中でも諦めなかった、レジセイアに限界を超えた一撃を叩き込む、なのはの顔。

ハーケンと楽しそうな、あたし達に秘密にしていることを言えなくて自分を責める、なのはの顔。

弱いなのはもカッコイいなのも強いなのはも泣きそうなのはも、全部あたしは好きなんだ。

なのはは優しくてカッコイイから、すずかもあたしに近い いや、多分同じ気持ちを持ってはるはず。それを自覚してないのは小学3年なら多分普通。

あたしは大分なのはに影響受けて染まってるから、そういう感情に

《さすがにアドバンテージを稼ごうと大胆になってるんですね。わかります。これが若さか……》

《全然話が見えません》

メカニカルズもメカニカルズで盛り上がっている様子。相変わらずひとりは置いてけぼりだが。

「すずか、あたしは保健室になのはを連れて行くから、先生に言っ
といて」

「あ、う、うん。私も後で行くから、なのはちゃんお願いね？」

「任せなさいよ！」

足で教室のドアを開けたアリサは、私を横抱き、俗に言うお姫様抱
っこで私を保健室まで運んで行きました。私ですか？

恥ずかしさのオーバーストレイクで縮こまっていましたよ。

「せんせー！……留守？」

また足でドアを開けるアリサ。行儀が悪いですよ。

保健室には誰の気配もありません。

「ま、いつか」

アリサは私を布団に寝かせると、布団の上に座りました。

「アリサ……貴女は……」

「あたしは本気よ、なのは」

「あう……で、でも、私達は女の子同士」

「ならあたしが男になったっていいわよ」

「な、なんで……そこまで……」

「それは秘密よ。こういうのは言わぬが花なのよ。知ってるでしょ？」

な、なんででしょう。アリサこんなに大人っぽかったですか！？

「まあ、良くも悪くもあなたの所為よ。元々8歳児の自覚なんてなかったのを、あんだだけアニメとからラノベとか漫画とか視たり読んだりすれば、表面も内面も価値観も変わるわよ、普通は」

音にしたらボンッ！

ていう音が出そうな程、今の私の顔は朱くて熱いはず。

ア、アリサが

アリサに、キス………された

「ふふっ、顔、真っ赤ね、なのは……カワイい」

「や、いわ、ない……で……」

「いゝや、なのはがカワイいのは、なのはがなのはだからだもん。何者にも出来ない、変えられない、なのはだからカワイいの」

「やあ、はず、かし……」

使い古されていそうな口説き文句なのに、アリサが言つと、どつしてこんなに胸がドキドキして

やっぱり私って変態なんですか!?

「アリサちゃん…!」

「今日はここまでね。おやすみ、あたしのなのは」

アリサはそう言い残して、ベッドから立って、ベッドを囲むカーテンの外へ出て行きました。

「アリサちゃん、なのはちゃんは？」

「うん。やっぱり熱がぶり返してるみたい。先生居ないから一応ベツドに寝かせたから」

「そう、じゃあ、私が着てるから、アリサちゃんは教室戻っても良いよ」

「ううん。あたしもなのは心配だし、ノートは後でハーケンに教えて貰うから、あたしもここにいるわ」

「そ、そう？それじゃあ一緒に先生待つてようか？」

「そうしましよ。っと、確かシヤナのヤツがポケットにあつた。これで暇潰しは出来るわね」

「それ、なのはちゃんと同じ……」

「そうよ。面白いから集めてるの」

「良いなあ……私の部屋はもう本置けるスペースがないから……」

「読み終わったやつなら明日貸してあげるけど？」

「ほんと？ありがとうアリサちゃん！」

「はいはい、病人居るんだから静かにね？」

「あ、ごめんなさい、アリサちゃん」

寝てしましましょう……。

なんか週明けからどっと疲れました

T o b e c o n t i n u e d . . .

第18話 アリサの告白（後書き）

なんで私が書くところもキャラがいつの間にか暴走してるんだろうか？

アリサがもはやアリサじゃなくなってるよ。

そして久遠には攻めなのにアリサには受けの星光なのがカワイすぎて死ぬる。

皆さんの意見・感想をお待ちしております。

魔法少女バーニングアリサ、カウントダウン開始

第19話 キャプテンブラボーとアリサの道 憤る不思議の国のアリス そして

今回はアリサ視点メインで進行します。

こんなコンビもありですよ？中の人繋がりで

「い、つも、おも、け…ど、コレ…じゅ、な、ん…ガク」

「ブラボー。10分休憩後、いつもの特訓開始だ」

あたしがあの赤色の石　通称ヴァンシユジュエリーを拾った次の日。あの日曜日から始まった特訓。

あたしのイメージから生まれたキャプテンブラボー。

なんでアラストールじゃないのかなあと思ったけど、まあ、声は合ってるから良いとは思っただけ。

あたしはアラストールよりもブラボーの方が性に合ってるのかも。こう、厳しいけど柔らかくて、導いて見守ってくれるブラボーみたいなタイプは好きね。

でも私が昨夜に武装錬金を読んでたからかもしれないけど、毎回この柔軟はかなり堪える。

ヴァンシユジュエリー

なんでも古代に存在したベルカという文化で使われていた技術で造られた願いを叶える石なんですって。現にヴァンシユジュエリーは「ジュエルに変化したから嘘じゃなくて本当」。

ブラボーの人格とかその他諸々はあたしのイメージから生まれたらしいけど、その根底にはベルカの戦士の技術が沢山詰まっただけ、プログラム体として実体化したからで、ブラボーみたいに、ブラボー拳とかブラボーラッシュとかブラボーチョップとか流星ブラボ―脚とかブラボー正拳とか、半分野菜人に片足突っ込んでるような

光景を見せられて、あたしはその日の内からブラボーに特訓をつけて貰ってる。

とはいっても、今は基礎的な体力作りと、初歩的な体捌きを教えて貰ってるだけ。

あとわかんないけど、あたしは魔力よりも生命エネルギーの方が活発で豊富らしい。あたしはそれをプラーナって呼んでる。

存在の力とかでも良いんだけど、ブラボーの非常識さとなにより身体の底から湧き上がる力に、あたしはなのはだったらこう呼ぶんだろうと思ってプラーナにした。

そんな訳だけど、超古代の戦士であるブラボーにも、プラーナは未知のパワーらしく、あたしはブラボーから魔力運用を習いながら、その感覚を応用して、あとは”気”を使って戦うネギま！を参考に、プラーナの使い方を独力で勉強する事にした。

ブラボーのスパルタン特訓は尋常じゃないほど大変だけど、6日間訓練をこなしただけでも、以前とは全然全く違う程、景色の移り変わりとか足の速さとか体力とかが変わったのがわかる。

「ぜえ…はあ…ぜえ…はあ…ぜえ…はあ…」

大の字で息を荒げてぶっ倒れる。

女の子としてなんか終わってるけどあたしは気にしない。とにかく疲れて気にする余裕もないし。

「よし、今日の特訓は終わりだ！」

や、やっと……終わった……。

「さて、この6日間特訓をしたわけだが、どうだ？ なにかが変わってるはずだ」

「はあ……はあ……っ、はあ……まあ、そりゃあ……ねえ……」

この一週間で一番は体力が増してることだと思う。1日目と比べて疲れのレベルが違うんだもん。1日目はホントに死ぬようにばっくんばっくんだったし

「明日はブラーボーな日曜日。すなわち休みだ。だから明日の訓練は休みだ」

「はあ……はあ……い、い……の……？」

「ああ、明日は友達の家にお茶しに行くんだろ？ 折角なんだ、明日はブラーボーな休みを満喫した方が良ささ」

「……はあ……でも……」

「……アリサ・バニングス、焦りは禁物だ。焦り過ぎて身体を壊して

しまえば事だ」

「…わかってるわ、キャプテンブラボー。うん。明日は休みを満喫するわ。あとおんぶして」

「あいわかった。それじゃあ帰るか、アリサ」

「あ〜い…」

ブラボーに背負われて、家裏の庭から部屋に運んで貰う。

ブラボーの背中はプログラム体なんて思えない程生身でちゃんと温かくて安心する。

パパは忙しい身だし恥ずかしいからおんぶしてなんて言えないから、なんかちよつと良いかな？

なのはがあたしの心の憧れとしたなら、ブラボーは戦士として憧れる。

カズキがブラボーに憧れるのもわかる。

だからあたしは、たとえあたしから生まれた擬似人格のブラボーでも、ブラボーに戦う術を教えて貰える事に誇りを持てる。

ブラボーに教えて貰った戦士としての技と誇りで、あたしはなのと一緒に戦う。それがあたしの今の目標！

『まあ、わからないでもないですが』

「なのはー？まだかー？」

「っハ！！は、はい！今行きます！」

『OK、悶えガール。エルダーブラザーがお待ちかねだ。早く行くぞうぜ？』

「ええ」

私はハーケンを肩に乗せ、アリスを連れて洗面所からリビングへ行きます。

「クウ……なのは……」

「お待たせしましたね、久遠、兄様」

駆け寄ってきた久遠を抱き締める。

久遠の外見なら普通に獣耳と尻尾をつけた子どもで通りますから、このまま月村家に連れて行く予定です。

ユーノも今日はさすがとアリサにちゃんと紹介する為に連れて行きます。

「それじゃあ、いつてくる」

「いつてきます」

「いつてらっしゃーい」

姉様に見送られて、私達は家を出てバスに乗って月村邸に向かいます。

『それにしても、バスで遠出は初めてですねえ』

『学校と家との距離と月村邸は離れてるからな』

「クウ……」

アリスとハーケンの会話を聞きながら肩に頭を乗せてきた久遠の髪を優しく梳く。

今日、月村邸でジュエルシードが発動して、フェイト・テストアロツサと戦う。

私に彼女に勝てる可能性はとてつもなく低い。フェイト・テストアロツサの技量がわからない上、私と彼女の魔導師ランク差は歴然。

でも負けない。負けたくない。負けるわけにはいかない。

私の意地とプライドと目的の為に

《あれが、そうなのか。ふむ。アリサと同年にしては鍛えられている身体付きだな。しかも兄も常人には見えん身体付きだ》

《まあ、恭也さんとはかく、なのははもう戦ってる戦士だもの。あたしも早く、なのはみたいに強くなりたい》

《ブラーボー。その心意気は評価に値するが、今日はリラックスリラックス》

《おっと、いけない。そうだったわね》

「おはようございます。アリサ」

「おはよう。なのは！」

なのはに手を上げて返事を返す。

「っと、そっちの2人は誰よ？」

私達と同一年くらいの男の子と、頭から獣耳を生やした、なのはの後ろに隠れている女の子。

「男の子はユーノ、女の子は久遠。わけあって今は家に居候していません。機会が良かったので連れて来ました」

ユーノ？ユーノ……ユーノ……ユーノオ　！？

「ユーノって……」

「あの…ユーノ……くん？」

「あ、あはは……ど、どうも……」

「「えええええー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！」

こ、これにはさすがに驚いたわよ！！

てかなに！？あたし同い年の男の子の頭を撫でたり抱き締めたりしてたわけえ！？

うっわ！恥つつず！！

すずかもおんなじ考えに至ったのか、ちょっと頬が朱い。

「なのはちゃん、そっちの肩の上と後ろにキラキラした光りを出して浮いているゲシュペンストとガンダムはどうしたの？」

あたし達が衝撃の事実固まっている間に、忍さんはハーケンとアリスに興味が行ったらしい。

「ハーケン、アリス、忍さんに自己紹介を」

『OK、ブラザー』

ハーケンは返事をする、なのはから飛び降りて着々の瞬間にブースターを吹かして落下の勢いを殺してテーブルに着地。アリスも静かにテーブルに着地。てかアリスの推進ってエーテルスラスターなの？

『グッドモーニング、エレガントレディー。俺はハーケン、ハーケン・ブラウニング。ゲシュペンスト・ハーケンの管制人格で、マイソウルブラザーカルムレードパートナーなのはの造った自己進化完全自立型擬似人格コンピューターOS搭載のロボツツさ』

『同じくSガンダムの自己進化完全自立型擬似人格コンピューターOSにして管制人格兼ALICEシステムの中核コア兼ファミリアのアリスです。よろしくお願いします』

「自己進化完全自立型擬似人格コンピューターOS……言葉通りの物なら、スゴい物を造っちゃったのね、なのはちゃん」

「恐縮です。今この2人でデータを取りながらデチューン版の製作を検討中で、その内特許を取得する予定です」

「あら、それじゃあ商品化したら1機買おうかしら？」

「家族割引でご提供させていただきます」

「なのはちゃん上手いこと言うわねえ。恭也、結婚はいつにする？」

「なのはも忍も、からかわないでくれ」

なんの前知識無しにアレの凄さを名前だけで理解出来る忍さんって何者！？

||||||||||||||||||||

なのはが来たから、あたし達はみんなで庭に移ってお茶を飲みながら魔法についてなのはから語られた。念話でブラボーから補足説明も入れられて、なのはの集めてるジュエルシールドがとっても危険な物だっというのは再確認出来た。でも同じロストロギアで似たようなヴァンシユジュエリーとは偉い違いよね。このヴァンシユジュエリーはあたしに師匠と戦う為の力をくれたのに。

「本当にごめんなさい！！僕がジュエルシードを見つけてしまったばっかりに、なのはどころか2人まで危険な目にあわせてしまった！！」

「なに言ってるのよユーノ。そもそもジュエルシードが地球にやって来たのはあんたの管轄外でしょうに、あたしはあんたの行動力を認めるし、好ましく思うわ」

それにジュエルシードのお陰で、あたしは自分の気持ちに自覚を持てたし、ブラボーという尊敬する師匠も得られた。

ジュエルシードがなかった、ユーノがジュエルシードを見つけなかったら、あたしは他の誰か、それこそ大人になって普通に男を好きになって結婚してたかもしれない。ブラボーとは逢わなかったかもしれない。ヴァンシユジュエリーも拾わなかったかもしれない。I Fのあたしはそういう選択をしたかもしれない。だからあたしはユーノに感謝こそすれども恨みなんてない。ユーノが居たからジュエルシードは地球にやって来て、あたしはなのはを愛してブラボーに逢えて、これからベルカの戦士になろうとしている。

運命の歯車が噛み合わさらなかったら、今のあたしはここに居ない。だからあたしはユーノを悪いだなんて思わない。むしろひとりでも被害を食い止めようと、一見無謀だけで見知らぬ土地に単身乗り込んで来たユーノの勇気をあたしは認める。

「私も、ユーノくんはスゴイと思う。同じ立場じゃ、私は何もしなかったと思うから……」

「2人とも……」

「だからしんみりするんじゃないわよ。ユーノが居たから、あたし達はまた友達が増えたんだもん」

「うん。アリサちゃんの言う通り。ユーノくん、久遠ちゃん。私とお友達になろう!」

「え、えっと、でも……」

「クオン！？久遠……も？とも……だち……？」

「うん！」

すずかもあたしと同じみたいね。

「よろしくね、ユーノくん、久遠ちゃん。私のことはすずかって呼んでね！」

「あたしもアリサで良いわよ？」

「……すずか……アリサ……ありがとう」

「すずか……アリサ……クオン！」

「あ、コラ！久遠重い！」

「クオン！アリサ、すずか、久遠のともだち！」

またあたし達に騒がしい仲間が増えた瞬間だった。

世に不思議は多けれど、どれほど奇天烈奇々怪々なデキゴトも、ヒトが居なければ、ヒトが視なければ、ヒトが関わらなければ、ただのゲンシヨウ、ただ過ぎていくだけのコトガラ

人、ひと、ヒト

ヒトこそ、この世で最も摩訶不思議なイキモノ

ユーノが居なければ、出逢うこともなかったコトガラの数々と縁の数々

この世には偶然なんてない、あるのは『必然』だけ

侑子さんの言う通りかもね。

この世界、この次元、この時空、この時間軸に居るあたしは必然に導かれて今の選択肢を歩んでいるのかもしれない。

必然かもしれない、でも自分で選択して納得して、今のあたしは居る。それは必然でも偶然でも運命でも宿命でもない。『あたし』自身の選択。あたしはそう思う、信じる。侑子さんが実際に目の前に居ても断言する。あたしはあたしの意志と選択でなのはと友達になつて、魔法と出会って、なのはを愛して、ブラボーに憧れて、ベルカの戦士になる！

なのはと一緒に戦う為に

ピキーンッ

「……………（今の……）」

「ッ　！？」

「どうかしたの？なのはちゃん」

「…いえ、少し御手洗いに行きたくなってきた…」

《ブラボー、今の感覚…》

《ああ、断定は出来ないが、高町なのはの反応から推察するに　》

《《ジュエルシード！》》

《ブラボー、場所はわかる？》

《聞いてどうする？まさか封印しに行く気が、アリサ・バニングス》

さっきまでのブラボーじゃない。

戦士・キャプテンブラボーがあたしに問う。

《お前はまだ訓練すら終えていない。武器もない、戦術もない。そんなひ弱なお前が行った所で、高町なのはの邪魔になるだけだ》

《わかってるわブラボー。でもなのはが何をするのか、サーチャーくらい飛ばす許可は頂戴》

《……１機だけだ》

《…ありがとう、ブラボー》

私達が念話で会話している間に御手洗いを嘘を吐いてどこかに行くのはと、付き添いで飛んでいくアリス。

ハーケンがユーノを連れて散策に行くと言い出して、ユーノはハーケンを肩に乗せて席を立つ。多分後で合流する気ね。

「ごめんすずか、あたしも少しトイレ行ってくるから、久遠をお願いね」

「うん。任せてアリスちゃん」

すずかの純粹さに良心が痛い。

あたしはずずかから見えない距離まで行くと、物陰に隠れてベルカ式魔法陣を小さく展開する。なのはの行った方向とジュエルシードを感じた方向が一緒とブラボーが教えてくれた。

あたしは1つだけサーチャーを飛ばして擬似視覚を繋げてなのはを探した。

「（見つけた！って、何よアレ！？ネコ？トラ？何よ！？）」

なんかトラっていうかヒョウっぽい動物がなのはと対峙していた。

とりあえずなのはにちなんでジュエルシードの暴走体って呼称するけど、暴走体はなのはに爪を立てて襲いかかった！

でも暴走体が動いた瞬間に、なのはは一瞬姿を消した。視覚だけじゃわかんないわ！音声機能ON！

「我が一撃は騎士のランス！爆裂！！」

いつの間にか飛びかかる暴走体の目の前になのは居て、脚には紫電を纏っていて、ある程度離れてるあたしでも強烈に感じるプラーナ。

「アトランティス！！ストライイイイクツ！！」

つてえ！！

なんてもん生身で放ってんのよあの子　！？

『GYAAAAAIIII！！！！！！』

顔面を2回回転し蹴りで蹴られ、さらに3撃目を後ろ回し蹴りで蹴られた暴走体は、痛々しい叫び声を上げながらなのはから見て右にすっ飛んで行った。

しかもダメ出しとばかりに、アリスがふっ飛ぶ暴走体にビームスマー
ートガンを撃ち込んだ。

『トウーソード版のアトランティス・ストライク。我がマイスター
はなかなかどうして、エグいですねえ』

「それは貴女もでしょうか？アリス」

『いえいえ、マイスター程では』

「いえ、アリスも」

『私は要らない子ですか？』

『仕方がありません、レイジングハート。マイスターはまだプラス
ターシステムの後遺症が残っていてミッド式は使えないんですから、
今回は私達に任せてくださいな』

『……わかりました。アリス。マスター、頑張ってください』

「ええ、ありがとうございます。レイジングハート」

『いえ…っ！来ます！！』

『人が喋っている時は！』

「静かに待つのがマナーですよ？トラさん」

復帰して牙を剥いて、背中に翼を生やして低空飛行して突っ込んで来た暴走体を、ジャンプで避けて上を取ったなのは。

アリスがビームサーベルで片方の翼の付け根を斬りながら、後ろにビームスマートガンの銃口を向けて前を向いたままもう片方の翼の付け根を撃ち抜いて、暴走体の翼を切断した。

ニュータイプかお前は ！！

そして上を取ってたなのはの拳の先には、環状魔法陣が展開されて、赤い光が集まって

「カロリックスマッシュ！！」

暴走体の背中を殴りつけて、赤い光は暴走体の身体を貫いて、地面で大爆発を起こした。

「なのは！」

「ユーノ！封印を任せます！」

「ええっ ！？」

「私はまだ魔法を使えません！封印出来るのは今、貴方だけです！」

「わ、わかった！」

やって来たユーノはなのはに頼まれて、足下に円形の翠色の魔法陣を　ブラボーによればミッドチルダ式魔法陣を展開した。

「妙なる響き　光となれ　許されざる者を　封印の輪に！ジュエルシード……封　うわっ！」

「ユーノ！？」

封印式を紡いでいたユーノを、黄色い光弾が邪魔した。

しかもその際にユーノに向けて翼を治した暴走体が飛びかかった。

そしたらまたなのはが消えた。いったいどんな移動法したらサーチヤーの認識領域外のスピード出せんのよ！？

「ねんころはねんころらしく　」

ユーノと暴走体の間に入ったなのは。右足にプラーナが集中する。

「コタツに入って寝てなさい！グラスヒール！！」

なのはが蹴りで暴走体の顎をカチ上げると、踵が爆発した！

蹴りと爆発で勢いのついた暴走体は、一番やわそうな懐をなのは晒していた。

『終わったな』

あたしはブラボーの言葉に頷いた。

なのはは腰溜めに両腕を引き絞っていた。そしてなのはの身体から視覚で見える程のプラーナが溢れ、その腕にはアトランティス・ストライクよりもさらに強力なプラーナを感じた。

「うおりゃあっ！！」

上から斜め下に拳を暴走体にめり込ませる。

『Gya』

「うおおおおお！！！！！！！」

ブラボーラッシュよりも残像の残るラッシュを暴走体の懐に叩き込む。

視ててこっちのお腹が痛くなるんだけど……。

『Gya、gyaa……』

「ふんっ!!」

身体をくの字に曲げた暴走体の顎を、プラーナの集中した右のアップで打ち抜くのは。

あ、牙が何本か逝ったわ……歯がむず痛い。

「貫け!! 覇龍!!」

覇龍　!?まさか!!

なのははプラーナの集中した振り抜いた右腕を再度腰溜めに引き絞って、それを空にカチ上げた暴走体に向けて正拳突き如く突き伸ばし放った。

覇気で出来た龍　覇龍を!

「これぞ奥義! 轟覇機神拳!!」

覇龍は暴走体を呑み込んで、暴走体を突き抜けると、暴走体は大爆発。

なんていうか、地面に落下した暴走体は、表現出来ない程ボロボロなのにピクピクしてるから死んじゃあいならしい。

『あの技、どうやら非殺傷付きらしい。おそらくは不殺の念が込められているのだろっ』

心眼・ブラボーアイには驚くわよホント。

『さすがブラザー、スゲエシユラナツクルだせ。んで？フレンズフレットボーイを撃ったヤツはどこだ？』

『あそこに居ますよ。3時方向、林の先の電柱の上』

アリスがビームスマートガンを向ける先

金髪で真っ黒装束の私達と同年位の女の子が、斧っばいデバイスをユーノの方に向けたまま、なんか小刻みにプルプル震えてた。目尻には涙が薄っすら見える。

やあ、まあ、アレはバイオレンスレベルがヤバすぎるわよね。普通に暴走体に同情するわ。

「貴女……ですか、ユーノを撃ったのは」

「ひっ！…っく、ロスト…ロギア、ジュエル、シード…いた、だいて、行き…ます…！」

涙眼で目的を言い切ったのは拍手だけど、はつきりビビってんのが丸分かりよ。

「ユーノ、封印を！」

「あ、う、うん！」

「っ、させない！」

「アリス…！」

『了解！スペリオルガンダム！目標を狙い撃つ…！』

ユーノを邪魔しようとした動きだそうとした女の子に、アリスがビームスマートガンを連続で撃つ。

正確無比の一発必中の射撃に、女の子はバリアでビームを弾く。

防御は出来るらしいけど、機動力がありそうなあの女の子でも一発一発をガードしなきゃならないアリスの射撃の命中がコワイ。

ホントにニュータイプじゃないの！？

でも女の子はさっきのなのはみたいに一瞬消えると、暴走体の目の

前に居て、斧が変形して魔力刃が出力して鎌になった。

「しまった！」

「ジュエルシード！封印！！」

女の子は地面に倒れていた暴走体に一閃、真つ二つに斬り裂いた。

暴走体は煙になって消え、後にはずかんちの子猫と青いひし形の宝石　ジュエルシードが残った。

『Internalize・No.16』

ジュエルシードが女の子のデバイスコアに吸い込まれた。

『横取り泥棒とは、何をされるのか理解してのことでしょうね』

「く、私は、ジュエルシードを手に入れないとならない。だから…
邪魔はしないで」

『ふざけるのも大概にしなさい。貴女如きに私のマイスターの戦いの邪魔はさせません』

隠しようもない怒気を孕んだ声で言い放つアリス。しかもビームス

マートガンの銃身が震えている。ほとほと人間ばいわよね、あの子も。

「私も引けない……邪魔をするなら」

『5対1……本気ですか？』

「たとえ何人でも……私は負けられない！」

対峙するなのは達と女の子。

『マイスター、私がやります。手出しは』

「……わかりました。でも」

『ご心配は無用ですよ。私は貴女の最初のデバイスにしてファミリア。そして戦う為の力たるガンダムボディに、フルカネルリ式永久機関やALICEシステムを搭載する私のどこに負ける要素がありますか？』

『強気だな、不思議の国のアリス』

『フフ、当たり前ですよ、ハーケン。貴方にもいずれわかりますよ』

『OK、ハッスルメカアリス。頑張れよ！』

『OKです、ハーケン。さあ、死合いしましょうか？真っ黒ガール？』

「……フェイト……フェイト・テストロツサ……私の名前、真つ黒
ガールじゃない……！」

『私はアリス！さあ、踊りなさい。私の奏でる永久円舞曲 - End
l e s s W a l t z - で……！』

「行きます……！」

鎌を構える女の子とビームスマートガンを向けるアリス。

静寂の時間が、2人の間に流れる。

「ッ……！」

『狙い撃つ……！』

ビームスマートガンを撃つアリス。

女の子はまた一瞬消えてアリスの真後ろに現れる。

『それは見切っていますよ……！』

後ろに大きく退くアリス。

女の子　フェイトが振り下ろした鎌は、悲しく空を断つ。

『今日の私は、容赦ありませんよ!!』

「キヤア!!」

アリスのビームスマートガンがフェイトの右脚と左肩に命中する。

でもフェイトにケガはなかった。

でもフェイトはバックステップでアリスと間合いを開けると、肩を押さえながら空に飛ぶ。

「くっ」

『ケガはしませんが、関節を撃ち抜きました。自然治癒で十分治りますが、30分程は動かせば痛みが走ることでしょう』

なのはもエグいけど、アリスも別方面でエグいわねえ……。

「バルディッシュ、フォトンランサー連撃!」

『Photon Lancer・Full auto fire・』

「エフィールド・バリアー……!!!!!!!!」

「バル、ディッシュ！」

『Arc Saber.』

フェイトがデバイス　バルディッシュを振ると、魔力刃がブー
メランの様にアリスに飛んで行った。

『甘いですよ！』

ブースターを吹かして若葉色の煌めく粒子を放ちながら、アリスは
あえて魔力刃に飛び込んでいく。

『相対速度2・2！バレルロール！！』

魔力刃を肩のスラスターを吹かしてバレルロールで回避すると、そ
のままビームスマートガンを撃った。

『Sonic Move.』

『ッ！？…右いつ！！』

「なっ！？」

『っぐうう、あああああ！！！！！』

「ぐっ、ああっ！」

アリスが左手のビームサーベルをフェイトに向けて連続で振るう。

機械だからか、小さいからか、そのスピードは疾い

『もらったっ！！』

「しッ ！？」

アリスの連斬を捌き切れなくなったフェイトの隙を突いて、ビームサーベルを突き型の型でフェイトに突っ込む。

ちよ ！？サーベルはダメでしょアリス！！

「サンダースマッシャー！！」

『え？キャアアアア！！！！！！』

「アリスーーーー！！！！！！」

「レヴィー!!」

「フェイト!!」

「…うん!!」

目配せし合ったフェイトとレヴィって呼ばれた女の子。

「アインス!!」

「っ、くうっ!!」

レヴィと競り合っていたのはが、レヴィがデバイス　これまた
フェイトのヤツとそっくりのデバイスを振り抜いて、競り負けたな
のはが弾かれた。

そして弾かれた先にはフェイトが腕を突き出して、ミッド式魔法陣
を展開して待ち構えていた。

「ツヴァイ!!」

『 Photon lancer · Full auto fire ·
』

「キヤアアアー！！！」

零距离での直接連続射撃！？アレじゃあバリアジャケットだけじゃ！！

射撃を放ったフェイトはダメ押しとばかりに斧型になったバルディッシュでなのはをフルスイングで打ちつけた。

「がふっ！」

そしてレヴィは青い光に身を包んで、巨大な刀身が青い大剣 斬艦刀みたいな大剣に変形したデバイスを構えて、フェイトも身体に黄色い光を纏って、また鎌に変形したバルディッシュを構えて

「ツイン！」

「バード！」

レヴィは一直線、フェイトがレヴィの周りを複雑な軌道で、なのはに向かって飛んでいく。

ちょっと待ちなさいよ……。

その掛け声と2人で突っ込む技、あたし一個物凄く心当たりが

「『』なのは――！！！！！！！！！！」

飛び散る鮮血

木霊するあたしとユーノとハーケンの叫び声。

スローモーションで墜ちるのはとアリス

なのはが……………負け……………た……………？

第19話 キャプテンブラボーとアリサの道 憤る不思議の国のアリス そして

かなりの急展開に次ぐ急展開!!

やっと書きたかった初の山場にさしかかれたよ。

皆さんの意見・感想をお待ちしておりますよ!!

ちよいと誤字を修正しました。

第20話 互いに譲れぬ信念を胸に……（前書き）

いろいろと、かなりぶっ飛びまくって暴走激走の回です。

何がしたいんだるか、私は、つか弱い星光なのはどこ行った？

第20話 互いに譲れぬ信念を胸に……

side：アリサ・バニングス

サーチャーからの映像を片目、目の前の景色を片目で見ながら、あたしは駆ける。

なのははユーノが魔法で受け止めた。

アリスは途中で立て直したけど背中ของブースターから火を噴いて、着地はハーケンに支えられて無事だった。

「なのは！なのは！なのは！！」

「ぐっ、私は平気……です……でも、でも……レイジング……ハートが……」

胸甲のお陰で致命傷は避けられ、魔力刃でも非殺傷はかかっているはずだから、そこまで深い傷じゃないのかもしれないけど、肩と胸の裂けたバリアジャケットから血を流すなのは。でもその視線は、涙に溢れたその瞳は、なのはの血だらけの手に握られているレイジンググハートのデバイスコアに

「私が……私が不甲斐ないばかりに……また、貴女を、こんな姿に、こんな傷だらけにっ！！」

なのははデバイスコアを握る手、左手を胸に抱きながら、右の拳を地面を砕く程の力でめり込ませた。

「っ、くっ、レイジングハート……リカバリー…スタート…」

なのははレイジングハートのデバイスコアに口づけると、胸を掻き押さえながら、桜色の光に包まれたレイジングハートのデバイスコアをユーノに渡した。

「な、なのは……」

「ユーノ、結界強化をお願いします……」

なのははゆらりと胸を押さえながら立ち上がると、ハーケンに腕を引かれながら危うく飛ぶアリスを一目見てから、空を仰ぎ見上げた。

そして尋常でないプラーナ　　うっん。覇気が、なのはの身体から溢れ出した。

プラーナ以上に濃厚で存在感のある生命エネルギー　『覇気』。

プラーナが身体の生命エネルギーを表していると仮定すれば、覇気はその個人の身体と魂から溢れる生命エネルギー

でもあんなに覇気を使ったら子どもなのはは！！

「私は愚かです……本当に、どうしようもないマスターです……」

髪の毛が逆立ち、その長さを増していく、いや、そればかりか

「な、のは……」

『マ、マジ……か』

なのはは身体から覇気を溢れかえらせながら、その身体が大きく
否、身体を成長させた。

なのははから溢れかえる覇気は収まったけれども 代わりになのは
の身体の中を異常な覇気 生命エネルギーが駆け巡っているのが
離れていてもわかる。

バリアジャケットもいつの間にか元通りに直っていた。

『彼女は……ただものではないな。これ程の気迫……ベルカの騎士
でもそうは居ないぞ……』

「なのは……」

大人になったのは、少し伸びた前髪を掻き上げて位置を少しズラした。

あれが……大人のなのは……？

「変身……魔法？」

「わからない。でも全く魔力を感じなかった。油断しないで、レヴィ」

「わかってる、フェイト」

デバイスを構えるフェイトとレヴィ。

なのはは自然体のままで立っていた。

「バルディツシュ！」

「バルニフィカス！」

『Get set.』

また光を纏って、フェイトとレヴィはなのはに突っ込んでいった。

レヴィが正面から大剣を

「チエストオオオオツ!!」

フェイトが一瞬消えてなのはの真後ろに現れて鎌を

「はあああああつ!!」

振り下ろした

「第4の結印は『旧き印』 - エルダーサイン - 脅威と敵意を被
うもの成り」

なのはは両腕をそれぞれフェイトとレヴィに向けた。

腕の先に現れたのは聖なる結印、五芒星の白い魔法陣。旧き印 - エ
ルダーサイン -

「受け止めた!?!」

「でも魔力なんて感じないよ!」

火花を散らしながらせめぎ合う防御結界と魔力刃。

でもなのはは直立の自然体で腕を伸ばした体制から動いていない。

逆にフェイトとレヴィは腕に力を込めてるからか、腕や肩が、デバイスが小刻みに揺れている。

あたしはなのはを見て背筋が凍った。

今のなのはの雰囲気、気迫には怒りを感じる。

でも顔　　前髪で隠れて影になって分かり難い表情には、色がなかった。

無表情じゃない、無表情を通り越した本当に『無』の表情がそこにはあった。

|||||

あたしはアレを　　なのはの『無』の表情を見たことがある。

それはあたし達がそれなりに会話し始めて、それなりに仲良くなり始めた頃。

まだ気の弱かったはずかは、男子にもいじられる対象になった事もあった。でもその時は今思い出しても、や、今だからこそ臍物が煮

えくり返りそうだ。

すずかはなのはとは別ベクトルでまたカワイいからさ、その時は親が会社の社長でお金持ちで運動神経も良くて頭もあたしやなのは程じゃないけど、クラスでは10位以内でそれなりに良い。あ、ちなみにあたしは学年2位、なのはは学年1位の頭脳よ。あたしIQテストで200あったのに、なのははいくつなのかまだ聞いてないのよ。あとで訊こう。

つと、閑話休題

んで、顔も良い、ボンボンのお坊ちゃんが居ただけだよ。

そいつがまたウザいナルシでね、世界は自分を中心に回っていて、自分は何をしても許されるって言い張って、よりにもよってすずかを嫁にするって言い出して、しかも拒否権は無いつて言って、さらに断ったらパパやママが黙っていないぞ？家族がどうなっても良いのか？って脅迫までしてきたのよ！？

周りは余りの異常さに一歩引いて事態を見てたし、昼休みで近くに先生居ないし、すずかは怖がって泣くしで、あたしはせっかく出来た友達を泣かせるアイツが赦せなくて、堪忍袋の尾が切れそうだったんだけど。

「おやおや、これはこれは、学年筆記成績トップで唯一体育はダメダメの高町なのはちゃんじゃないか。いったいこの僕に何か用かい？」

「すずかが泣いています。謝って下さい」

「ふっ、何を言うかと思えば、彼女は僕の告白に感激のあまり嬉し泣きをしているんだよ」

「貴方の眼は節穴の様ですね、眼科医……や、精神科医をお薦めしますよ？幸いにも、兄の知り合いに医師が居るものですから」

「ははっ、学年トップも勉強は出来ても一般教養はやっぱり子ども相応らしい。謝るのなら今の内だよ？僕はこの世で一番偉いんだからさ」

「眼科医や精神科医より先に脳外科医に診せた方がよろしい様ですね。勘違いのボンボンのガキはこれだから困る。いったいどんな生活環境で育てばこんなにバカでアホでボケの脳味噌ウジ虫変態淫語製造機乱痴気野郎が出来上がるんでしょうね？」

「キミは自分の立場がわかってないようだね？キミは何を僕に言いたいんだい？」

「学の無いガキはコレだから……人語を解せないのならば、言葉は不要ですね」

「…僕を怒らせて、どうなるかわかっているのかい？キミだけじゃない。キミも、キミの家族も破滅さ。そう言えばキミの家族には母と姉が居たね。容姿も良い。パパも喜んでくれるかな？」

「成る程、蛙の子は蛙。下衆の親は同じく下衆の人種でしたか……」

「……お前え……いい加減にしろよ！」

「ぐっ…」

「どうだい？僕の蹴りは？これでも空手をやってるからね」

「なのはちゃん！やめて！なのはちゃんにいじわるしないで、
キヤー！」

「ははっ、良い気味だな高町なのはちゃん。すずかちゃんもお
母さんもお姉さんも、僕が貰っていくよ」

「……堪忍袋の尾が切れた……」

それがなのはの『無』の表情を見た、最初だった。

「すずかに手を出すには飽き足らず、母様や姉様にまで毒牙に
かけようと画策しようとは。外道 断つべし！」

「やるのかい？体育はダメダメなのはちゃんが、この僕と？
とんだお笑い種だね」

「喜劇と笑わば笑え、外道に話す舌など持たぬ、刮目するが良
い」

「なっ ！？」

その時、一瞬だけなのはは消えて、アイツの懐に居た。

先ずは膝蹴り

「ぐえぶっ」

膝蹴りでアイツをすずかから僅かに引き離れたのは、そのまま曲げた脚を上には伸ばして、アイツの顎を蹴り上げ

「ぎゃぴー！」

「我が一撃は騎士のランス！爆裂！！」

回転回し蹴りの2連撃でアイツをさらに引き離れた。

声を上げなかったから、今だからわかるけど、顎の蹴り上げで気絶してたのね。んで続きだけど

そこから踵落として脳天を蹴り落とし、アイツは顎を打ち、浮き上がったアイツの顔面向けて3撃目の後ろ回し蹴り

「アトランティス・ストライク！！」

グキッって音がしたのも覚えてる。多分鼻の骨が逝った音ね、アレ。

いくら一年生で小柄で女の子のなのでも、後ろ回し蹴りはかなりの勢いと威力だったらしく、アイツは教室のドアまですっ飛んでいった。まあ、距離は1mもなかったしね。

「光射す世界に！汝等闇黒、棲まう場所無し！！渴かず！飢えず！ 無に還れええっ！！」

あの時のなのは厨二病全開だったわねえ……。正しくポーズもモーションも完璧だったし。

「レムリアア、インパクトッ！！」

また片足をバネにして飛び出したなのはが、右手の指を曲げた掌打をドアに叩きつけられてもたれ座ってたアイツに叩き込んだ。

「昇華！」

まるで衝撃があとからきた様に、アイツごと教室のドアが2枚とも吹き飛んだ。

あの時の後ろ姿

あの時のなのはは、白き王に重なって見えた。

「きえッ　！？」

一瞬なのはが霞み消えた。さっきより速すぎて残像が残る程速いんだ。

「え？」

「フェイト！！逃げ　」

「空円脚！でええいつ！！」

子ども体型とは全く馬力と威力も速さも違う後ろ回し蹴りは、フェイトを吹き飛ばした。

「かつはっ　」

木を数本へし折って、フェイトはようやく止まって、ぶつかった木の根本にもたれ倒れた。

「フェイトー！！！！」

「今のはアリスの分　」

「よくもフェイトを！！！！」

レヴィは右薙で大剣を振るった。でもなのははその大剣を、覇気を纏った脚で踏み潰してブチ折った。

「ザンバーが！？」

「そしてコレは」

なのはの右手に禍々しくも力強い、でも正しい赤い覇気が集中する。

「真覇！剛掌閃ツ！！」

「があああっ！！」

モロに右ストレートの直撃したレヴィの方は、フェイト以上の勢いで、バカみたいにすっ飛んで、フェイトの隣りにあった岩も砕いて、その後ろの木に当たってようやく止まった。

「コレが レイジングハートの分です」

片膝を着いて、右腕を押さえながら、なのはは呟いた。

「なのは……」

『彼女は……危ういが、凄まじい戦士だな』

ブラボアの言う通り、なのはは危ういが、凄まじく強い。

でもそれが、身を削り、魂を削り、心を削り、生命を削って引き出しているような強さに思えて、あたしは気が気じゃない。このまま、こんな調子で戦い続けてたら、なのはは

「…よ、くも……」

ふとサーチャーが拾った声。これはフェイト？レヴィ？

「…よく、も…よ、くも…よくも……よくも、よくも、よくも、よくも、よくも……よくもよくもよくもよくもよくもよくも　よくもっ！！」

声の主は、口から血を流しながら、バルニフィカスを杖に立ち上がったレヴィだった。

「くっ……」

身体を青い光

レヴィは魔力、なのはは覇気で身を包んだ。

「よくもフェイトを！お前は絶対、ボクが倒す！！」

折れた大剣を再生成させたレヴィが、なのはに切っ先を向けながら突進する！

「突き破れ！ボクのバルニフィカス！！」

「第4の結印よ！！」

レヴィの突撃をなのはは防御結界でガードした。

「ぐっ！！」

「いつけええええー！！！！！！！！！！」

火花を散らしてせめぎ合う結界と切っ先。

なのはは突き出していた左腕だけじゃなく右腕も伸ばして、さらにブラーナを　覇気を込めた。

防御結界の内側に薄く張られた青い障壁。

レヴィのバルニフィカスは、先端のほんの数ミリが結界を突き抜けてきていた。内側の障壁はそれをガードして押し返す為に張ってるらしい。

ようやくなのは達のもとに着いて、擬似視覚から本物の視覚で、なのはの戦いを焼きつける。

日常のすぐ裏にある非日常で、いつも命を賭けて戦うあたしの想い人の勝利を願いながら、あたしはなのはとレヴィの戦いに刮目する。

「ッ……はっ！」

「ぐあっっっ！」

覇気で気当てでもしたのか、レヴィが急に後ろに吹っ飛んだ。

「くっっ！」

「はぁ……はぁ……はぁ……はぁ……はぁ……はぁ……」

空中で宙返りして着々するレヴィ。

なのはは傍目から見てももついっぱいいっぱいだ。

「強いんだね……フェイトやリニス以外に、こんなに強い人と闘ったの、初めてだよ。でも　だから負けられない。ボクはこの力をフェイトの為に使う事を、フェイトの為に振るう事を、フェイトの邪魔をするヤツを粉碎する為にとって！ボクは決めたんだ！！」

あの子　あたしと同じなんだ。

「だから　バルニフィカス！！」

『G a t s e t .』

「リミット解除！マキシマムドライブ！！コード「雲耀の太刀」！！」

レヴィの魔力が爆発的に高まって、足下に魔法陣が展開される。それは三角形で頂点は円形の魔法陣　ベルカ式魔法陣。

《あの子、ベルカの騎士なの！？》

《確かにベルカ式だが……何故だ、構成式にミッド式の物が混じっている。あの魔法陣はなんだ？》

あたしとブラボアの疑問を余所に、バルニフィカスの刀身がさらに倍に延長する。

「ミッド式を内包したベルカ式魔法陣：近代ベルカ式ですか。そしてこの魔力の高まり方……あの子、独力でブラスター1を使った……？ならば私もそれに応えなければなりませんね」

ぶつぶつ言いながら、なのははなのはで右腕を突き出して、その先にあの青い魔法陣が現れる。

「出でよ、デイスカッター！」

若葉色の粒子が魔法陣に集い、抜き身のサイバスターのデイスカッターが現れ、それを手に取るなのは。

「我が名はレヴィ。レヴィ・テストロツサ！我こそは、フェイトの剣なり！！」

「霊燃機関全力稼働！超攻勢防御結界！！」

レヴィの身体から魔力が

なのはの身体からプラーナが

鉄砲水の如く溢れ出して、それぞれの剣へと集中する。

「刮目せよ！これが我が太刀筋なり！！届け！雲耀の疾さまで！！」

「はあああつ!!」

レヴィは、その身には不相応な程巨大な大剣　　斬艦刀を肩に担いで天に飛ぶ!

「靈巖荒かなる刃よ!我に仇なす諸悪を尽く殺戮せしめん!!」

ディスクッターを地面に突き刺したなのは足下にはまた青い魔法陣が現れて、突き刺したディスクッターが分身。それはすべてで1本存在し、なのはの周囲を取り囲んだ。

なのはが左手を上げると、最初に地面に突き刺したディスクッター以外の分身したディスクッターが宙に浮き上がる。

「一刀両断!!」

「往け!!」

上から斬艦刀を振り下ろしながら、落下速度も味方につけたレヴィへ、分身したディスクッターが次々と射出されていく。でも斬艦刀はそのことごとくを両断し、粉碎していく!

「チエストオオオオ!!!!!!」

「久遠の虚無へと還れっ!!」

振り下ろされる斬艦刀に、なのははディスクッターといつの間にか左手に握っていたバニティリッパーに覇気を込めてクロス斬撃で応戦した。

「はああああああああああっ!!!!!!!!!!」

「でえやああああああああああっ!!!!!!!!!!」

魔力で出来た斬艦刀と、覇気でコーティングされたディスクッターとバニティリッパー。

両者のサイズは歴然だが、使い手の体格差か、威力は拮抗していた。

「ボクは負けられない!!フェイトの為に、負けられないんだー
————!!!!!!」

「っぐ!!」
ピキッ

ディスクッターとバニティリッパーに僅かに罅が入った瞬間。光の柱が、なのはとレヴィを包んだ。

自分の為でなく、人の為に振るう。ただその一心で振るわれた力は
有史より、その力は無敵無敗

「相討ち　と、言いたいところですが、私の負けですね」

胸甲が砕け、バリアジャケットもインナーも斬り裂かれて、僅かに
血が流れ出した。

そう、レヴィの刃は　私に届いていた。

「なのは……ボクは別に」

「互いに引けない物を持つ者同士、衝突は必至です」

「なのは……ボク、ボクは……」

「頑張りましたね、レヴィ。貴女の強さ、しかと胸に刻み込みまし
た。文字通りに……ね？」

「うっ…ひっ…っ……ごめ、ごめ、な…さ、い…」

「ほらほら、負けた私がこんなにも清々しいのに、勝った貴女が泣
いてしまってどうするんですか？」

私はバリアジャケットのアウトスカートの裾でレヴィの涙を拭いていきます。

大人の身体になったからでしょうか？

なんかこう、守ってあげたくなるんですよねえ……。もしやこれが俗に言う母性本能という物でしょうか？

私はまだ泣き止まないレヴィをそっと抱き締めると、背中を優しく軽く叩く。

撫でるよりもこっちの方が個人的には落ち着くので。

「な、のは……」

「なんですか？」

「もっと……名前、呼んで……ボクの……名前」

「…レヴィ」

「ん……」

私がレヴィの名前を囁くと、レヴィは嬉しそうに私の胸に顔を埋めてきました。

いつの間にかケガも治ってバリアジャケットも直って

なんなんですかね？この空間？

トランザム・バーストによる意識共有空間のように、エーテル版の意識共有空間なんですかねえ？

まあ、どうでも良いですか

「レヴィ……そろそろ時間のようですよ？」

「やだ！なのはから離れたらまたなのはと戦わなくちゃならなくなる。そんなのやだ！！」

「わがままを言うてはいけませんよ？レヴィ。貴女はフェイトの剣なのでしょう？あの言葉は、偽りなのですか？」

「ウソなもんか！！ボクはフェイトの剣だもん！！でもなのはと戦うのもやだ！！」

「レヴィ、私も貴女も互いに引けない理由と想いがあります。私達の目標が共通である限り、私達は戦わなくてはなりません。それは互いに譲れないものを背負っているから」

「……やだよお………そんなの……」

「レヴィ。貴女はフェイトを守る剣なのでしょう？自分の言った事を貫き通せない貴女には、力で勝っても、心では私には勝てません」

「べ、別に、ボクはなのはに勝ちたいわけじゃ」

「私を倒す。そう言ったのは貴女ですよ？」

「そ、それはほら！い、勢いだよ勢い！フェイトがやられて、ボクもちよつとアタマにきてたから」

「自分の発した言葉には責任を持ちなさい。良いですね？」

「うっ……はあい……」

はて、なぜ私はレヴィに説教紛いの事をしているんでしょうか？

まあ、良いでしょう

「レヴィ、ひとつ言葉を教えます。私が好きな言葉のひとつです」

「なのは好きな言葉？どんなどんな？」

「慌てない慌てない。コホン 善でも悪でも、最後まで貫き通せた信念に、偽りなどは何一つない」

「善でも悪でも……」

「最後まで貫き通せた信念に」

「偽りなどは何一つ」

「「ない」

「カッコイい！！カッコイいね！なのは！」

「カッコイいと感じるだけではダメです。この言葉の意味を、胸に刻みなさい、レヴィ。たとえ私達が今日明日にも再びぶつかり合うとも、私達は互いの信念を貫き通して戦わなくてはなりません。私は自分の信念を貫く為ならば、貴女とも、フェイト・テストロツサとも、戦います」

そう、私の行いが自己満足だろうとも、私は私の意志を貫く！

「たとえ相手が誰であろうと自分の信念を賭けて戦うコトに、悔いなどありません」

「……なのははスゴいや。ねえ、なのは何歳なの？」

「精神的には9歳ですが、身体は25歳くらいでしょうか？」

私があの時イメージしていたのは、最強の肉体。高町なのはとしての最強像は、やはり25歳の高町なのはですから、多分そんな感じになっているはず。それなら母性本能も湧いて当たり前ですか、ヴィヴィオを育てていっばしのお母さんをやってるんですからね。

「すっごーい！オトナだオトナ！」

「まあ、それ云々はともかく、レヴィ。貴女も、貴女の信念を貫き

なさい。たとえそれが険しい道でも。そしてその道の果て、その道の先が私と交わることあらば、私達は互いに戦うのではなく、共に戦う未来もあるでしょう」

「ほんと？ボクとフェイトとなのはと一緒に戦えるの？」

「貴女が自分の意志と信念を貫き通した先、貴女がその未来を信じるならば、いつか必ず」

「……わかった。それじゃあなのははその時までボクのライバルに認定！！うん、ボクって天才だね！！」

「ふふっ、次は勝ちますからね、私が 私達が」

「ボクも ボク達だって負けない！！」

私達は互いに拳を突け合い。意識がまた真っ白に染まっていった。

「大切な存在を死守せんとする強い意志 言葉の意味が少し通じませんが、あの子も、そういう子なのでしょうね」

羨ましい。私には出来ない戦いです。

『私よりご自分の心配をなさってくださいよ。バカマイスター』

「ふふつ、私は大丈夫ですよ。でも、どう説明しましょうかねえ…
…これ」

未だにバリアジャケットのままの自分を見る。肩と胸部に掛かる重量感がなんとも

「戻れないの？なのは」

「つい勢いでやっちゃいましたからね。戻り方がわかりません」

「あんた非常識も程々にしなさいよ……」

『俺は今のナイスレディブラザーの方が好みだがな』

『黙れエロ助』

『ウエイト。不思議の国のアリス。頼むからサーベルはやめてくれ』

「まあ、なんとかなるでしょう」

「……あんた寿命縮んでるかもしれないのに、本人がそんなに暢気で良いの？」

「慌てても仕方ありませんよ。アリサ、とりあえずは状況をどう上手く話せば良いのかを考える時ですよ。とりあえずはすするかへの謝罪文でも考えておかないと、月村ライトニングボールテックスが落

ちてきますよ?」

「ううっ!!--ちよ、ちよっと!」コワいこと言っんじゃないわよなのは!!--」

「.....私も自分で言っつて恐ろしく思いました」

すずかは母様に似た、静かに怒るタイプですから、メンタルの弱い私には非常に恐怖を感じる怒り方なんですよ。

T o b e c o n t i n u e d . . .

第20話 互いに譲れぬ信念を胸に……（後書き）

レヴィがカワイくて死ぬそう……

ちなみに25歳星光なのはさんは、サイドポニーテールとかそんなんでなく、普通に垂らしたストレートで、前髪が目元に掛かるくらいに延びてます。

まあ、イメージ湧かないなら普通に25歳なForceなのはさんのイメージで十分です。

第一の山場の75%が消化出来てホント良かった。

皆さんの感想をお待ちしております。

ちよいとアンケートです！

もしもレイ八さんをハーケンやアリスのようにロボットボディにするならどんなのが良いでしょうか？

まあ、あまりコアとかマイナーなのでなければ大体わかるので、皆さん意見をじゃんじゃんください！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4448z/>

星光の魔王-シュテル・ジ・エルケーニヒ-

2011年12月30日01時50分発行